

天使の飲食店

茶ゴス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その者、天よりの使い也

神の意志に従い、歪みを正す為世界に降り立つ

それも数年前の話

既に歪みの原因、他の下級の神の送り込んだ転生者の処理を終えた彼は神より次なる仕事を乞う。

「予想以上に早く片がすんだけど、君をこっちに戻すの少し面倒だから取り敢えずそこの世界で寿命まで休暇ね」

「……うえい?」

「あ、自殺はしないでよ?更に面倒くさいことになっちゃうから」

「お、おう」

おおよそ数十年の休暇を言い渡された人間もどき(天使)は途方に暮れ自らのやるべきことを見つけ出す。

それは、飲食店の店長であつた

注意 時系列的には `striker`s あたりです

目次

第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第10話 (偽)	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
157	151	146	138	128	121	116	109	103	97	91	85	80	70	63	57	49	43	36	30	24	17	9	1

第47話	第46話	第45話	第44話	第43話	第42話	第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	【新たな】 食堂に現れた妖精【マスコット】	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話	第24話
347	342	336	328	321	314	306	299	293	287	276	261	254	247	243	235	228	221	216	208	195	187	180	174	167

第1話

キュツキュツと音を立ててグラスを磨く。

現在昼時なのに客は一人もおらず、ただ準備をしているだけという状況。

それもその筈、神様に休暇を言い渡されてやる事が無くなって始めたこの店、どう考えても立地条件が悪い。

お客さんなんてたまに来るくらいだし、適当に決めたルールもあるけどりピーターさんがよく来てくれるのは嬉しいね。火曜日はあまり来ないけど……

火曜日は日に一人や二人なんていうのはザラだ。

そんなので経営が成り立たないと思うかもしれないけれど、商売が目的ではないし、死ぬまでの暇つぶしをしているだけなので何の問題も無い。

ん？飲食店をするには許可がいる？ミッドチルダで店を構えていてもそれは適応されるね。まあ、ちよこちよこつとやって許可を貰ってます。

調理師免許は持ってないけど、腕自体は仕事の過程で嫌でも上達というか、美味しい料理を作れるようになったので問題ない。

今は人間の身だからちゃんと味見もできるし間違いない美味い部類であると思う。

お客さんも美味しいとか言ってくれるし……

まあ、自分の見た目が見た目だからあまり信用はされてないかも知れないけど……

なんせまだこっちに来て15年なのだ。無理も無いだろう。

普通なら中学校や高校に通っているんだっけ？学校に行ったこともない自分にとっては少しばかり興味はあるけど、一度学校に入ると嫌でも身元が知れ渡ってしまうってミカエルさん言ってたし、それはちよつと面倒くさくて断念したんだよね。

だからやることを探した結果店を構える事になったんだよね。

はあ、仕事引き受ける時には少しも考えてなかったよ、こんなに暇だなんて。

かと言って手を抜いて長引かせても怒られてただろうし、こんなんだったら引き受けるんじゃないよ。

いい経験になるかと思ったのに、仕事が難しかった訳でもなかったし……

つと、店の扉が開いた。珍しくお客さんかな……

と思つたら買い出しから帰ってきた自分だった。

そういえば朝に行かせたんだっけ……

え？状況がおかしいだつて？何で自分が2人もいるのか疑問に思っているの？

えつと、それには理由があつて。僕の仕事、世界の歪みを治すつて言うのは、下の方の神様が面白がつて世界に誕生させた転生者達の処理なんだよね。

あ、処理つて言つても殺してるわけじゃないよ。記憶と力を回収してただの一般人に戻しているだけだからね。

まあ、その回収した時の力の中で影分身の術とか言う物があつて。それで自分の分身を生み出しているわけ。

確かガブリエルさんが読んでた本の中にこんな術を使っている登場人物がいたと思う。

まあ、転生者の力を回収し終わつて、その力も消すことすら出来ないんだね。だからあるのなら有効活用しようつてことで使わせてもらってます。

だつて、分身とか時を止めるとか結構便利なんだもの。

ああ、そうそう。その転生者を誕生させた神達は、ルシフェルさん達に説教とお仕置きされたらしい。あまり勝手に世界を歪めるなつてさ。

でもまあ、転生者つていうのは凄いな。色んな力を思いつくものなんだから。えつと、この世界に誕生した転生者の数は全員で108

人だったかな。その一人一人が面白い力を持ってたし、人によっては遊んで暮らせるお金を望んでいる人もいた。まあ、回収しちやっただけでそのお金も僕が貰っちゃってるんだけど……

あまり価値はわかってないけど、取り敢えず生きるのに困ることはない。だからこそ、こんな店が成り立ってるんだよね。

お？ ドアの開く音。今度こそお客さんかな。他に分身を出してないし、この店には従業員は自分だけだ。

予想通り、お客さんのようで、少し身長の高い女性が入ってきた。少し広めの店だから席には余裕ある。

取り敢えず好きな所に座ってもらおうかな。

「いらつしやいませ、何名様でしょうか？」

「……………あ、ひ、一人です」

「かしこまりました。お好きな席に掛けて注文が決まり次第お呼びください」

そう言い、カウンターに戻る。お客さんがカウンター席に座ったのを確認し、水を置いておく。

「あの店員さん、注文いいですか？」

「はい」

この店のメニューは結構豊富だと思う。値段も良心的だし、案外いい店だとは思うんだ。

お客さん少ないけど……

「Bランチの飲み物ホットコーヒーでお願いします」

「かしこまりました」

時を止め、料理する。Bランチ。内容はバターライスにドライカ
レー、生ハムが入ったサラダ、それと飲み物だ。

ミッドチルダではお米などの材料は手に入らないので、全部地球で
買ってきたものだ。まあ、長い間地球で活動してきたから色々知って
いるからなんだけどね。・

食材は自分が食べたり飲んだりしたもので一番美味しいと感じた
ものを選んでいる。値段は食材費を考えずにだしているので、普通の
店だったら大赤字になるんだけど、正直興味ない。寧ろ料金考えるほ
うが面倒くさくて、いらなくらいだ。まあ、タダ飯というのは別の
意味でお客さんがいっぱい来ちゃうので値段は地球の日本で見かけ
た飲食店を目安にしている。

調理し終え、注文の食べ物をお客さんの目の前に置いて時を動か
す。

「うえ!?いきなり現れた!?!」

驚いたみたいだ。まあサービスは行き届けないと行けないから、お
客さんにとって注文してから直ぐに食べれるように配慮しているの
ですよ。

「どういうことなん!?!」

「一種の手法ですよ」

「……納得出来んけどまあええか。それより店員さん。店員さんって
地球出身?」

「ええ、(この世界で)生まれたのは地球ですよ」

「へえ」

目の前の女性はコーヒーを飲みつつ呟く。

地球を知っているってことはこの人も地球出身なのだろう。まあ

それもその筈、Bランチを頼むくらいだから予想はしていたよ。因みにAランチはミッドチルダで馴染みのある、Bランチは自分にとって馴染みのあるメニューにしている。

「つて、このコーヒーものごつつ美味しいやん！」

「それは何よりです」

「こんなの初めて飲んだわあ……なんてコーヒー豆使ってるんですか？」

「えつと、サンタクララ農園つてところの豆ですね」

「へえ……聞いたことないや。何処で売ってるんですか？」

「地球のグアテマラつて所ですよ」

「……うーん。何処かで聞いたことあるような気がするけど、あんまり覚えがないなあ」

確か近くにアメリカつていう大きな国があった気がする。

つと、忘れていた。時を止めて使った調理器具を洗う。あまり洗いや物をしている所を見られるのは良くないよね。

水を切り軽く布地で拭いて直しておく。元の場所に戻って時間をすすめる。

こういう所のマスターつていつもグラス拭いてるイメージあるから無駄に綺麗なグラスを量産していく。

「おお、このドライカレーも凄い美味しい。久しぶりつていうんもあるけど、値段見たら考えられやんくらいやで」

「ありがとうございます」

「うん。何でお客様さんがおらんのか不思議なくらい」

「そればかりは……」

「ああ、それと一つ聞いていいですか？」

「はい。大丈夫ですよ」

「店員さん、何歳？随分若く見えるけど」

「えーつと、生まれてからの年でいいんですよ？」

「それ以外に何かがあるんよ」

実年齢じゃなくていいんですね。えっと、自分がこの世界に生まれて15年だったか。実年齢だったら247歳だっという子供なんだよね。この世界の人にとってはだいたいぶ長生きなのだろうけど……

「15歳ですよ」

「へえ……って15歳!？」

うお!?!びつくりした……

そんなに驚くこと？

「苦労してるんですね……」

「まあ、それなりに」

暇で暇で仕方ないんですね。

「って、今思ったけど、どうやって食材とか仕入れてるんですか？」

「普通に買ってきてますよ？」

「……へ？」

分身して転移したらすぐ着きますしね。

転移じゃなくても、ルーラっていう呪文使っていけますし……

「……まさか密航者？」ボソ

「ん？何かおっしゃいましたか？」

「い、いえ何も言ってますん!!」

何か言った気もするんだけど……まあいいか。気にすることではないと思うし……

「あ、あの。この店って定休日とかありますか？」

「ああ、それなら表に予定表のような感じで書いてますよ」

「わかりました。じゃあそろそろお会計の方よろしくお願いします」

おお、いつの間にか食べ終わってたみたいだ。もうちよつとゆつくりしていてもいいのに……まあいいか。

えつとお金の方は……

「Bランチ、500Gです」

「はい」

チャリンと貨幣一枚を置かれる。だいたい日本円で600円のランチメニュー。安い方なのかな。

「じゃあ、美味しかったです。またきますね」

「ありがとうございます」

お客さんが扉を開けて出て行ったのを確認して食器を洗う。

さて、また暇な時間がくるのだろう。まあ、午前中に2人お客さん来て、さつきも来たから3人。火曜日にしては中々の客入りだ……

「なんでやねん!!」

……店の外で何やら声が聞こえた。

さつきの女性の声に聞こえるけど……

「ちよつと店員さん!!」

おお、お客さんがドアを開けて入ってきた。忘れ物かな?でも何か様子が変なきが……

「表の看板にある内容！おかしいで！」

え？おかしいかな。勝手に決めたルールに則って決めたんだけど……

確か内容は……

|||||

飲食店 天使始めました

営業予定

日曜日 昼：うどん屋

夜：休み

月曜日 昼：ハンバーガー店

夜：レストラン

火曜日 昼：喫茶店

夜：牛丼屋

水曜日 昼：休み

夜：フランス料理店

木曜日 昼：ラーメン屋

夜：ラーメン屋

金曜日 昼：喫茶店

夜：居酒屋

土曜日 昼：レストラン

夜：バー

|||||

うん。おかしな所はないな

「ミッドナイトはなこで！」

あ……

第2話

正直半信半疑やった。

あの変な喫茶店の前に書いてあった看板の内容。日によって飲食店の内容が変わるといふもの。私があのお店に入ったのもただの気まぐれに昼食を取ろうと喫茶店に入っただけだった。

外から見ても内装を見ても何処からどう見ても唯の喫茶店。他の客はおらんけど、何か居心地の良い店。店員は若干幼さが残る顔をしている男性。いや、実際幼かったんやけど……

その店員さん、本人曰く店長さんの作る料理は正直驚いた。一度グレアムおじさんに連れてかれた高級フランス料理店に劣らないどころか下手をすれば勝っている料理。しかもあの値段。あり得ん……

返ってからコーヒー豆の値段調べたけど、正直びっくりした。200g3000円はする豆、スタバでも900g2000円から4000円や。それであの値段やのに、天使つちゆう喫茶店は手頃なランチに付いてくる。正直ウソっぽい。流石にそれじゃあ商売としては成り立たないと思う。せやけどあの美味しさはそこの豆じゃあ出せやんのよな。そう考えたら結局500Gであのクオリティはあり得やんってことや。決して安物を使ってるわけやない。せやのにあの値段。気になる。

それにもう一つ気になることが……あのお店長さん。魔力こそ感じれんかったけど、こう威圧感というかなんというか、大物っぽい雰囲気を持ってた。最初店に入った時は思わず吃つてもたわ。

とまあ、色々考えては見たもののもう一回いかん事には話しにならん。幸いにもあの店に行った日から二日後の今日は仕事が終わるのが早かった。せやから暇してたザフィーラとヴィータを連れて店に来たんやけど……

「ホンマにラーメン屋やん!!」

見るからにラーメン屋だった。暖簾がかかっているわ屋根の色が違
うわ。建物自体が違うようにも見える。更に言えば入り口のドアも
変わってる。普通の喫茶店やったドアから引き戸になってる。一体
どういうことなんや……

「なあ、はやて、ここであってるのか？」

「その筈や。でもおかしいわ、二日前はちゃんと喫茶店やったんやで」
「一体どういうことだ」

ホンマにわからん。

あ、でも店の名前は一緒や、”天使始めました”

……天使って名前ちゃうんかい！

店名おかしいやろ！いや、店自体おかしいわ！

「なあはやて。前言ってた看板見当たらねえぞ」

「あ、ホンマや。曜日はないって事言ったから片付けたんかな」

「……主、何か機械のようなものがあるが……」

看板があつた場所には丸っこい小さなロボットみたいなやつが転
がっつる。なんかどっかのアニメに出てきそうな黄緑色で丁寧な
顔も着いてるのがわかる。

『オキヤク、オキヤク』

「うお、はやて！こいつ喋ったぞ！」

「デバイスのようなものか……」

絶対違うと思う。だってこれ、見たことあるもん。日本に居るとき
にテレビでやってたあの超有名なロボットアニメにでてくるマス
コット

『オシラセ、オシラセ』

「これ、ハロヤん!!」

『ハロチガウ、ボク、矢澤』

「誰やねん!しかも何でそこだけ流暢に話すねん!」

『ニツコニツコニー』

ホンマなんなんこの店。突っ込みどころが多すぎるで!!

「で、一体こいつは何の役割を持ってここに転がってるんだ」

『ジヨウホウ、ジヨウホウ』

え?なんか頭が割れて光った板が出てきてる。

『タンマツ、タンマツ』

ええつと、ここに携帯電話乗せればいいのかな?

『シヨウニン、シヨウニン』

「承認って、一体何を……」

『ミセ、ナイヨウ、ヒツケ』

店の内容の日付なあ、なんか10日後の店の内容を知らせてくれるとか?

『メール、メール』

「え?」

いきなり何かからメールがきた。

発信者は矢澤ハコ……目の前のこいつか。内容は……10日後の日付に昼:うどん屋、夜:休みという内容……

「こいつ、心読みよった」

『カンガエル、メールクル』

……一体どういふことなんや。どういった原理でこっちの心を呼んでそれにあつた情報をメールで送つてくるなんて……

「でもこういうのって関係ないメール送つてこやんの？」

『メール、ミセノナイヨウダケ』

「……わかつたわ、つてか曜日がなくて看板がダメに成つたからこれになつたつていふんか」

『セイカイ、セイカイ』

ホンマにあの店長さん何者なんや。こんなん発展してるミッドでもオーバーテクノロジーちゃうの……

「なあ、はやて、そろそろ食わねえか？腹減つちまつた」

「せやな。じゃあいこか、二人共」

「ああ」

背後でニユウテン、ニユウテンと言っているハ口もどきを無視して暖簾を潜る。

店内は喫茶店のように広いけど、まるつきり内装が変わっていた。いや、おかしいやろ。毎日短期間リフォームでもしてるつていうんか。

「らっしやい！何名様で？つて、一昨日の」

「……店長、キャラ前とぜんぜんちやうやん」

「いや、なんかこつちの方が今の店にはあつてると思つて」

まあ、そうやけど……なんか納得できやん

「折角もう一回来てくれたんだ、今日は半分にまけてやる」

「お、良かったなはやて。ラッキーだぞ」

「……もうええわ」

「好きなところに掛けて待つといてくださええ！注文決まり次第呼んでくれたら向かいますので！」

今日は3人ということなのでテーブルに向かう。

ちゃんとラーメン屋らしく、ホワイトペツパーにブラックペツパー、ニンニクに唐辛子、爪楊枝に割り箸、小皿が置かれてる。なんか小さな壺みたいなのもあるけど……

席に座って壺を開けようとする。

目の前に水の入ったコップが現れた。

「なあはやて、おかしくないか？」

「何も言わんでええでヴィータ。私も思つとるから」

「……いつ置かれたのが全くわからなかった……」

気を取り直して壺を開けてみる。中には美味しそうな高菜がある。よう見たらテーブルの横にある壁に貼られた紙に高菜のおかわりはお一人様一回までと書かれていた。

高菜は後で貰うとして、メニューを開く。

ああ、普通のラーメン屋とは違ってこれといったコダワリがないだろう。醤油ラーメンから味噌ラーメンや豚骨、基本的な物を抑えてある。鶏ガラも美味しそうやし迷いどころや……

サイドメニューは普通に餃子とかがあるって感じか。炒飯もあるねんな……

「ヴィータは何食べる？」

「何でもいいけど、結構ガツツリ食べたいな」

「じゃあ豚骨チャーシューかな。ザファイーラは？」

「私はこのスタミナラーメンというものを……」

じゃあ、私は……あれ？この一番下のラーメンだけ変やな。スペシャルラーメン？途中で味が変わる？ちよつと気になるな……これにしよか。

「てんちよー！」

「はい。ご注文はお決まりですか？」

「えつと、豚骨のチャーシュー麺にスタミナラーメン。それとスペシャルラーメンって奴と餃子3人前をお願いします」
「かしこまりました」

メニューを置いて高菜を小皿に盛る。

蓋をして視線を前に戻すと、そこには美味しそうなラーメンに餃子がある……

「なあはやて……」

「何も言わんでええでヴィータ」

「……全く見えなかった……」

「……まあ食べようか……頂きます」

「頂きます」

割り箸を割り、麺をすする。

おお、美味しい。少しこつてり系の豚骨ラーメンって感じや。具の海苔も美味しい。チャーシューも一級品や。麺にスープが絡みついてすごい味わいになってる。箸が止まらへん……

「はやて！ギガうまだぞこれ！」

「確かに、この旨味の中にある辛味、食べたことがないほどだ」

「これは凄いなあ。餃子もすごく美味しいし」

これでラーメン400Gって安すぎとちゃう？

って、なにこれ！食べてる途中でいきなりスープの味が豚骨から魚介に変わった！

「へっへっへ、驚いたかい？お客さん」

「一体どういことなんや！なんの前触れもなくいきなり魚介スープになったでー！」

「簡単なことよ。お客さんが食べる速度を予想して、いい具合に溶けるようにたつぷり魚介エキスを閉じ込めた玉を落としておいたのさ」

一体何者なんやこの店長！キャラが一昨日と全然ちやうやん！

「何でこの店が繁盛してないんや！味も値段も最高やん！」

「いやあ、日替わりで変わるからじゃやないですかね」

「わかって何でやってるんよ!?!しかもキャラぶれぶれやで！」

「あ、すいません」

いやいや、謝らんでもええんやけど……

「おかわり!!」

「へいお待ち！」

いや、ラーメン屋でおかわりがノータイムで来るってどういうことなんよ……

お待ち、って全然待つてないで……ヴィータ、もう気にもせずにごどん食べてるわ。私も気にしやんほうが良さそうやな……

「私にももう一杯貰えないだろうか？」

「へい、かしこまり！」

ってかホンマに美味しいな。この値段やしちよくちよく来るのも

有りやな……

後、この店長の正体も確かめやなあかんし……地球に密航してたら流石に見逃せやんのよな……

でもこんな状況でいつ買い出しに行ってるんやろか……

休みの日もあるけど、半日で往復はいくらなんでも無理がある気がする……誰かに送ってもらってるんやったら犯罪でもないから問題ないんやけどなあ……

一昨日の口ぶりから察するに自分で買いに行ってるっぽい……どうしたらええんやろ……

あ、高菜美味しい。

第3話

飲食店天使始めました、それを経営しだしてから既に1年近く経っている。店の売上は常に赤字だから普通の店なら潰れてるのだろう。まあ、自分自身の暇つぶしで始めた店なので売上にはあまり興味はない。それよりも客が少ないというのが少し寂しい。

来てくれるお客さんはみんな笑顔で返ってくれるのが唯一の救いだけど、少し欲が出る。

「そのの所どう思いますか？プレシアさん」

「そうね、普通にどれか一つに絞れば増えると思うわよ？」

「ははは、ご冗談を」

土曜日の夜、バーに改装している店のカウンターに座る女性のグラスにウイスキー、ダルモアを注ぐ。これは力を使って熟成させてるもので、市場に出回ってる物を目安に60年程熟成したものになっている。

因みに改装はこの店の機能の一つだ。回収した力の中に篠ノ之束の技術っていうのがあって、色々と作れるようになったんだよね。それで店を改造して、簡単に改装出来るようにした。

目の前でグラスを触る彼女は週に1度来てくれる常連さんだ。開店してから少し経って現れた人、何でも娘さんが独り立ちしてから暇してるそうだ。

一応仕事はしているものの、あまり多くはなく、定時にはペットの住む家に帰る毎日だそうでこうやって顔を出してくれるいい人。

一度ペットという名目で一人の女性を連れてきたことはあつたけど、その人はお酒を呑んだら直ぐ寝ちゃって少し大変だった記憶がある。

赤髪で自分よりも身体の大きな女性を運ぶのはなんだか難しかった。腕力は仕事の都合でとんでもないことになってるから重くはなかつたけど、如何せんバランスがね……

「全く、本気で商売しようと思ってるのに今更何言ってるのよ」
「だって、美味しそうな顔で食べてくれる人が多いほうが嬉しいじゃないですか」

グラスを傾けつつプレシアさんは呟く。

もう長い付き合いになるのでよく愚痴を聞いたり聞いてもらった
りする仲なのだが、最近事あるごとに娘さんを進めてきて少し困って
いる。

何でも男の影も感じれない子らしくて、男に耐性がないうちに悪い
男に引つかかるのが不安だと言っていた。正直自分は恋人を作った
り結婚したりする気は毛頭ない。自分は今は人間といえど元々は天
使。価値観などもズレているため人間を愛することは出来ても、それ
は慈愛の心だけなのだ。人間たちのように愛を育む事は出来ないだ
ろう。

「この店って経営成り立ってないのでしょうか？」

「まあ、使い切れないほどお金もあるので」

「……ホントに変な子よね。貴方」

そうそう、そういえばプレシアさんからは色々話を聞いている。お
酒に酔って聞いたらいけないようなことまで教えてくれるんだよね。
例えば、プレシアさん、一度死にかけてた所を小さな男の子に助けら
れたとか。

何でも虚数空間という所に飲まれそうだったのを助けてもらって、
不思議な力で不治の病を直してくれたらしい。確か10年くらい前
の話らしく、その男の子を探してみたものが見つからなかったそう
な。その時一緒にいたもう一人の娘は助からなかったそうだけど……

なんだか聞き覚えのある話だって、僕は直ぐ様神様に確認したんだ
よね。その時に僕が歴史を歪めたってことを教えられた。

その時怒られるのかと思ったけど、神様曰く僕は特別製らしくて、

僕が歴史を歪めてもそれが正史になっちゃうそうさ。下級の神達は他の世界の物をそのままの存在で構築しか出来ないらしくて、その人達が歴史を歪めると世界が崩壊しちゃうらしい。でも僕をここに送り込んだ神様みたいに、この世界の人間として一から構築し、世界の理を弄れば問題はなかったそうさ……

全ては下級の神達の力量不足が招いたことだと神様が言っていた……

「そういえば表においてあった看板、なくなってたわね」

「ああ、今週にある地球出身の女性が教えてくれたんですよ。ミッドチルダに曜日はないって」

「あら、そうだったの。一年も気付かないから面白くて黙ってたのに、余計なことしてくれるのね」

「気付いてたなら教えて下さいよ」

プレシアさんのグラスが空になっていたので注いでおく。

「にしても地球出身ね。あまり見かけないと思うのだけれど」

「そうですね。この店、ミッドチルダの料理より地球の料理のほうが多いからそれで客が少ないのかもしれないです」

「……一理あるけど、話が少し飛躍しているわよ」

「あはは、そうですねか？」

「まったく……」

自分のグラスに入ったミルクを飲む。

お酒は飲まないのかだって？一応地球の日本出身の自分は20歳までお酒は飲まないつもりだ。何でも身体に良くないとかなんとか……

「相変わらず真面目なのね。お酒なんて飲まなきゃ味の善し悪しはわからないでしょ？」

「だからプレシアさんやリンディさんやグレアムさんって人達には感謝してるんですよ」

「……貴方、その二人と知り合いなの？」

「はい、2ヶ月くらい前からちよくちよく居酒屋の日に来てますよ」

「……知らなかったわ」

「えっと、プレシアさんのお知り合いですか？」

「まあ、そんなところよ」

本当にこの人達には感謝している。初めて来た時に色々とお酒がいいのかを教えてもらって店に置いてあるのだ。教えてもらってなかったら味の悪いお酒を置いていただろう。

「それで、貴方後何年で飲めるんだったかしら？」

「一応戸籍上は5年ですね。まあ肉体的には後半年ですけど」

「……貴方、そのレアスキルまだ使ってるのね」

「色々と便利ですから」

そう、自分はこの世界に誕生して15年生きている。だけど、それ以上に活動しているのだ。

「どうやってだつて？簡単だよ。時を止めてるから。」

時を止める力を手に入れてからは結構多用した。仕事中や作業中はよく使ってるし……まあ、そのせいでいたい19歳くらい肉体的には経過している。まあ、時間が止まっている間はエネルギー補給等に行っていない為、身体的な成長速度がおかしくなって見た目は普通の15歳くらいなのだろうけど……

「使うのはやめておきなさい。切羽詰っているってわけでもないでしょう？」

「別に大丈夫ですよ」

20歳迎えたらちゃんと制御して体内時間も弄るので。

そんなことが出来るのかだつて？自分の肉体を数値化して弄れるっていう力を回収したから出来ないことはないよ。ただしてないだけなんだよね。

「……はあ、人の話を聞かない子ね」

「ははは、でもありがとうございます。心配してくれたんですね？」

「別にそんなわけじゃないわよ」

お酒を飲んでるせいかな少し顔が赤くなっているプレシアさんがウイスキーを一気に飲む。

そして空のグラスを置いたのでまた注いでおく。

「何か作ってくれないかしら。時間かかってもいいからレアスキルを使わないで貴方の料理する姿を見せて頂戴」

「かしこまりました」

ウイスキーに合うものか……適当に作ろうかな。

クラツカーを並べスモークサーモンとプロシユートを薄くスライスしてその上にのせる。

次はゴーダチーズをスライスしてクラツカーに乗せた更に並べる。少し深めの皿にナッツを入れ、2つの皿をプレシアさんの前に置いた。

「早いわね」

「そうですか？」

「ええ。それに相変わらさずこの店には何でもあるのね」

「何でもありませんよ」

ナッツを摘むプレシアさんは少し微笑みながら呟く。

『オキヤク、オキヤク』

カランと扉の開く音と、表のロボットの声が聞こえた。取り敢えず時間を止めて入り口に移動して来客を確認する。

「アルフ、ここに母さんがいるの?」

「そうさ。夜居なくなる時は大抵ここだよ」

お客さんかな。プレシアさん以外でバーの時に来るのは久しぶりかな。

「いらつしやいませ、つてああ、アルフさんですか」

「おう、久しぶり。よく覚えててくれたね」

「こんばんは」

「はい。プレシアさんを探しに来たのですか?」

「ああそうだよ。いるかい?」

「はい。カウンターでお酒を呑んでますよ」

「了解。行こうかフェイト」

「あ、待ってよアルフ」

相変わらず豪胆な人というか何と言うか……まあいいか。時間を止めてカウンターに戻る。

「またレアスキル使ったのね?」

「便利ですから」

「……はあ、で珍しく客でも来たのかしら? 私は放っておいてもいいわよ」

「珍しいって、まあ否定はできませんけど」

バーの時はカウンターが入り口からは見えないんだよね。少し進

んで曲がったところにある感じで……

「あ、いたいた。ってあんたさっきまで後ろにいなかったかい？」

「手品ですよ」

「……命を削ったね」

「……うん？まあいいか」

「にしてもどういう風の吹き回しかしら？アルフがここに来るなんて」

アルフさんは……ノンアルコールのカクテルでも作っておくか。

「母さん、久しぶり」

「急にフェイトが家に来たからね。連れて来てやったのさ」

「そう。ありがとう、アルフ」

ああ、この人がプレシアさんの娘さんなのか。随分と大人びているなあ。見た目は普通に成人してそうだけど……

まあ未成年だって聞いているからフルーツジュースでも出しておこう。

第4話

うどん職人の朝は早い。「食べ物美味しいと幸せだからね」と客も多くは見込めない店を開く店長は言う。麺を捏ね、寝かせている生地の時をいい具合で止めることで生地乾燥を防いでいる。

うどんに合う付け合せの調理の下準備に出汁の選定までを行い店を開く。

営業時間は朝の6:00から昼の15:00まで。

普段店の表にて売り子をしているロボットは朝の間は店の前で眠っている。何故か『スピピピ』と言っているのだが、その理由は製作者である店長にもわからないものだ。

早速ガラリと扉を開いてお客さんがやってきた。隣りに住む厳格そうな顔つきの男性だ。

男性は無言で店に入るとそのままカウンターに座り小さな声で「月見」と告げる。その次の瞬間男性の前に月見うどんと水、そして小さなおにぎり、そして伝票が現れた。

男性は割り箸を割り、麺をズズとすすする。

出汁を飲み、少しして中心にある卵を割り、麺と絡める。

また麺を啜り、いつの間にか現れた小鉢に入ったネギを入れる。

おにぎりを食べ、うどんも食べる。

そうして食事を終えた男性は伝票を持ち、レジに立っている店長に月見うどん200Gとおにぎり50Gのお金を置いて出て行った。

「……伝票の欄におにぎり書いてないんだけどね……」

そう呟く店長は少し微笑みながらそのお金をレジの中に入れた。

◇
『オキヤク、オキヤク』

そう聞こえてきたのはフランス料理を開いている夜の事だった。

店の雰囲気にもマッチしていないロボットの声に入ってくる客は苦笑している。聞いた話だとその姿が小さな子供が頑張ってお仕事をしているように見えるそうだ。

ちゃんと売り子の仕事をしているのに安心してつとも来店してきたお客さんの相手をする。

「いらつしやいませ、お客様」

「あ、こんばんは。予約をしていたテスタロッサです」

入ってきたのは以前来たことのあるプレシアさんの娘であるフェイトさん。隣にはフェイトさんと同じ年くらいの栗色の髪をした女性立っていた。

「うう、こういう店初めてで緊張するなあ」

そう呟く女性にフェイトさんは苦笑する。以前のバーの時とはまた違う雰囲気を持ち、あたかもテーブルマナーに厳しい店のような雰囲気を感じるが、正直テーブルマナーを自分自身わかっていない。せいぜいコース料理の知識と皿の並べ方等という店側のルールくらいだ。

「では、こちらです」

二人を促し、既に用意しておいたテーブルに案内する。

席を引き、座らせてから飲み物のメニューを指し、何を頼むか聞く。フェイトさん達は未成年なのでメニューにアルコールの入った物

は入れていない。

と言ってもあまりメニューは豊富ではないんだけどね。

「えっと、ミネラルウォーターをお願いします」

「私はオレンジジュースください」

うん、フェイトさんってなんだか少し子供っぽいところもあるよね。中々オレンジジュースって頼みにくいと思うのだけど……

まあいいや。テーブルに注文の飲み物と前菜である魚介のカツペリーニを置いておく。

コース料理のメニューはテーブルに置いておいた。

と言っても、ちゃんとしたフランス料理店ではないからコース料理って本当はないんだよね。フェイトさんにもそれは伝えておいたから知ってる筈なんだけど、同僚の女性が困っている姿を見てみたいとのことでコース料理を装っているわけ。だから出すのはコース料理のスープまで。それからはネタばらしして普通に注文してもらう事になっている。

フェイトさんはなれたような手つきで食べているけど、あれだからね？本当はナプキンは膝においておくんですよ？まあ、口元拭くのにも使うからテーブルにおいておきたいのはわかりますけど……

同僚の人は少し慣れないながらもちゃんと出来ているっぽい。本格的なものは知らないから判断つかないけれど……

二人共前菜を食べ終えたようなので皿を下げてスープを出しておく。この時、使ったフォークとナイフも下げたのを疑問に思っていたのかフェイトさんは首を傾げていた。

うん。もう何も言わないよ。

スープはオーソドックスにコンソープ。初めてでも飲みやすい

からね。

「ふふ、なのは、美味しい?」

「うん。美味しいよ。でもちゃんと出来ているか不安だよ」

少なくともフェイトさんよりは形になっていると思います。

「そっか、でも私も出来てないと思うんだ」

「うん、それはなんとなく気付いてたよ」

「え?」

あ、フェイトさんが此方を見てる。えっと、あまり出来ていないのかだつて?まあ、そうですね。少し苦笑いを浮かべながら小さく頷いておく。

フェイトさん顔を少し赤く染めながら俯いてしまった。

じゃあ、そろそろネタばらししておこうか。

時を止めてスープ、飲み物以外の物を片付け、テーブルの中心にナイフとフォークとスプーンが入った小さな籠を置いておく。

「え?消えた?」

フェイトさんにメニューを渡し、少し離れる。

「なのは、あのね。一つ言っておかないといけないことがあるの」

「何フェイトちゃん。私としては今日の前で起きたことに驚いてるんだけど」

「実はこの店、コース料理なんてないんだ」

「え?」

さてと、二人の周りに防音効果を付与した結界を貼っておこう。

取り敢えず方位で標的を指定、定礎で位置を指定。結で完成。直ぐ

様数值変化で防音効果を付与。

「!!?」

うん、何か叫び声をあげているけど聞こえないね。今のうちに時を止めて皿洗いしておこう。

◇

というわけで同僚の女性、高町なのはさんとフェイトさんから注文を聞く。

まあ、この注文もフランス料理にこだわらないで聞いた。だって、この一年、フランス料理店が一番お客さん来ないんだもの。もうフランス料理からちがう店にするかも検討中な程だ。

「こんなに美味しくて安いのにどうしてお客さんが少ないのかな」
「立地が悪いのかも……」

お二人さんからも心配される始末。いや、他の日はまだマシなんですよ？フランス料理がどうして人気無いかってのはちやんとした理由があるんですよ。

「へえ、どんな理由ですか？」
「フランス料理って、完全に地球の料理でミッドチルダの人知らないですから」

「ああ、成る程」

因みにラーメンもないけど、あれは匂いが外にまでするからお客さんが来てくれるからちゃんとお客さんはいる。何故かうどんや蕎麦はミツドチルダにもある。一体どうしてだろうか……

第5話

「人類には、はつきりと言って足りないものが存在する」

それはある一人のお客さんの告げた言葉だった。レストランとして開店している今夜、ここにいるのは自分と目の前のお客さん一行のみ。

夕飯時を少し超えている為他にお客さんが来店してないだけであって、レストランなのにお客さんが少なすぎるといっわけでは無い。断じて無い。

「この停滞した世の中に私は物申したいのだ！」

余程興奮しているのだろう。お客さん、白衣を着て声高々に宣言している男は娘に止められても構わずに右腕を振り上げて決してその言葉を止める様子はない。

一体彼を駆り立てるのは一体何なのだろうか……

「究極系の萌えと最強の燃えの探求を人類は必要としている!!!」

……何故だろう。言っていることは変なことなのにあの気迫は凄いと素直に思ってしまう。言っていることは変なのに……

「だからこそ店長!この矢澤ハコの秘密を教えてください!!」

「……………」

店の看板がわりのロボットを掴んで此方に向けてきた。

当のロボットは楽しげにニコニコとした顔で笑い声をあげている。作った時はただ情報を提示するだけの物を作っていたつもりだったんだけど、神様からの指示であるフォルムにし、味気ないと感じてしまい少しばかりAIを搭載してみた結果。よくわからない物になっ

てしまった。

必要はない筈なのに睡眠を取り、目を離していると勝手に自分を改造している。まあ、改造内容は掃除機能をつけるとか簡単なものだし、別にいいのだけど……

店の前を転がりながら掃除している姿は見ていて中々滑稽だったと記憶にある。というよりも疑問なのは腕もないのにどうやって自身を改造しているということだ。しかも碌に道具や材料を使わずに……

「ドクターが迷惑をかけてすみません」

「い、いえいえ。大丈夫ですよお客様」

珍しい家族だなあ。父親のことをドクターと呼んでるなんて。まあ、あの白衣からしてドクターって呼ばれるのはわかるけど……

「ごほん、熱くなりすぎていたようだ。それで店長、一つ聞きたいがいかな?」

「何でしょうか」

「そこまでの技術、君はどうやって身につけたのだ?」

えっと、技術ってことはこのロボットを作った事とかかな。それだったら下級の神達と転生者の産物なんだけど……どう言ったらいいものか。

「えっと……」

「いや、全ては言わなくてもいい。余程の理由があるとみえる。だが解せないのは君は科学者でありながら何故探究心が薄いのかということだ」

え? 探究心? 考えたこともなかったなあ。ロボットに関しても作り方の基本を知っているから作れているだけだし。そういう意味で

は科学者という言葉は僕よりも今も楽しげに飛び回っているロボットのほうが向いている気もする。

「何、ただ疑問に思ったただけだよ。同時に惜しいともね。君程の者ならば歴史に名を残せるということがだ」

いや、あまり目立ちたくないのですけど……一応仕事とはいえ本来自分はこの世界に存在してはいけないはずのものなのだ。それを世界を変革させてねじ込むという荒業を神様がしたわけであって、自分の行いにより世界がとんでもないことに成る可能性もあるわけだ。

「そこでどうかね？私と共に人類の課題への探求を行わないかね？」

人類の課題ってさっき言ったことかな。えっと、究極系の燃えと最強の燃え。可燃物を量産する事が課題なのだろうか。人間って中々ユニークな課題を抱えているね。

でもまあ……

「すみません。僕はここでこの店の経営を続けたいと思います」

「……そうか」

「はい。僕自身科学者ではなく、ただ知っているものを作っただけです。あのロボットも便利そうだから生み出したにすぎません」

「いや、本来創造とはそういうものだ。何も間違っではないよ………って少し待ってくれるかな？」

「はい。何でしょう」

「知っているとは、あの矢澤ハコのようなロボットの作成方法をか？」

「まあ、そうなりますね」

「君のような若い男が？」

「はい」

む？お客さんが考え込みました。何か変な所でもあったのだろうか

か。

「……これは良い事を聞いた。良ければだがいつか色々と研究に詰まった時に助言をいただけないかね?」

「ああ……まあそのくらいなら大丈夫ですよ」

まあ、そうなるという言葉で説明するよりも文章のほうが説明しやすいだろう。

取り敢えずロボットをこっちに呼ぶ。

『ヨンダ?ゴシユジンヨンダ?』

「ああ。認証モードになって」

『リヨウカイ、リヨウカイ』

頭がパカリと開き一辺10cm程度の薄く光る板が出てくる。まあ携帯電話の赤外線での連絡先交換のようなものだ。

「ほう、それは今から何をするつもりかね?」

「えっと、この板の上に指を置いてくれますか?」

「これでいいかね?」

「はい……ジエイル・スカリエッティさん認証できました」

「……っ!!」

「これで貴方が何かしらのメール機能を持った端末でこちらに連絡を取りたいという時にこのロボットが連絡します。それで情報のやり取り等を行いますよう」

「……一体どのような原理なのかは理解できない……しかし一ついいかな?」

「何でしょうか?」

「私の名に心当たりはないのかね?」

名前か……ジエイル・スカリエッティ……確か管理局における犯罪

者の名前だっけか……普通なら驚いたり怖がったりするものなのかな。でも……

「貴方が何者であろうと関係ないですよ。この店にお客様としてやってきている時は犯罪者も一般人も変わりありません。もし犯罪者として来るのであれば違いますけどね」

「……そうか。わかったよ、あと願わくば通報等はしないでおいでくれるかな？」

「はい。折角のお客様を逃す手はないですから」

犯罪者と言っても所詮はこの世界の生物にあることに変わりはない。自分達にとって善人も悪人も大差無いのだ。倫理観の違いに善悪は大きく変貌するし、存在として違う人間たちを自分達天使は慈愛の心でしか接していない。僕達天使や神というのは、人間が人間を裁くためにその名前を貸しているのであって、それ以外では基本的に干渉だ。

たまに神殺しという意味のないことを目指す人間もいるけど、この世界で殺せたとしても神自体が死ぬことはまずない。天使も一緒だ。天使が死ぬという時は神様や上司の天使によってでしか死ぬことはないのだから。

「君は不思議な男だね。若く見えるがその達観した様子はとても子供には見えない」

「そうですか？」

「……君を調べたくはなかったが、敵わなそうだしやめておくことにしよう」

調べるか……いや、調べてもあまり情報は出ないんじゃないかな。地球で調べてもあまりわからないだろうし……

「じゃあ、そろそろ帰るとするよ。ウーノ、勘定を頼む」

「はいドクター」

「えっと、食事とお弁当しめて2000Gです」

「はい。丁度あります」

娘さんからお金を受け取り頼まれていたお弁当を渡す。容器は使い捨ての物で中身は洋風の物で統一しておいた。

何でもこのお客さん、娘がまだいるらしく、家で待っているようだ。今度はみんな連れて来てくれるといいんですよ？

「……それで経営が成り立っているのかい？」

「大丈夫ですよ」

こうして風変わりなお客さんの来店が終わった。

第6話

「うーん……やっぱりおらへんか……」

地球への渡航者リストに目を通しながら呟く。最近の渡航者は私達やなのはちゃん以外におらへん。

数年にわたって見ても同じ名前が2つあることはないし、地球の滞在期間が長すぎる。

「これは、黒かなあ……」

思わずため息を吐いて資料を机の上に置く。

あの店長さん、個人的にはいい人やって思ってる。店もいい店やし、店長さんが犯罪者やとは思いたくはない。

「でも、見逃せやんなあ……」

あの店で地球の物を売っているのは事実。業者が輸入しているという事も調べたから無いことは解っている。

違法なルートで仕入れてるか、密航しているかのどっちかか……

「どうしたの？はやて」

「フェイトちゃんかあ……」

「これは……地球への渡航者リスト？」

六課の制服に身を包んだフェイトちゃんが資料を手にとって呟いた。

何か用でもあったんちゃうのかな……

「どうしてこんな物を見てたの？」

「ちよっと気になることがあってなあ……」

「へえ……」

いや、それよりもフェイトちゃんは用事……

「私で良ければ聞くよ?」

……もうええか。

「ある店の店長がな、違法な輸入してるか密航してるみたいなんよ」
「そうなんだ……ちゃんとした証拠はあるの?」

「資料の通り地球へは行ってないのは確認しとる。でもその店で地球の食べ物を取り扱ってるんよ」

「……成る程。でもそれだったらどうしてはやてはそんな悩んでいの?」

「普通に良い店やし店長もいい人なんよ」

「そうなんだ……何ていう店なの?」

「天使始めましたっていう変な名前の店やよ」

あれ? フェイトちゃんが頭抑えとる。

まさかフェイトちゃん……

「知ってるん? その店」

「う、うん。この前なのはと二人で行ってきたし……」

「そうなんや。じゃあ私が悩んでる理由もわかるやろ?」

「そうだね……犯罪をしているなんて信じられないけど……」

普通に若くて礼儀正しいような明るい男の人なんよなあ……私らより年下やし……

「もしかしたら違法に食材を輸入してる連中に騙されてる可能性も……」

「それがな、あの店長の口ぶりからして自分で買いに行ってるみたいなんよ」

二人揃ってため息を吐く。

どうしたらええんやろな……机の隅で気持ちよさそうに眠っているリインの頭を撫でて考える。

まず欲しいのは確証や証拠。流石にどんなええ人でも管理局員として犯罪行為を見逃すわけには行かへん。

「ああ、良い事思いついた」

「なんかあるの？フエイトちゃん」

「母さんがあの店によく行くらしいから話し聞いてみたら何か解るかもしれないよ」

「へえ、プレシアさんがねえ……」

じゃあ、一度聞いてみるとしますか。

◇
というわけで早速私とフエイトちゃん、そしてなのはちゃんの3人でプレシアさんの所に話を聞きに来ていた。

「どうしたの？3人で来るなんて珍しいわね」

「ちよっと聞きたいことがあります……」

もう今日の仕事は終わらしてきて今は完全フリーな状態。

この後はフェイトちゃんとなのはちゃんの家泊まる予定だからあまり長居はするつもりはない。

「取り敢えず話を聞こうかしら」

「あの天使始めましたって所の店長について教えてくれる？母さん」

隣に居るフェイトちゃんから聞いてもらう。やっぱりこういうのは家族の方が詳しく教えてくれるかもしれないし……

「フェイトが聞きたいなら好都合だわ」

プレシアさんは特に怪しむでもなく手を叩きながらそう口を開いた。

一体何が好都合なのかは検討もつかないけれど、これである店長さんの事を聞くのは問題無いだろう。

「名前は上月典矢^{うわづきふみや}。名前から解るでしょうけど、地球の日本出身よ。それで物凄い魔力の持ち主で複数のレアスキル保持者。更に料理や家事が得意だけでなく機械いじりなども得意。多分やろうと思えば何でもできちゃう子よ」

「そ、そうなんだ」

なんか思っていたよりも随分と沢山店長さんの事を聞けた……色々突っ込みたい所があるねんけど……

「年齢は15歳、肉体年齢は19歳程度。性格は真面目で色々空回りもしちゃうわ」

「え、えつと……」

「女性に対する姿勢も紳士的で、多分一途な子だと思うわよ？フェイト」

うん？なんか雲行きが怪しくなってきた気が……

「自分のことをあまり大事にしない所はダメだけどそれ以外は優良物件だと思うわ。頑張りなさいフェイト」

「う、うん？」

「早く孫を見せて頂戴ね」

「孫!？」

やっぱりプレシアさん勘違いしてる。確かにフェイトちゃんの言い方だったらあの店長さんが気になってるって思われるかもしれないけど、実際はもつと違う意味で気になってるんやよ。

「あら、もしかして違ったのかしら？」

「はい。その上月さんが違法なルートでの輸入か密航している疑いがあります」

「ああ、なるほど……」

うん、最初からちゃんと言っておいたほうが良かったね。もし言ったらフェイトちゃんも顔真つ赤に成ることも無かったし……私達、男に耐性がないからこういう所に弱いんよね。

「ま、孫……」

「だ、大丈夫だよフェイトちゃん。プレシアさんがちよつとからかっただけだろうから」

取り敢えずなのはちゃん達は放っておいてプレシアさんの話の続きを聞くことにしよう。

「いくら調べても解るわけ無いわよ。それにあの子を捕まえるのは不可能ね」

「……詳しく教えてくれますか？」

「……レアスキルよ」

レアスキル……そういえば複数のレアスキルを持つてるって言うてたっけ。随分と珍しいこともあるもんやね。唯でさえレアスキル保持者は少ないっていうのに複数持ちなんて……

「どんなレアスキルなんですか？」

「……私が知っている限りでは時間停止と瞬間移動と言った所かしら」

「へ？」

なんやそのレアスキル。時間停止ってあの時間停止？時を止めるっていうんか……ありえんで。瞬間移動もどういうことなん？転移魔法とは違うんかな。

「多分まだまだ持つてるとは思うけど、この2つだけで捕まえるのは難しいだろうし、捕まえた後にもすぐ脱走されるわ」

「……でも、捕まえた後魔力を制限すれば……」

「そう、普通なら魔力を封じられれば脱走なんて出来ない。でもこの瞬間移動は別。魔力がなくなるとも使えるのだから……」

「な、なんでプレシアさんはその事を……」

いつの間にか復活しているのはちゃんとフェイトちゃんもプレシアさんの言葉に耳を傾けている。

もし今の話が本当やったらあの店長さんともない人になってしまおう。

「色々調べたのよ。私の命を救ってくれた恩人のね……」

「それって、前に母さんが言ってた男の子の話？」

「ええ。本人は否定しているけど間違いない彼でしょうね。あの時の子は……そう考えれば相手の肉体年齢を減らす……若く出来るって

いるレアスキルも持つてることに成るわね」

……成る程、ずっと前に言ってた実年齢と肉体年齢の差、プレシアさん60は超えてるらしいけど肉体は30代って言ってた事はこのことやったんや。

「面影もあつた。年齢的にもあつている。再会出来たのは偶然だけどそれから色々調べたのよ」

「そうだったんですね……でもレアスキルがあつても魔力が無かつたら瞬間移動なんて出来なさそうですけど……」

「普段、魔力を完全に抑えて働きながらレアスキル使つてる時点で無理だと思っわ」

つまり現状打つ手はないってことか……弱つたなあ……

「まあ、何も出来ないことはないと思うけど」

プレシアさんは私の思考を予測したのだろう。なんだかそのまま心のなかで思ったことに対しての返答がとんできた。

「一体どうしたらいいかな」

「身内に引き込めばいいのよ!」

………帰るか、二人共。

第7話

それは突然のことであった。

今日も仕事を終え例の店に向かい、店長であるあの子と語り合いながら遅くまで酒を嗜んでいた。

少し前に自分の娘とその友人からあの子のこの相談を受け、色々と思いついたのが理由なのか、私はらしくもなく酒を呑むペースを上げていた。

否定するあの子を否定するように。自分は確信を持って接しているのだぞと言うように。

ただ、あの子の少し困っている顔を見たかったのかもしれない。

ただ、何かを言い訳にして仕事のストレスを吐き出したかったのかもしれない。

真相は自分でもわからない、ただ、今思うことは……

「気持ち悪い……」

この吐き気をどうにかしたいということだった。

飛び飛びな記憶に覚束ない足取りで自宅へと向かう。既に周囲の店は営業を終えているのだろう、普段とは違って見える光景にまるで自分が初めてこの場所を訪れているかのような錯覚を覚えてしまう。

時刻は既に深夜の3時、飲み始めたのが7時ということを考えれば随分と長く飲んだものだ……

何も私だけが悪いわけではない。あの子の作る料理、あの子の作る酒が美味しいのが行けない。

確かに抑えはしなかったが、私の話を聞きながらトクトクと注いでくれる酒を断れるわけがなかった……

帰る時にはあの子は送っていくか聞いてきたけれども流石に子供

にそこまでされる筋合いは無いと断っておいた。

それから店を出たはずんだけど、あまりその後の記憶は無い。

少し歩いて酔いも冷めたおかげで意識がはっきりしているのだろう。自身に襲いかかる吐き気と頭痛に悩まされながらも見覚えのないような道を歩く。

いや、本当に見覚えがない気もする。もしかすると私は迷ってしまったのではないだろうか……意識がない間に知らない道に来てしまった可能性は十分にありえる。

これは不味い。今日は仕事はないにしろ、休んでおかなければ明日の仕事に響いてしまう。昼間に寝ていたらアルフに文句も言われてしまうだろうし、早く帰宅したいところなのだが……

「本当に、どこなのかしら……」

頭を振り意識をはっきりとさせる。

まずは周囲の状況を確認しよう。もしかすればただ、いつもと違う街に困惑していて自分の知っている道なのに知らないと思い込んでいるのかもしれない……

ほら、あの看板なんて見覚えが……

【海鳴商店街】

目をこすりもう一度見てみる。

いつも街で見かける文字ではないけどはつきりと読める言葉。娘

の友だちの出身地でもある地球にある日本の言葉で書かれたそれは見覚えのある地名を指している。

どうしようもなく酔っ払っているのだろう。どう考えたって夜も明けていないのに短時間でミッドチルダから地球に来れるはずがない……

これは真面目に不味いかもしれない。取り敢えず24時間やっている青色の小さな店に入り、酔いを覚ますためにウコンの力というものを購入。それを持って近くにあった公園に入りベンチに座って購入したものを一気に飲む。

そして頭を抱えた。

私、普通に日本のお金で買い物したし、ミッドチルダにコンビニなんてある筈がない。

何かあった時の為に色々な世界のお金を少しだけ持ち歩いていたのが幸いだったのだけれど、今ので自分が地球にいることが確定してしまった。

理由はわからない。こんなことが出来るのは店長くらいだろうか、あの子はこんな無駄なことはしないだろう。

どうしよう、これじゃあ家に帰るの大変じゃない……

「また現れたね！偽物！」

「……母さん」

ああ、自分は本格的にダメなようだ。上空からアルフとフェイトが降りてきたのだけど、アルフはいつも通りで問題はない。

問題なのはフェイトの方だ……何故私の目には幼いフェイトの姿があるのだろうか……結論から言えば私の酔いが酷すぎるからだろう……

「覚悟しろ！」

「……五月蠅いわよ、頭痛いんだから大きな声ださないで頂戴」

ああ、吐きそう。目の前のフェイトにそんな醜態を見せるわけにはいかないから吐くのは我慢してるけど、アルフの声がガンガン頭に響いて気持ち悪い。

しかもこの気持ち悪さが一番希望のあつた夢を見ているという選択肢を無くしてくれている。

つまり目の前のフェイトは幻覚、もしくは酔っ払って幼く見えるっという私の脳が異常をきたしているのだ。

「母さん？」

何故か悲しそうな顔で此方を見るフェイトに私も少し悲しくなる。

そうよね、こんな母親の姿見たら幻滅するわよね……

死のうかしら……

「フェイトを惑わすな！」

「頭が痛いって言うてるでしょ!!吐くわよ?私が可愛い娘の前で醜態晒しているの?そんなに私の醜態が見たいわけ?」

「……………~~おっ~~」

大声出して更に気持ち悪く……ああ、やばい。コンビニでついでに水も買っとくべきだった……

「アルフ、頼むから大急ぎで水を買ってきてくれないかしら……」

「あ、あんた一体何のつもり……」

「いいから早く!!」

「は、はい!!」

直ぐ様その場を立ち去るアルフを見てふと考える。お金持っているのかしら……

「ああ、気持ち悪……」

「え、えつと。母さん？」

「……どうしたの？フェイト」

「……母さん!!」

急に抱きついてきてどうしたのかしら。もうすぐで20歳になるっていうのにまだまだ甘えたりないのかしら……

あまり力を入れ過ぎないでくれると助かるわ。吐きそうだから……

あれ？この子ってこんなに軽かったかしら。この間あった時はもう少し重かった記憶もあるのだけれど……

……何か嫌な予感がするわね……

「ねえフェイト、一つ聞きたいのだけどいいかしら」

「うん！どうしたの？母さん」

「貴方、今何歳？」

「えつと……9歳だけど……」

酔いとは違う意味で目眩がした。
いや、酔いすぎて幻聴なのかもしれないわ。

「今は新暦何年？」

「えつと……65年？」

幻聴幻聴……

「プレシア!!金なかった!!」

「……………」

この幻聴は許せないわね……

「アルフ……母さん、私ので良かったら飲む？」

「勿論。ありがとう、フェイト。優しい子ね」

やっぱりフェイトは天使だわ。

『……………スピピピ』

第8話

【次元航行艦アースラ】

「つてことはあれかしら？ 私は過去に来てるつてわけね」

「そういうことになります」

はあ、一体どうして、どうやって過去に飛んだつて言うのかしら……しかも私以外にも未来から来たつて子もいるみたいだし……
それに……

「……………」

どうやらこの世界の私はもう既に死んでいるようだ。私自身今起こっている事件の記憶もないし、ジュエルシードでの一件後もフェイト達と離れたということはなかった。寧ろ関係を取り戻すためにずっと一緒にいたほどだった……

私が視線を向けると身体をビクつかせて小さくなっているフェイトの姿が目映る。

それに私が彼女にした仕打ちを思い出して少し落ち込んでしまう……

「フェイト……………」

「は、はい……………」

「こっちに来てくれない？」

「……………」

戸惑いつつはあるけど私の前に来たフェイトを抱きしめる。

彼女は新しい母を得たけれどそれでも私が彼女に与えた恐怖感はまだ拭いきれないだろう……

「ごめんね、フェイト。貴方が怖がる必要なんて無いわ」

「あ……………」

「私はこの世界の人間ではないけれど、貴方は私の自慢の娘なのよ」

「……………母さん」

あ、ちよつと待って。また波が来た…………

「あ、アルフ、水頂戴」

「はいよ」

投げ渡された水を飲みなんとか吐き気を抑える。うう、もっとフェイトを愛でなきゃいけないのに気持ち悪くてそれどころではない…………

「と、取り敢えずプレシアさんは休みますか？」

「……………まだ大丈夫よ。それとありがとう。フェイトの事」

リンデイ・ハラオウン。この世界においてフェイトの新たな母となった女性。彼女がフェイトの抛り所の一つになってくれたのは間違いないのだろう。

「でも不思議ですね。私達の未来でもフェイトママのお母さんはリンデイさんだったのに……………」

「なに？聞き捨てならないわね」

オッドアイの少女、名前はヴィヴィオだったかしら。フェイトの娘、つまり私の孫つて言うことよね。

何故オッドアイなのかはわからないけど一応は金髪でフェイトの娘と言っても納得できる。

「す、すみません」

「謝ることではないわ。それよりも、貴方のパパは誰かしら？」
「パパはいませんよ？」

なんですって!?

「フェイト!!ちよつと来なさい!!」

「は、はい!!」

とんでもないことだわ。まさか未来のフェイトの娘に父親がいな
いだなんて……

危惧していたこと……悪い男に捕まるって事が現実に成るってこ
とじゃない!!!

「いい?フェイト、よく聞いて?男を選ぶ時は外見や言葉だけでなく
内心もよく見なきゃいけないわよ?」

「は、はあ……」

「ああ、私が生きてたらいい人を探してあげるのに!何で死んだ!私
!いや、寧ろ何であの子がいないのよ!」

私が死んだ世界。私達の世界との差異はいくつかあるだろうが、考
えられることは……上月典矢が存在しないということだろう。

私を助けてくれる彼が存在しない、もしくはレアスキルを保持して
いないのであれば私は間違いなく死ぬ。問題は何故彼がいないとい
うことだけど……

「あの子っていうのは?」

「私を助けてくれた子よ。今日もその子の店で飲んだ後家に帰ってい
たわ」

「そうなんですか……」

「ヴィヴィオちゃんは知らないわよね?変な店を出している若い男の
話は……」

「はい。聞いたこともないです」

さて、未来でヴィヴィオちゃんに知られていないほど知名度が低かったのかは定かではないけど、私の考えでは彼はこの世界において私の知る上月典矢ではない。もしくは存在すらしていないのだろう……

「そういえばプレシアさんはずいぶん若く見えますけど何歳なのですか?」

「なのはちゃんかしら? そうね、まあ若くみえるのには理由があるのだけれど、私はもう60は超えているおばあちゃんよ?」

「「ぶっ!!」」

え? 何? 何で皆噴き出しているのよ……

「ぜ、ぜひそのアンチエイジングの方法を教えてくださいわね」

「ああ、ちよつと無理があるわね……私が若い見た目しているのはさつき言ったくない子が関係しているから」

「どういうことですか?」

「私はね、虚数空間に飲まれても飲まれなくても短い命だったのよ」
「え?……」

「病気でもう死にかけの状態だった。無理な研究が祟ったんでしようね。まあ、さつき言っただ子、上月典矢という少年は私を助けた後どうやってかはわからないけど肉体を病気になる前……おおよそ30歳くらいに戻したのよ」

ホント、でたらめな子なのよね。

「それで10年が経過して年齢60超え、肉体40歳程度のおばあちゃんが完成したってわけ」

「……40と見ても随分と若く感じるわ」

「あら、ありがとう」

「ってそれよりも、今の間にフェイトに男を選ぶ際の事を教えこまないと」……

「そういえばなのはママ、マテリアルズの人達は何処にいるの？」
「にゃ!?……その、ヴィヴィオちゃん?ちよつとその呼び方慣れないからなのはって呼んでくれないかなあ?」

「……どういふことよ。」

「ヴィヴィオちゃん?」

「はい。どうしたの?プレシアお婆ちゃん」

「お婆!?!」

「……覚悟はしていた。孫ができることは喜ばしいことだと思っていた。
でも、予想以上にダメージくるわね……じゃなくて!

「あのね、なのはちゃんがママなの?」

「はい!」

「フェイトは?」

「??ママですよ?」

目眩がしてきたわ。まさかこれから先女性同士で子供を生まれる技術の発展というか進化というか……取り敢えず、とんでもないことに成るのは間違いないわね……

まさか怪しいとは思ってはいたけど、なのはちゃんとフェイトがね
……

「失礼するぞ」

そう言いブリッジに入ってきたのは八神はやてに似た子。確かマテリアルズのロード・ディアーチエって言ったかしら……

その後ろにはなのはちゃんに似ているシユテル・ザ・デストラクター。フェイトに似ているレヴィ・ザ・スラツシャー、それとよくわからない小さな女の子が入っていた。

「一体どうしたの？ディアーチエ」

「うむ……それがな……」

ディアーチエに促されて小さな女の子が前に出てくる。金髪でおっとりとした顔が特徴な幼い子。一体どうしたというのだろうか……

「なんで、システムU—Dがここに!!？」

突然キリエ・フローリアンが大声を上げた。確かシステムU—Dってこの世界で起こっている事件の元凶って言ってなかったかしら……人は見かけによらないのね……

「それがのう……取り敢えず話せるか？ユーリ」

「はい。任せて下さいディアーチエ」

親しげに話す彼女達を見て少しだけ、ホンの少しだけだけどブリッジ内の緊張が和らいだ。

「皆さん、すみませんでした。それとすみません。エグザミアを乗っ取られちゃいました」

テへ、とでも言いたげに頭に手を置く彼女をディアーチエが叩いた。

真面目にせぬかと言われた彼女は少し涙目になりながら事のあらましを告げていく。

何でも本来であればエクザミアと言うものの暴走で彼女自身が暴走して世界を滅ぼしてしまうのだという。その副産物のような物で闇の欠片が周囲の魔力等に反応して個人を模して暴れていたらしいのだけど、ある闇の欠片にシステムを乗っ取られたとかどうとか。

「圧倒的でした。他の闇の欠片すらも飲み込みながら更に力を蓄えていると思います。幸いにもエクザミアの一部は私がまだ使用できています。ですが、このままではその闇の欠片が私の代わりに世界を滅ぼしてしまうかもしれません」

とまあ、つまりはだ。止めるべきだった相手が変わったということと、少し相手が強くなったこと、そして遠慮無く消しても良くなったということだ。

何よ、別に問題なんて無いのじゃないとおもうのだけれど？何故皆そんなに動揺しているのかしら……寧ろこのシステム、U—Dという戦力が加わったってだけでもしかすれば楽になるかもしれないのに……

「エイミイ、モニターに映せるか？」

「ちよつと待って！もうちよつとで出来そう！」

ブリッジの大画面に管理局員の子がその乗っ取ったという欠片を移そうとしている……そういえばこの二人って未来では結婚してた

んだっけ。見たところあまりフェイトと変わりなさそうに見える。見た目だし、フェイトも早く結婚させないと行けないわね……

「映ったわ!!」

モニターを皆が息を呑んで見る。

その闇の欠片は夜の空を見上げながら空中に浮いている。背丈は少年と青年の間くらい。黒髪でボーっとした顔をしている。性別は男。

ああ、世界が破滅するわね。あの店長に勝てる気なんてしないもの。

『……スピピピ』

第9話

次元航行艦アースラでは闇の欠片に対する作戦会議が行われていた。幸いにも闇の欠片は観測地点から動く様子もなく、ただ近寄ってくる闇の欠片を取り込んでいるだけであった。

「……でたらめね」

闇の欠片が模倣した人物の話を気分の悪そうなプレシアから聞き出したリンデイ・ハラオウンは思わずそう零してしまう。

曰く、時を止める力を持っている。

曰く、肉体の年齢を戻す力を持っている。

曰く、瞬間移動する力を持っている。

曰く、尋常でない魔力を持っている。

もしそれらが再現されていればあの闇の欠片を討伐するのは非常に困難だと言えるだろう。

しかし、今はおとなしい闇の欠片が暴走するのも時間の問題である。

それ程の力を持ってくれば瞬く間に地球は滅んでしまう。一同は闇の欠片の討伐を余儀なくされていた。

「しかし、あれを倒せば消耗したエクザミアの制御を容易に行えるでしょう」

「そこは我に任せておけ。今はあれを倒すことが最優先だ」

とはいったものの、それらしい対抗手段を見つけることは彼らには出来ない。ただ己の力のすべてを掛けて闘いを挑むしか方法等残されていかないのだ……

「一体どうすれば……」

沈黙が会議室を支配する。

その中でプレシア・テストアロツサは頭を抱えながらふと、何かが自身の鞆の中で一瞬震えたのが見えた。

『燃えあがーれー燃えあがーれー』

コミカルな音楽とともにどこかで聞いた歌がプレシア・テストアロツサの鞆の中から響く。よく見れば鞆が小刻みに動いているようであった。

「が、ガンダム？」

「……プレシアさん……」

「母さん……」

「プレシア……」

「お婆ちゃん……」

今の会議の空気に似つかわしくなく、更にプレシアの私物から聞こえるとは思えない音楽に非難の視線がプレシアに突き刺さった。

「ち、違うわよ!!私は何も!!」

プレシア本人聞き覚えのない音楽に慌てて鞆の中をあさり音楽の発生源を探す。

それは直ぐに見つかった。手のひらにいい感じにフィットする大きさ。硬い材質でできたその球はプレシアに掴まれ鞆の外に姿を現す。

『??キショウ、キショウ』

困惑した様子で自身が起きたことを伝えるその物体に会議室の者は一様にその口を閉じた。

プレシアの手から飛ばたくことで逃れたそれは周囲を見渡し、己の置かれている状況を把握した後、慌てたように騒ぎ出した。

『ユーカイ！ユーカイ!!』

飛び回るその物体……球型のロボット、矢澤ハコをプレシア・テスタロッサはわしづかみにして、顔を近づけた。

「何で、私の鞆の中にいるのかしらあ？」

ドスの聞いた声にハコはガタガタと震えながら『ゴメンナサイ』と繰り返す。

それのため息を吐いてプレシアは会議室のテーブルの上にハコを乗せた。

「さっき言った上月典矢に関係しているロボットよ。何故かはわからないけど、私の鞆に潜んでいたみたいね」

テーブルの上で転がされて目を回しているハコに、八神はやては小さな声でハコや……と呟く。

それを耳聴く聞いたハコは転がされながらハコではなくハコであ

ると訂正し、また転がされた。

先程までのピリピリとした空気が一瞬のうちに消えてしまったのにリンディはため息を吐いた。

そんな中プレシアだけがハコを転がしながら笑みを浮かべている。それを疑問に思ったフェイト・テスタロッサは直ぐ様その理由を問うた。

「あら、気付かないのね。この子がいればもしかすれば本物が来てくれるかも知れないって言うことに」

全員が顔を上げた。

そう、確かに強力な相手にどうしようもなかったかもしれないが、その強力な相手の元となった人物が来れば心強いなんてものではない。幾つもの対抗手段のない相手に対して、五分五分の勝負に持ち込まえるのだ。

「貴方のご主人様に連絡してくれないかしら？」

『アウウ……ツウシン、ツウシン』

渋々といった様子でプレシアの言うことを聞くハコに皆の期待が高まる。

『ムリ、ツナガラナイ』

ハコが小さく呟いた言葉に全員のため息がシンクロした。

「仕方ないわ。今から20分後、闇の欠片に攻撃を仕掛けます。各自
出撃の準備を」

「了解!!」

|||||

「それにしても貴方、何時忍び込んだの？」

『シラナイ、ボク、シラナイ』

「嘘おっしやい」

「まあまあ、母さん。でも色々とその上月典矢って人の話を聞けるん
じゃない?」

「それもそうね」

『……………エイゾウ、エイゾウ』

「あれ?これは何処かの店?」

「私がよく行っている店ね」

《こんな所に転がっていると踏んじやうわよ?》

「母さんだね」

「ええ、私だわ」

第10話（偽）

それは圧倒的な強さを持っていた。

魔導師に囲まれても何もアクションの起こさない闇の欠片に向かって各々が持つ最大級の威力の魔法を打ち込む。

闇の欠片に命中するも、傷を与えられず……

闇の欠片は攻撃されて、初めて魔導師たちを認識した。

その辺にいる有象無象の存在に向ける視線ではない。その眼に映るのは明確に敵意を持って攻撃してきた小さな存在であると闇の欠片は理解し、動き出す。

魔導師達が全滅するのに1分とかならなかつた。

◇

「嘘……でしょ」

余りにも現実離れた光景にアースラの船員は唾然とする。

彼処にいるのは魔導師でも選りすぐりの強者ばかりだ。いかに強い力を持っていようともそうそうやられる事はないと内心で皆が思っていた。

だが、現実が違う。

闇の欠片から放たれた光線に貫かれ、魔導師達は堕ちていく。幸いにも命に別状はなさそうだが、あれだけの高出力の魔法を身に受けては一溜まりもない。

「まさか、あれほどとは……」

闇の欠片が放つ光線一つ一つが高町なのはの放つスターライトブレイカーを匹敵、否、超越した力を秘めている。

その規模の光線をまるで湯水のごとくばらまく姿は圧巻とも言えた。

『……………ニセモノ、ゴシユジンノニセモノ』

アースラに留守番しているロボットもモニターに映る戦いを見て今の状況を少しばかり把握した。

自分の大好きな創造主の偽物が好き勝手に暴れまわっているということ。

このままでは創造主の生まれ故郷である地球が危ないということ。自分の大好きな店にいつも来てくれる女の人が危ない目にあっているということ……

『イカナキヤ』

ロボットはふらふらと空中を飛び、アースラの転移装置に向かう。

絶望に包まれている戦場が映しだされているモニターに気を取られている船員たちはその事に気付かなかった……



『ケンサク、ケンサク』

模索する。己の中に眠る大きなブラックボックスを紐解くようにロボットは回路を動かす。

今からロボットが挑むのは創造主の偽物であり、それに近い力を持った存在。生半かな力ではまず太刀打ちさえ出来ない……

『ワード、キタイセイノウジョウシヨウ』

幾つもの項目に書かれた物の中から必要としているデータを己にインプットしていく。

何故このようなことが出来るのか、どこからこのデータを手に入れているのか……それはロボットですら理解できていない。

だが、知らなくともロボットは作業をすすめる……

『ショウニン、カクニンデキズ』

自身の出来うる限りの限界まで、只々ロボットは強化する……

『サギョウチュウダ……ガガガガ……ゾツコウゾツコウ』

今ここに創造主はいない……ならば頼れるのは己のみ……

『ガイクユニット、エンカクセツゾク』

全ては自分の好きな人のため。自分が大好きな人に喜んでほしいため……

『GNドライブ……ゲンザイノセツゾクスウ……10』

今、一体の小さな戦士^{ロボット}が出撃した。

◇

|||||

——ああ、テステス。聞こえるかな？

ダレ？

——ボクが何者なのかは気にしないでいいよ

ワカッタ、ワカッタ

——外部ユニットに関しては任せてね。まだまだ予備もいっぱいあるし

アリガトウ

——じゃあ、お決まりの台詞を言わせてもらおうかな……トランザムは使うなよ？

リヨウカイ。トランザム、キドウ、キドウ

——ははは、頑張りな。

キタイセイノウノコウジョウ、コウジョウ

——ん？

ブラックホールエンジン、セツゾク

——ちよ、おま！

|||||

『カイシユウ、カイシユウ』

赤い身体に粒子をまとった小さな戦士は気絶している魔導師たちを回収していく。

それを許す闇の欠片では無く、小さな戦士に向け光線を打ち続ける。

しかし、当たらない。淡く輝くその戦士に掠りもしない。

ならば、全方位を攻撃するまでと、衝撃波を飛ばすが、当たる直前にロボットは姿を消し、攻撃を躲す。

『ハンゲキ、ハンゲキ』

ここからが始まりだった。

トランザムシステム。GNドライブからGN粒子を爆発的に生産し、機体の性能を飛躍させるシステム。

それに加え、機体の性能が引き上がったことにより使用できるようになったシステム。ブラックホールシステム……

紅い身体に蒼き魔神の力を秘めたロボットはブラックホールシステムにより時空を歪めながら闇の欠片へと接近する。

「舐めるなあ!!!」

『ディストリオンブレイク』

闇の欠片が莫大な魔力を載せた光線を放ち、ロボットの口から放たれ、歪曲空間を通過して増幅された光線がぶつかり、爆発的な力を生む。

その日、地球は滅びた

第10話

『イヤー！イヤー！』

「ああ、もう！文句は言わない！少しぐらいなら出来るでしょ！」

デバイスを持っていなかった私は矢澤ハコをデバイス代わりにして出撃しようとしていた。

あの子の作り上げたロボットなのだからデバイスとしての機能くらいあるだろう。何せ無駄な機能は充実しているのだ。色々出来るようにしていると思う。

『ボク！ヨウウナイ！』

「ほら、あんまり強情だと貴方の頭に吐くわよ？」

『ヤメテ！』

まあ、ウコンの力が効いてきたお陰でだいぶ楽になってるからもう吐かないわよ……………多分。

「あの、そろそろ行きますけど……………」

「いいわ！このまま転送してちょうだい！バリアジャケットは自分で展開できてるから問題無いわ！」

デバイス無しでも戦えることは戦える。でも魔法の展開速度や効率が違うのよね。

それに無いとしんどいし…………

『イヤーーーー！！』



転送された先は海の上だった。直ぐ様魔法を行使して空中に浮かび上がる。

周りの皆も無事に転送できたみたいで、前方にいる闇の欠片を見つめている。

もう魔法は届く距離。向こうからもこちらを視認出来ているだろうけど、全く動きを見せる様子はない。

不気味なほどに不動な状態でその場に立ちすくんでいる。

「皆、散らばって最大火力で一気に決めるで！」

はやてちゃんの号令のもと、闇の欠片を囲むように移動する。

その間も動く様子はない。まるで私達のことを見ていないかのうような……

『……………ニセモノ。ゴシユジンノニセモノ』

「そうね」

魔力を貯めつつ、手に持ったハコの言葉に返事をする。

ハコも思うところがあるのだろう。ただ、真つ直ぐに自らの主の偽物を見つめていた。

『……………ウゴキ、ナシ』

「ええ」

現状を確認している言葉……………多分ハコは何かをしているのだと思う。恐らくは闇の欠片の解析か何かを……………

それなら片手間にデバイスの真似事もしてくればいいのに……………

何故か引き受けてくれることがない。拒み続けている……

『皆さん、準備は出来ましたか?』

アースラ内にいるリンデイ・ハラオウンからの通信が聞こえ、コクリと頷くことで肯定しておく。

「サンダーブレイズ」

ためた魔力を放出し、青い雷光を作る。

放射型の高威力な魔法。周囲の環境に依存せずに安定した火力を出す魔法を私は放った……

他の皆も各々の撃てるであろう威力の魔法を打ち込んでいる。

一番目立つのはなのはちゃんね。あのスターライトブレイカーは相も変わらず物凄い迫力だわ……

『……………』

にしてもなんだか嫌な予感がするわね……

こう静かな雰囲気……

「……………なんだ、いたのか」

◇ 『キドウ、キドウ』

私達の魔法による一斉攻撃が止んだ場所には特に外傷の見当たらない闇の欠片がいた。

流石に皆動揺しているようだが、今はそれどころではない。闇の欠片が動き出したのだ……ただ周囲へと視線を向ける動作、それだけで此方のことを認識したということが解る。

静寂に包まれる中闇の欠片は片腕を上げる。

『キドウ、キドウ』

ゴクリと唾を飲み込み、直ぐ様バインドを放ってみるが、身体にあたった所で砕かれてしまった。

『キドウ、キドウ』

「……ほうっ！」

皆が魔法で攻撃を加える中、闇の欠片は此方へと視線を向けた。魔法にあたって物ともせず、此方を見続けている。

『キドウ、キドウ』

『キドウ、キドウ』

私も魔法を放ってみるけど、牽制にもならない……

ふと、手に持つハコが熱くなっているのを感じ、何かをつぶやいているのに気づき、視線を向ける。

モーター音を響かせて何かをしているようだ……一体何を……

『キドウ、キドウ』

『キドウ、キドウ』

『キドウ、キドウ』

「なかなか粘る。限界を超えていそうなものだが……」

『キド……ガガ……キドウ』

闇の欠片は此方を見たまま魔力弾を形成し、横方向、丁度ヴォルケンリッター達がいる方向へと放った。

『テンカイ』

ハコのつぶやきとともにヴォルケンリッターの前方に薄い黄緑色の透明な壁が出現し、魔力弾を防ぐ。

この子が展開したのだろうか……あの魔力弾に込められた魔力はとんでもないものだったがハコの展開する盾ならば問題なく防げるようだ。

『キ……ド……ウ……』

一瞬何か違和感のようなものを感じた……風景が少し歪むような、おかしい光景を……

「どうした？その程度か」

闇の欠片はまるで誰かに問いかけるように話す。私に話している様子ではない。ならば一体……

『キドウ』

それにしてもハコがさつきよりも熱くなっているのが気になる。まるで端末が膨大なデータを処理しているかのような……

「そろそろやらせてもらおうか……」

突然ハコを持っていた感触が小さくなった。それに気を取られ視線を一瞬間の欠片から離し、もう一度向け直すと、その姿はない……

『ガッ!!』

変な声が聞こえたと思えば闇の欠片の姿を確認した。なのはちやん達とフェイトの目の前に出現している。

直ぐ様バインドを発動させるが効果はない……

恐らく瞬間移動か時を止めたのだろう。やはりあれに対抗する手段が……

いや、ちよつと待って、何でなのはちやんがハコを抱えているの？

「驚いた……まさか防ぐとはな」

『ガガガ……ヤッパリ、ニセ、モノ』

ノイズの入り混じった声が響く。よく見るとハコの耳部分が片方外れ、一箇所へこんだような跡が見える。

手に持っている何かを見るとハコの耳があった。

「ただの機械がよくほごく」

『ゴシュ……ジン……ガ……ナラ、モット……スゴイ』

「……」

『ッ!!……キド……ウ!!』

また違和感。さつきよりも大きな……

「やはり限界のようだな。もう消えていいぞ」

『オマエ……ハン、タイ……ジジ……ゴシユ……ジンノ……ハンタイ……』
「……む。此方も限界が近いか……」

一体何が起こっているのかがわからない……闇の欠片もハコも一体何を……

「だが、もう止められまい……」

闇の欠片の言葉とともに周囲の時間が停止した。

いや、私は止まっていない。

「範囲を狭めればまだ止めれたというわけか……」

「一体何が……」

見たところ、フェイトとなのはちゃんも止まっていない……

『……ガガ……キド……』

また、皆が動き出した……

いや、違う……海を見てみればわかる……

ここら一带以外の時が止まっている。

直ぐ様アースラへ通信をしてみるが繋がらない。多分向こうも止まっているのだろう……そして、私達が動けるのは……多分ハコの仕

業……

「下等な存在にしてはよくやる……」

『キド……ウ……』

また止まった。でも、何故私は動いているの？ハコの力がハコを中心としているのならばなのはちゃん達が動けるのはわかる……

「クッ！」

フェイトが斬りかかるがあっさり止められる。

なのはちゃんも魔法を繰り出すけど聞いていない。

二人が攻撃している隙に魔力弾に層を重ねる。魔力で圧縮し、貫通力を固めていく。

なぜかはわからないけれど私には時を止める力は効いていない。ならば攻撃し続けて時を止める力が解けることを祈るしか無い。

「形成完了」

魔力弾を闇の欠片の背中へと放つ。

まっすぐに進む魔力弾は闇の欠片に当たり、その身体を貫いた。

「ぬう……！ー！」

闇の欠片が唸ったのが理解った。

そうか、向こうもハコが時を止めるのを邪魔していると考えていて、私が動けるということを解っていなかったのだ。結果私の攻撃をモロに食らってしまったというわけか……それだったらもつと時間をかけて不意打ちしたほうが良かったわね……

「えっ？」

眼を離していなかった。それなのに闇の欠片はいきなり目の前に現れ……次の瞬間衝撃に襲われたと思えば……

目の前でハコが壊された……

|||||

ニセモノ、トキ、トメル

ジドウ、ハツドウ、『ラーズエイレムキャンセラー』、ハンイ、カク

ダイ

ゴシユジンニカクレテミニツケタ

キドウ、キドウ

ハンイカクダイ、フカ

『ボンジンジャンプ』、ハツドウ

|||||

第11話

腹部に感じた鈍い痛み。目の前の光景が痛みの原因を理解させてくれる。

ハコが私を庇ったのだ……闇の欠片は唾然とした様子で私のいた場所を刀で斬り下ろした格好で止まっている。

確実に仕留めたと思ったのだろう……自分にダメージを与えた私という危険要素を排するために念入りに仕留めに来たのだろう……それもハコが何かをして私を庇い己が破壊されることで私を助けた。

「っ!!ハコ!!」

真つ二つに斬られてしまっているハコはバチバチと音を立てながら落下していく。

バインドで拘束することで落下を防ぎ、直ぐ様その場から離れる。ハコがやられた以上、時を止める力に対抗する手段を持っていない。

魔力弾で牽制しながら距離を取る。あの貫通型の魔力弾を形成して放ち続ければダメージを与えられる。

だが、相手の動きがよめない以上不意打ちで当てるしか無い。

「下賤な者共がああ!!」

闇の欠片が激情を浮かべて叫んだ。あの店長だと考えられない表情ね。

あれが全く違う存在だと改めて実感できる。

「消え去れ!!」

こちらに近付き、斬りかかってくる。障壁を貼り防ごうとしたが刀が障壁を切り裂こうとしているのを感じ身体を翻して回避する。

「クッ!!」

更に追撃が来るのを電気の膜で相手を覆うことで動きを鈍らせ回避する。

相手は何故か時を止めてこなかった……もしかすれば今は使えない理由があるのかもしれない。それならば今こそがチャンス。

「はあ!!!」

刀で切り上げてくるのが見えた。

このタイミングでは回避も魔法も間に合わない。せめて致命傷ははずさないと!

「ガッ!!」

闇の欠片の背後から魔力弾が突き刺さった。あれは私がさつき作りに上げた貫通弾と同じ……この魔力光……なのはちゃんね!

さつき私の攻撃が通ったのを見たから出来たようね。これならまだ勝機はある!

「サンダーレイジ!!」

魔法を放ち距離を取る。

相手を幾つもの障壁で囲むことで動きを少しでも阻害する。更にバインドも追加よ!

これなら少しは時間も稼げて貫通弾を形成することが出来る。

また時が止まった。

意識ははつきりとし、闇の欠片が此方に迫っているのが解る。ただ身体を動かすことが出来ない。

「これで終わりだ!!」

でも、一箇所だけ。ある箇所だけに力が入る。

形成した魔力弾を溜め、右手を動かして放つ。

ハコの耳を握った右腕だけが動き、相手の顔面に向けて魔力弾を放った。

「無駄だ」

景色が流れる速度が一気に遅くなった。意識がはつきりと目の前の刀を振り抜こうとしている闇の欠片を認識する。

ああ、もう防ぐ手段など無い。時間は止まっているからさっきのように他の人からの不意打ちを期待もできず、躲すために身体を動かすことは叶わない。

唯、自分の命がここで終わることだけがはつきりと理解できる。

ごめんね、フエイト。お母さんこんな所で死ぬわ。でも、私がいなくても大丈夫よね。

貴方は強い人だから……

でも、最後にもう一度だけ……貴方に会いたかった……

『……テ……カイ……』

目の前に、薄い黄緑色の透明な障壁が現れた。

◇

「クッ何故だ！確かに潰したはず!!」

闇の欠片の攻撃を防いだ障壁、先程魔力弾を防いだものと同じと言
う事はそれを発生させたものは自ずと決まってくる。

プレシア・テストアロツサはその存在へと視線を向けた。

己がバインドで落ちないように固定した存在。真っ二つになり、既

にボロボロな状態だった筈のそれからバチバチと火花が散っているのが解る。

ああ、時間が止まっている中で助けてくれた存在はまだいた。

もう動くことも出来ないだろうになんとか私の命を繋いでくれた。

「だが、一時しのぎにすぎん!!」

障壁が消え去ったと同時に闇の欠片は刀で斬りかかる。

右腕以外が動かないプレシア・テストアロッサに避けられるはずもない。既に矢澤ハコは残りの力を使い果たしてしまっている。

今度こそ、プレシア・テストアロッサを攻撃から護るものは存在しない。

その凶刃は、誰の妨害もなく――

「その一時しのぎで一人の命が助かった」

――闇の欠片ごと吹き飛ばされた。

現れたのは一人の男。黒い燕尾服に身を包んだその人物は、己と瓜二つな容姿をしている闇の欠片と対峙する。

戦いの終わりは、近い。

第12話

「馬鹿な、貴様は、俺だと？」

「……………」

目の前に現れた存在に闇の欠片は困惑する。

そう困惑している事が既にその闇の欠片が他の闇の欠片とは一線を画する存在であると証明していた。元来闇の欠片は元となった存在のあり得る姿を模し、ただ一つの目的を持って行動している。

だが、この闇の欠片の元になった存在。上月典矢はこの世界において存在しない者。それを模した闇の欠片は一つの目的に縛られることもなく、一つの自我を持って限界していた。

「答える！貴様は何者だ！」

故に気づかない。己が生まれた理由を。己が闇の欠片であるという事実を偽物は知る由もない。

ただ、強大な力を持って生まれたという結果だけが残っていたのだ。

「……………知らなくてもいい事だよ。すまなかつたね」

上月典矢は闇の欠片をただ一瞥し、そう宣告した。

時の止まった空間内で二人を観測できるのはプレシア・テストロッサのみ。既に事切れているハコは主人の戦いを見ることは叶わない。それでも、ハコの表情は安らかなものだった。彼が少しでも時間を稼いだという事でプレシア・テストロッサの命を助けることが出来たのは紛れも無い事実だ。人の役に、誰かを助けるために壊されてしまうのは彼にとっての本望だったのだろう。

それを感じ取っているからこそ、上月典矢はハコを労い、彼の期待

に応えるため、最後の戦いを始める。

そう、幾度も闇の欠片と戦った最後の戦いを……

「さあ、終わりにしよう」

上月典矢の眩きとともに闇の欠片は斬りかかる。

右に左にフェイントを織り交ぜながらその凶刃を持って上月典矢へと斬りかかる。

だが、その斬撃はまるで“わかっている”かのようにほんの少し身体を逸らすだけで躲かれてしまう。

切り返し、振り上げようとも同じ様に躲されてしまった。予め来る場所が解っているかのように……

「ハッ!!」

掌底が闇の欠片の腹部に突き刺さる。

衝撃が突き抜け、空気が震えた。闇の欠片は口から血を吐き出し、吹き飛ばされた。

「まだまだよ」

飛ばされる闇の欠片の元に上月典矢は瞬間移動し、蹴りあげる。

為す術もなく打ち上げられた闇の欠片を待っていたのは上月典矢が生成した高密度の魔力弾の雨だった。

四方八方、空間360°を埋め尽くすほどの魔力弾は一斉に闇の欠片に殺到し、弾け飛ぶ。

プレシア・テスタロッサはその圧倒的に一方的な戦いに啞然とした。負けるとは思っていなかった。闇の欠片は間違ひなく消耗しているから上月典矢が勝つとは思っていた。だが、それでもここまでの一方的なのは信じられない。

魔力弾の爆発により発生した煙が晴れて、ボロボロな状態の闇の欠片がその姿を現す。

だが、目の前に上月典矢が現れ、顔に手を添えられた。

「…………ごめんね」

その眩きとともに闇の欠片の顔面に凄まじい魔力の込められた一撃を撃ちはなった……

攻撃の余波が空を覆っていた雲を吹き飛ばす……………

闇の欠片は、その存在を消失し、そこには一つの黒い塊だけが残っていた……

彼は闇の欠片が消え去ったのを確認した後、時間停止を解除する。時間が進み始めたと同時に周囲の魔導師達は困惑する。闇の欠片の服装と雰囲気が変わっており、等の闇の欠片らしき人物がハコの残骸を回収していたのだから……

◇

闇の欠片が消失した後に残っていた物、それがエクザミアだと気付いたU—Dは直ぐ様それを回収し、ディアーチエにより完全に制御下に置かれた。

一行は闇の欠片は倒した本人、上月典矢に話を聞くためにアースラに帰投し、説明を求めていた。

「今回の件、私の不始末で発生してしまったのです」

彼から伝えられたのはとんでもないことであった。

まず、プレシア・テストロッサが何らかの理由で並行世界の過去に飛ばされてしまったのが事件の発端だ。その理由は上月典矢ですら理解出来ていないことだったが、問題なのはその後だ。

上月典矢はプレシア・テストロッサを連れ帰るために魔力による感知を行い、プレシア・テストロッサの行方を探知したのだ。

幾つもの並行世界へと魔力を飛ばし彼女の行方を探す……その時点でアースラ内の魔導師達は頭をおさえていた。唯一レヴィはよくわかっていなかったようだが……

まあ、その魔力による探知を行った結果、闇の欠片はその魔力を情報源に上月典矢の偽物を創りだした。

強力な彼の能力を膨大な魔力を使用することで模倣して……

つまり、彼が幾つもの並行世界へ魔力を飛ばした結果、あの偽物が生まれたというわけだ。

そこで疑問に思うのは他の並行世界の事。魔力を情報源とし偽物を創りだしたというのであれば少なくとも他の並行世界にも出現した可能性は高い。

今も悠長に上月典矢がコーヒーを飲んでるのはマズイのではないのかと。

もしかすれば他の世界にはあの闇の欠片に対抗できる存在がいた

のかもしれないが、いない世界もある可能性は存在している。

だが、次に上月典矢が告げた言葉に衝撃が走った。

「もう、全部倒しました」

あっけからんと告げた彼にリンディは思わずコーヒーを吹き出してしまった。

つまり、彼はこう言っているのだ。他の世界のあの強大な闇の欠片を倒してきて、最後にこの世界の闇の欠片を倒したという事を……それを聞いてプレシア・テスタロッサはあの一方的な戦いに納得した。彼は何度も戦ってきたのだ、相手の行動が手に取るようにわかるのは必然だったのだ。

そして、同時に思う。他の世界の闇の欠片を倒している時間があつたのならばプレシア・テスタロッサをもつと容易に助けることは出来たのではないのかと……

それに上月典矢はずっと時間を止めて倒してきたから違いはないと指摘した。

更に自分の自慢のハコがなんとか時間を稼いでくれると信じていたとも言葉をこぼす。

いつの間にか勝手に自動修復していた矢澤ハコは下部分を開いて足のようにし、耳の隙間から小さな手を出して己の主人の言葉に自慢気にドヤ顔をしていた。

そんなハコはさておきプレシア・テスタロッサはある考えにたどり着く。

目の前の上月典矢の口ぶりから察した事柄。彼は全ての闇の欠片を倒したと告げている。

つまり、どの世界にもあの闇の欠片に対抗する者はいなかったのだ

はないのかと……

上月典矢は肯定する。そして更にどの並行世界にも自分は存在しないと告げた。自分は世界にとつての歪みであり、単一の存在であると……

とてもではないが信じられない内容……だが上月典矢の言葉は不思議と説得力にあふれていた。

証明する物は何一つないのに彼が嘘をついていないと魔導師達は直感的に感じた。

なにはともあれ、色々あったが闇の欠片による事件は収束した。

その後は全員の記憶を弄った後、元の場所に帰っていく。

無論、上月典矢とハコ、そしてプレシア・テストロッサも自分達の世界に帰っていった。

プレシア・テストロッサは最後にフェイト・テストロッサ・ハラオウンを娘として抱きしめてからだ……

第13話

「やっと落ち着いてきたねえ」

「そうだね。スバル達も訓練もだいぶこなせるようになってきたし」

「そうかあ、それやったら一回現場に出るってのも有りやけど……私達の仕事は基本受け身になってしまいうからそんなにほいほいと実働出来るわけでもないよな。」

「取り敢えず早めに経験を積んでもらわないとは思うけど……どうしようかな。」

「そういや、フェイトちゃんは どうして ん？」

「確かジェイル・スカリエツィの情報が 入 たらしくて午前中は調査して んよ」

「ああ、なるほどなあ」

「確かフェイトちゃんがずっと探しているっていう人造魔導師製造計画「プロジェクトF」に関わってたっていう時空犯罪者やったよね。プレシアさんに止められて んみたいやけどフェイトちゃんは ずっと探して んよな……」

「大変そうやなあ」

「最近 は プレシアさんと良く電話してて楽しそうだけどね」
「そうなんか」

「にしても、仕事 が 片付くと暇やなあ……」

「私らは言ってみればアイドルみたいな立場やから実務は そんなに回されやんのよな。たまにある現場に向けて訓練が 主 な仕事やし……」

「新人達は訓練 漬 けでも私らは そうでも ない。鈍らない ようには しているけどそれでも 一 日 で 1 時間か 2 時間 くらいしか訓練は して ないよな。」

い。

今はシグナムが新人達の訓練を受け持つてるけど、ヴィータとかもさっさと書類処理してしまつて暇してるみたいや……

「うーん……どないしよか」

……そうやな、新人達も慣れてきた頃やし他の皆も早く仕事を処理できるようになつてきた……ここらで機動六課設立祝いみたいなものやろかな……だいぶ遅い気もしなくもないけど。

うーん、取り敢えず皆の予定は……

一番遅い人でも私やヴィータの17:00上がりか……問題はなさそうやな。

後は店やけど……どうしようかな。

「あの店にしようかな……今日は何の店やろ……」

端末を確認する。案の定矢澤ハコからの新着メールが一件届いてる。

今日はレストランかあ……皆で食べるのは出来やんかな。

「ん?」

またメール来た。内容は……へえ、貸し切りに出来るんか。しかもある程度は自由に頼める……

よし。

「リイン、ちよつと放送用マイクに回線つなげてくれる?」

「ふへ?わかりました」

「どうしたの?はやてちゃん」

「んー、まあちよつとね」

お？つながった

？

『ああ、テストス、こちら八神はやて。みんな仕事やろけど聞き流すくらいで聞いて。機動六課の仕事にも慣れてきた頃やと思うから突然やけど親睦会に今日は皆でご飯食べに行こか。参加は強制や無いけど、今日は私の奢りやで』

取り敢えずあの店は経営成り立っているか謎なくらい安い。さつき送られてきた内容の料金表もありえん安さやったし。

『一応店の方は押さえとくけど、大抵のものは食べれると思うから何食べたかは考えといてな。時間は18：30にセントラルステーションの前集合な』

一方的に告げて放送を切る。

さてと、取り敢えず予約しておくか。あ、でもあの店って60人入るんかな……

「ちよつとはやてちやん？」

「ん？どうしたん？」

「いや、それ私の台詞だよ。いきなりどうしたの？」

「ああ、ちよつと思立ったんよ。今日は仕事も私達の5時上がり最終やったし」

それにまだ午前中やし考える予定はあるやろ。あ、まだ来てない人らにも連絡しとかんと。

「それにしてもいきなりだよ」

「こういうのは早めにしといたほうがええんよ。この前まで忙しくてそんな暇なかったやろ？」

「まあ……」

またメールや。えっと、100人でも大丈夫やって？いや、それは盛ってない？あの店そんなに入る気しないけど。

まあ、あの店長というかハコが嘘つかんやろし、なんとか出来るんやろな。それにしても随分とサービスがええよなあ……よっぽどお客さんが来ないんやろな。

「ああ、なのはちゃん。フェイトちゃんにも知らせといてくれる？」

「わかったよ。でも親睦会なんてどこでやるの？」

「例の店」

「ああ……」

あの店は色々と突っ込みどころとかを無視したら美味しいし安いからいい店なんやけどなあ……

ん？なんやろ。変な音が……

「八神部隊長!!」

「ん？どうしたん？スバル。今は訓練中違ったっけ？」

「休憩中です！それよりも！」

随分とすごい剣幕やけど……

「おかわりは自由ですか!？」

「……まあ、好きなだけ食べたらええよ」

「ありがとうございます!!」

そういえばこの子は大食いやったっけ……金は大丈夫かな……

あれ？またメール……

From : 矢澤ハコ
To : 八神はやて様

（ノ。旦那）コンニチハ

今なら一人あたり1000Gで食べ放題！（・▽・）オトクダヨ！

……あの店はホントに大丈夫なんかな。
でもまあ、全員参加としても6万Gは安ないかな……

◇

【とある研究所】

「ふむ、今日の晩ごはんはどうしようか……皆で食べに行くのも有り
だな……今日の店は……何？管理局の局員が来店予定？仕方ない。
今日は出前でも取るとしよう」

【とある飲食店】

『ゴシユジン！ゴシユジン！』

「どうしたの？ハコ」

『カシキリ！カシキリ！』

「え？まあ構わないけれど。今日は晩に誰か来るなんて事も無いだろうし」

『タベホウダイ！タベホウダイ！』

「うーん……食べ放題の相場は知らないなあ……一人1000Gでいいんじゃない？」

『54ニン！54ニン！』

「それじゃあ今のままだと入らないね。今日の昼の間は誰か来る？」

『ハンバーガー、ジュヨウナシ！』

「ははは、手厳しいね。それじゃあ改装するから手伝ってくれる？」

『ザシキ！ザシキ！』

「座敷かあ……大丈夫かな……」

『ダイジョウブ！ダイジョウブ！』

「じゃあ、そうしようか」

第14話

セントラル・ステーション、ミッドチルダ中央区にある大きな駅の前に集合したのは六課に所属する54人。6人はそれぞれ用事があるらしく不参加となった。

「んじゃあはぐれんように付いてきてな」

私の言葉に皆が返事したのを確認し中心街とは反対方向へと進む。

大きな道路の脇にある小さな道に入って裏通りを進む。

仕事帰りの人がちらほらおるけど大通りに比べると遥かに少ない。

まだ日は沈むきつていないけど、言い様のない不気味さが漂ってくる

……

と言っても目的地はもう目と鼻の先だ。駅から歩いて5分。そう言ってしまうば立地条件は良さそうやけど、ここらへんはそれこそ必要以上に飲食店がある。そんな中でこんな裏通りにある小さな店に誰も足を運ばないのは当然なのかもしれない。

「八神部隊長、一体どんな店なのですか？」

「ん？気になるか？ティアナ。後今は仕事じゃないから部隊長はいらへんよ」

足を止めずに歩いてて道を曲がる。すると見えてきた。今日の外装は……まあ、普通に居酒屋みたいに見えなくもない飲食店。その名も『天使始めました』。変な名前で変な店で変に特徴的な所。

例えばその店の玄関には看板の役目を果たすロボットが転がって

……

「あれ？」

「どうしたんですか？はやてさん」

「いや、ちょっとね」

なんでやる。前来た時もちゃんとおったのに、今はハコがおらん。気にすることではないと思うけど、何かおかしい気がする……

「はやて、早く入ろうぜ」

「う、うん。じゃあみんなこの店が今日の親睦会の会場やで。味は保証するで」

私が先頭に店に入ると、広い土間に優に100人は入れる座敷型の宴会場が広がっていた。

「……なあはやて」

「何も言わんでええで。ヴィータ」

絶対に店の外見に比べて中の方が広いけど気にしたらあかん。

ここはそういう店なんやから。

「いらっしやい、はやて様。人数に変わりなどはありませんか?」

「あ、ああ。さっきの通りの54人やよ。今日はよろしく」

いつの間に目の前におったんやろか。後予約の時も電話とかしてないけど私が考えた時に確認のメールが来てた。

おかしいところに突っ込まんようにしやんと……

「じゃあみんな座ろか」

「「はい」」

にしてもこんな座敷で食べるなんてやっぱり地球っぽいなあ……

ああ、そういえばさっきのこと聞いてみるか。

「なあ店長さん、どうして今日はハコが表におらんかったん？」

「ハコなら出前に行ってますよ」

「……どうやって？」

「普通にバイクにのって行きましたけど……」

「……………」

「ちゃんと免許も持ってるので大丈夫ですよ」

……私は何も聞かなかった。

◇

座敷の一番上座の方に座る。隣にはヴィータ、目の前にシグナム。近くにはヴォルケンの皆以外になのはちゃんやフェイトちゃんまでおる。

「取り敢えず皆鍋でも頼む？」

いつの間にか水や箸、おしぼりがある机から目を逸らしつつ提案する。こんな形式やったら鍋が一番美味しいし食べやすいよね。

概ねみんな反対はないみたいやから頼もうかな……あ、その必要ないか。

皆机にいきなり出現した鍋や飲み物に驚いているなんて気のせいや。

「取り敢えず乾杯しよか」

音頭を取って乾杯する。私は烏龍茶にしといた。

「後は好きに注文してええで」

今日の食べ放題は時間が決まっていない。普通やったら2時間な
んぼとか決まってるのに、店長さんに聞いたら寧ろそんなものがある
のかって言われてもた。変な所で天然やから困るんよな……

あと、お酒も出せるらしく、成人してる人らは飲んでもええってこ
とにしてる。ちゃんと帰れる人限定やけど……ヴィータはチューハ
イ、シグナムはビール飲んでるわ。

「店員さん!!」

あ、スバルがいの一番に注文しようとしている。あの子は確かよく
食べる子やったよね……

「うわ!!」

……スバルが何も言う前にどっさりと食べ物が出現したように見
えたけど気のせいよな。

まあ、気を取り直して私も注文しよかな。

そうやなあ……オードブルとかは……後白いご飯とか食べたいな。

あのさ、注文しようとは思ってたけど言う前に来るってどういうこと
なんよ……

「やっぱギガウマだな!はやて!」

「う、うん。そうやね」

「主、この店些がおかしくはありませんか?」

「……気にしたらあかんねん。気にしたら……」

そうしたら安くて美味しいごはんが食べれるんやから……

「はやてちゃん、この鶏肉凄い美味しいよ」

「はやてさん！このカレーライスっていうのは何ですか!？」

「八神部隊長！大吟醸って美味しいのか!？」

「なのは、醤油とって」

「このケーキ美味しいのですう」

「主はやて、良ければ鍋をよそいますが」

「そうなんやなのはちゃん。スバル、カレーはご飯によく合う美味しい物やで。ヴァイス、私はお酒飲んだこと無いからわからへんよ。ちよつとデザートには早くないかな？リイン。あとザファイラありがとう。よそつてくれる?。」

……………気にしたら負けなんよ……………

『デマエ！デマエ！』

「ありがとう。それにしても良く持ってこれたね……」

『アイシャ！アイシャ！』

「ほう？ブラフ・シユーパーリアSS100か、中々渋いものに乗ってる……いや、合体してるのかい？」

『ハコの旅、大人気作品！』

「いきなり流暢に喋り出して何を言ってるんだい……それにしても、はたして君にはヘルメットが必要なのか？」

『ヒツヨウ！ヒツヨウ！』

「そうか……」

|||||

第15話

あの八神はやてさんが部下達を連れて来てから2週間が経過した。自分は滞り無く店の運営を続ける毎日。来る日も来る日もお客さんにご飯を提供する。

まあ、実を言えば2週間前からこの店は少し変わった。八神はやてさんの部下、ヴィータさんとヴァイスさん、常連でもあるプレシアさんに度々来店してくれているリンデイさん達の強い要望により夜の間の店の内容が変更になった。

結果的に言えば居酒屋とバーを日替わりですることになったんだけど……その御蔭か客足が少し増えている。中でもよく来るのは強く要望した人達の4人だ。

家族との付き合いもあるから毎日とは行かないけど結構な頻度で確認のメールをハコが送っている。

バーはプレシアさんとヴィータさん。居酒屋はリンデイさんとヴァイスさんが確認しているけど、中でもヴィータさんは他でお酒を飲もうとしたり買おうとすると度々局員の人に捕まるらしく、飲みに来るといつも愚痴っている。

確かに他の人達に比べたら見た目が若くみえるみたいだけど、実際自分達天使がそうであるように外見と中身の老若が結びついていないことは多いため、特に気になっていない。寧ろ年齢というものあまり拘っていないのは確かなのだろう。

その事を告げたら何故かすごい笑顔で笑っていた。

ハコに写真を撮られ追い掛け回していたけど……

そう言えば他にも変わったことといえばハコの事が解った。自分で作っておきながら色々変な事になっているのにはちゃんとした理由があつて、この前ミカエルさんが電話で教えてくれた。

何でも神様が自分の生活を覗き見しているみたいで、巫山戯てハコを改造したらしい。

その結果、ハコ自身が自己改造すらも出来るようになり、色々と変
なっているようだ。しかもたちの悪い事にハコの自己改造には神
様の・書き上げた設定資料集（仮）にアクセスして行っているらしく、そ
れを通して神様の私物と繋がったりも出来るようだ。

その事がミカエルさんにバレて5年間お菓子抜きと全天使と上位
の神様達が集まる会議で黒歴史ノートの朗読会をされたみたい……
でも神様の力なら下級の神とは違って世界に介入するのに問題はな
いらしい。かと言ってあまり良くもないのだけだ。

自分の上司の醜態や恐ろしさを身にしみつつも今日の昼の部、ラー
メン屋の経営を続ける。

今来ているお客さんは13人、中々多いと思うかもしれないけど、
スカリエッティさんが大勢連れて来ているだけであり、2週間に1回
はこの店でも見ることの出来る光景だ。

「やはり美味しいな」

ただ一人だけカウンターに座るスカリエッティさんはラーメンの
スープを味わいながら呟いた。

自分はその声に傾けつつもスカリエッティさんの娘さん達の追加
注文を時を止めつつこなしていく。

「それで店長、今日は一つ頼みがあって来たのだが……」

「ツケは3回しかダメですよ」

「……いや、そうではないよ」

ふむ、頼みか。それはあそこにいる金髪の小さな女の子の事かな。

あの子一人だけ浮いてるし、スカリエッティさんの娘でもなさそう

だし……

「実を言うとあそこにいる小さな女の子を暫くの間預かって欲しい」
「いいですけど」

「無論、断られるのは解っている。だが出来ればりゆう……を？」
「……………」

「聞き間違いかもしれないが今いいと言ったかね？」

「はい」

何故かスカリエツティさんは蓮華を握ったまま固まってしまった。
一体どうしたのだろうか……仕方ない。ここは少しズルをしようか。ハコの特特殊技能でもある【お客さんの注文・要望聞き逃さないY O!】(命名神様)によって思考を読んでもらいそのまま自分に届けてもらう。

(この反応は予想はしていたが実際に起こるとは思わなかった。この店長であればあの子は安全な場所にいられるがこうも簡単に解決しまうとは…………)

いまいち解らないな。人間は思考を読んでもわからなかったりするから少し困る。まあ、それが人間の優れた場所なのかも知れないけど…………

「と、とにかく！助かるよ。あの子はまだ幼いがいい子だ。しかし少しばかり立場が特殊で狙われている。あの子を守ってれないか？」

「いいですよ」

「…………随分と軽いな…………まあいい、おーいヴィヴィオ君！」

「どうしたのお？」

スカリエツティさんに呼ばれた子は娘さん達の輪から外れ、此方へと歩いてくる。随分と小さい、ヴィータさんよりも小さいかな。

「ヴィヴィオ君、この人が暫く君を預かってくれる人だよ」

「ヴィヴィオの家はスカさん達の家じゃないの？」

「すまないね。あの家では娘達でいっぱいなのだよ。それに私達の家じゃないと言っても寂しくないぞ？ここなら私達は遊びにこれるからね！」

女の子はうーんと唸りながら首をひねる。まだよく解っていないだろう。ハコから送られてくる思考もお菓子のことでいっぱいだ。

「ここがヴィヴィオの家？」

「そうだよ」

「この家はこの人の？」

「そうだね」

また思考がぐるぐるとしだした。取り敢えずまだお菓子のことも考えているので買い出しの時にハコが勝手に買い物かごに入れたお菓子を渡しておく。

「わあ！お菓子が出てきた！」

「……どうだい？ヴィヴィオ君。今のは彼が君にした贈り物さ！」

「もしかして魔法使い!？」

なんだかすごく目を輝かせて此方を見ている。

視線をスカリエッティさんに向けると、何かを目配せ中。ハコから送られてくる思考によれば、何か上げればいいみたいだけど……

この子が考えているものの中……お菓子の家が出てきた。うーん、流石に改装もなしに実物大のお菓子の家作るのはダメだから小さなのでいいかな。

時間を止めて調理する。幸いにもイメージは解っているし材料も厨房のものとハコのお菓子がある。

土台はスポンジケーキ、止まった時間の中でつまみ食いをするハコに食べ物を与えつつケーキを焼き上げる。

その間にトッピング用のクリーム3種類を作り上げておく。生クリームにチョコクリーム2色だ。

まだ時間も余っているのでクッキーも焼いておく。普段よりも小さく形成するのも忘れない。

焼き上がった箱型のスポンジケーキの中身をくり抜きハコに食べさせておく。今更だけど何故ハコは物を食べるのだろうか。機械だから必要も無いだろうし、食べた後の物がどうなっているかはわからない。

とまあ、ぶれた思考を修正してすすめる。内装はくり抜きの段階で仕上げておいた。チョコクリームを塗り薄い2色のクッキーで壁や暖炉を作る。椅子などの家具はチョコクリームと生クリームを混ぜて調整した色で彩色。

外装は女の子のイメージ通りに彩っていく。その時にポツキーを使ったのだけど、ハコに体当たりされたため、日本で買った551というところの肉まんをハコの口に加えさせておいた。

最後にチョコをカッティングしてドアにして繰り抜いた場所にはめ込んで完成。

皿に載せて女の子の目の前のテーブルに置いて時間を動かそうとしたらハコが騒いでいたので以前作ったハコの形のチョコボールを上げておいた。

気を取り直して時間を動かす。

「うお!!」

「きゃ—————!!!」

女の子が悲鳴を上げてしまった。どうしてだろう。

「凄い！凄い！！ヴィヴィオこんなの初めて見た!!!」

「い、いつも思うが君は何者なのだ」

「ねえ！これ食べていい?！」

どうやら喜びの悲鳴だったようだ。キラキラとした目で此方を見ている。

まあ、折角作って食べてもらえないのは悲しいし、食べてもらうために作ったので頷いておく。

あ、ちなみにハコはチョコボールを丸呑みしようとして噛み付いてるけど、中々厳しそうだ。

「とにかく喜んでもらえたようだね」

「凄いね！えつと……ヴィヴィオはこの家に住むから……パパ?」

「そうだね、彼が君のパパだよ」

いつの間にか自分は父親になっていたらしい。

取り敢えず女の子、ヴィヴィオちゃんの思考に飲み物が出てきたからココアを置いておく。

「えへへ！ヴィヴィオのパパは魔法使い！」

第16話

「で、最近は何もスカリエツテイの情報集めに没頭しているってわけだ」

「そう……あの子には負担になってほしくなかったのに、聞かないのよね」

夜、今日はバーの日、店内にはプレシアさんとヴィータさんの二人だけがいる。既に飲み始めてから1時間は経過しているけど未だに話が止まる様子はない。二人共顔見知りで前に来たフェイトさんの話を今はしているようだ。

自分は特に何も知らないので話には加わらずにつまみを作っている。あまり時間をかけなくてもいいとのことと普通に料理をしていた。

スカリエツテイさんの事を知っているだつて？自分の知る彼とプレシアさん達が話している人物が同一人物で無いかもかもしれないじゃないか。なので話す必要はないと思うんだよね。まあ、同一人物だろうけど……

「ああ、店長。スクリュードライバーをくれ」

「了解しました」

「私は適当なワインにしてくれない？」

「はい」

えっと、ウオツカは……ツアールスカヤにしておいて、赤ワインは1986年代のシャトーラトゥールつと。

タロッコオレンジを絞り、ウオツカと混ぜてシェイクしたスクリュードライバーをヴィータさんの前に、プレシアさんにはワイングラスに一杯だけ注ぎ、ボトルも置いておく。

「ん、やっぱりこの酒は美味しいな」

「ええ。このワインも年代物じゃない。高かったんじゃないの？」
「それでもありませんよ」

確か600ユーロくらいだったし。

まあ、一本1000Gで出しているから完全に赤字になるだろうけどね。

「私にも飲ませてくれよ」

「ええ。店長、グラスは……あるわね」

「相変わらずだな。この店長は」

プレシアさんが言い切る前にグラスを置いていたのが驚かれた。別に今のは時を止めたわけでもないんだけどね。

「そう言えば一つ聞きたいのだけど」

「どうしましたか？」

「今日は矢澤ハコが店の前に転がってなかったけどどうしたの？」

「また出前か？」

「ああ、ハコなら……」

家の中の気配を確認する。

ん？どうして店の方に近づいてきてるんだろう。ヴィヴィオちゃんトリピングで遊んではずだけど……

「今こっちに来てますね」

「あ、家にいるのかしら？」

「はい。少し頼みごとをしていたので」

「頼みごと？」

背後の扉が開きハコとヴィヴィオちゃんがやってくる。どちらとも眠そうにあくびをしているな。ハコは本来睡眠が必要ではないはず

だけど、ヴィヴィオちゃんはまだ子供だから流石に眠いのか。もう20時だし仕方ないのだろう。

「パパあ、お風呂お」

「ん。わかったよ」

影分身を発動し、分身にヴィヴィオちゃんの入浴を任せる。ヴィヴィオちゃんは目を擦りながら「パパが二人だあ」って言いながら分身と家に戻っていった。

ハコも着いていこうとしたが閉じられたドアにぶつかって地面に落ち、そのまま眠ってしまった。

取り敢えずこの前作ったハコのベッド(ダンボールに穴を開けてハコのようにしたもの)に寝かせておく。

そしてまたつまみを作りだそうとしたのだが、どうにもプレシアさん達の様子がおかしい。口を開け、固まってしまっている。

取り敢えず出来たクラツカーを出しておいた。

「貴方、娘がいたの!？」

「ああ、はい。いますよ」

「ちよつと待て!あの娘は何歳なんだ!？」

「確か、5歳ですね」

「つてことはあれか!?お前10歳の時に子供産んだつてことかよ!」

「へ?」

「つてちよつと待ちなさい。あの子つてヴィヴィオちゃんよね!？」

「ええ、そうですよ」

良く知ってるなあ、プレシアさん。もしかして知ってる子だったのかな。それとも有名な子?」

「プレシア知っているのか!？」

「フェイトとなのはちゃんの娘よ」

「あいつら娘がいたのか!？」

へ？自分はそんな事知らないのだけど、フェイトさんも、なのはさん？もあまり話したことはないけどヴィヴィオちゃんはあの二人の子供なんだ。

でもそれじゃあどうしてスカリエッティさんが連れていたんだろう。思想的に誘拐では無かったし、いまいちわからないな。

「いえ、なんて言えばいいのか……取り敢えず店長。あの子はどうしたの?。」

「知り合いに頼まれて親になりました」

「……はあ!？」

「……と、取り敢えず色々整理しましょう!。」



1時間後、今の状況を自分達は把握した。

プレシアさんが知っていたのは以前過去に飛ばされた時に未来から来ていたヴィヴィオちゃんと会ったかららしい。そこではフェイトさんとなのはさんの娘になっていたそうだけど、自分というイレギュラーのせいで変わってしまったみたいだ。

少し困ったなあ、自分が何をしようが正史として進んでいくのだけど、本来は違うはずなのだ。あまり世界の行く末に関わりたくはないのだけ……

自分もスカリエッティさんの事は伏せつつもヴィヴィオちゃんのことを話しておいた。

勿論、誰かに狙われてるってことも……

「だから！はやてはあたし達がいるから大丈夫だつて！」

「解つてないわね。このままじゃああの3人は下手すれば一生独身よ？唯でさえ立場的に一歩引かれるのに」

「でもさあ……」

「家族愛にあふれていたとして、恋愛したくても出来ない子もいるのよ？」

何故かヴィヴィオちゃんの話からガールズトークになっている。

一応男である自分が混ざるわけにもいかないし、風呂から戻ってきたヴィヴィオちゃんにココアを飲ませておく。

「まあ、店長にはフェイトの旦那さんになって貰うからはやてちゃんには渡せないけどね！」

「何か言い方がムカつくぞ！はやての旦那だって店長みたいに料理が上手い奴がなるんだよ！」

「それ、貴方が美味しいもの食べたいだけじゃないの」

お酒も入ってるおかげか中々にヒートアップしている。

「喧嘩はダメだよ？ヴィータお姉ちゃん、プレシアさん」

「おう、喧嘩はしてないからな。今は楽しくお話しているだけだぞ？ヴィヴィオ」

「そうよ。あ！そう言えばヴィヴィオちゃん、ママがほしくない？」

「ママ？ヴィヴィオのママ？」

いつの間にか二人共ヴィヴィオちゃんと仲良くなっている。人間の子供というものは他者に対して友好的に接するものようだ。

「ええ、フェイトママって言ってこの写真の女の人が貴方の母親よ」

「あ！何見せてんだよ！違うぞヴィヴィオ！このはやてママがお前の

ママだ！」

「うー？」

二人して端末をヴィヴオちゃんに向けている。いや、子供に理解できないんじゃないかな。それにママって……本人に了承も取らずに良いのかなあ……

「さつきははやてちゃんには必要ないって言ってなかったかしら？」

「ヴィヴィオは天使だ。その母親であるはやては大天使だ」

「意味がわからないわよ」

む？ヴィヴィオちゃんは天使ではないと思うけど……はやてさんもサリエルさんのような力を感じないから大天使ではないだろうし……

「ヴィヴィオにはママが二人いるんだね！」

「……………」

何故かヴィヴィオちゃんには二人の母親がいるらしい。

自分が知らないことがどんどん露見していくさまはある意味痛快ではある。正直自分自身この流れにはついていけないから仕方ないのだろうけど。

今もスピスピいながら眠っているハコにため息を吐きつつヴィヴィオに2杯めのココアを渡す。

「ありがとう！パパ！」

「……ヴィヴィオ、お前のママは2人じゃないぞ」

「ええ……」

「ふえ？そうなの？じゃあ誰がママなの？」

「フェイトママと」

「はやてママと」

「？」

「二ついでになのはママだ（よ）」「
「3人もいるの!？」」

……母親は3人らしい。

第17話

「ふう、疲れたあ」

これで今日処理すべき書類は終わり。後はなのはちやん達の教導の資料に目を通す事くらいでやることは無くなるかなあ……

何か終わったと思うたら少しお腹が減ってきた。ちらりと時計を見てみれば昼過ぎ。昼ご飯食べてないのだから仕方ないのだろう。

取り敢えず食堂に行こうかな……ああ、そう言えばヴィータもまだ食べてなかったっけ。ずっと書類を作成してるし。

「ヴィータ、ご飯行こ」

「ん。ちよつとまってくれよ。もう少しで終わりそうだから」

確かにヴィータの机の上には書き上がった書類が数部ある。恐らくは今やっている書類で終わりなのだろう。

「ああ、そう言えば一つ聞きたいんやけどええ？」

「なんだ？はやて」

「最近良くあの店長の店に行ってるけどあの店長に変わったこととか無かった？」

「……い、いや。何もねえぞ」

何や？何でかヴィータが吃って視線を泳がせた。

それでも作業を止めないのは流石というべきか……

「なんか怪しいけど、まあええか。あの店長は一応密航まがいな事やってるから目を光らせやなあかんで？」

「わ、わかってるよ。でも仕方無くないか？だって瞬間移動で地球のコンビニでアイス買ってくるような奴だぞ」

「……ヴィータ、アイス買ってもらた？」

「……………」

露骨に目を逸らしたで。

局員やのに目の前で渡航許可の降りてない世界への移動を黙認するだけでなく、物を買ってきてもらうって……

「……………これはあれやな。1回くらい私らも見に行かんとあかな」

「い、いや！そんな必要はねえよ！」

「流石にいきなり捕まえるようなことは出来やんけど、あの店長に注意くらいしやんとな」

「あたしがしておくから大丈夫だって！」

んー？なんかヴィータの反応怪しいなあ……まるで私らが見せに行くのを嫌がつてるみたい……

まさかヴィータ……

「あの店長を私らに取られるって思ってた嫉妬してるんか？」

「そんなわけねえよ！」

「じゃあ別に行ってもええよね？」

「うっ！………だけどさ………」

ちようどええ時にハコからメール来てるわ。夜はバー。つまりヴィータが行く時の店やな。

「んじやあなのはちゃんやフェイトちゃん連れて今日行こか。シグナムとシヤマルは………残業あるんか………後で合流やな。ザフィーラは予定もないし大丈夫そうや」

「いや、本当に大丈夫だから！」

「手止まってるで」

「うっ！」

私の指摘に唸り声を上げながら書類を作成するスピードを上げる。
反応的に何かがあるのは確かか。こんなヴィータ見たこと無いから
今から楽しみやわ……

「仕方ねえ、こうなったらプレシアも巻き込んでやる。例の件はあいつも共犯なんだから」

「なんか言った？」

「何でもないぞ！終わったし飯行こうぜ！」

「うん、じゃあ行こか」



【とある研究所】

「そこで私はこうだと思っただが……」

白衣を着た男性、ジェイル・スカリエツティは研究所内で自分のパソコンに向かい、何かを弄りながら呟いていた。

「なるほど、確かにそのように作用するが……何!? そうしたら変形できると!?」

部屋の中にはスカリエツティ以外はおらず、傍から見れば独り言を呟いているようにも見える。

実際に彼の娘達は扉から部屋の中の様子を覗き見て彼の様子に困惑している。

「それは魅力的だが、その回路に耐えうる材料が……え？聞いたこともないのだが。そのような物質」

見た所マイクやイヤホン。カメラなども装着している様子はない。ただ画面を見ながら小さな機械を弄る。

実を言うと彼が話している相手は、例の店の店長、上月典矢ではなく、小さな球体の金属体。矢澤ハコだった。

ジェイル・スカリエツティの呟きをまるでその場にいるかのように反応しハコはメールを送信してくる。そのメールを使い、彼は研究の事を議論しているのだが……

「なあ、ドクター大丈夫かな……」

「最近は一〇時に寝て七時に起きてるし、ご飯もしっかり食べてるから健康だとは思うけど……」

「頭がイカれちゃったか？」

周りからは只々異常にしか見えない。しかしスカリエツティにとつてそう思われようがこの議論を中断することはない。それほど彼がこの議論が重要だと理解し、また世間から見てもとんでもない意見の応酬なのだと感じているからだ。

「所でハコ君、そろそろ店長に君を調べさせる許可を貰えないか？何？ISのコアを作るのに忙しいだつて？何だね、そのISと言うのは

……もしやインターフェイススキルではあるまいな……なに？宇宙空間での作業を目的としたパワードスーツ？」

手に持った機械を机に置き、スカリエッティは横にある白紙の紙に何かを書き込んでいく。

矢澤ハコから送られてくるA アスキーアート Aを元にメールの本文にある情報を纏めているようだ。

「ふむ、一定のダメージの無効化と質量兵器や魔力兵器を詰め込んで障害物にも安全だと……最早兵器ではないのだろうか……いや、違うな、その機動力とそれだけの精密さなら確かに宇宙空間での作業に向いている……ふむ……コアは店長が作って動力部分は君が作っているのか……君は何者かね」

紙に記すスペースが消えたのを確認し、新たな白紙を用意し、更に書き込んでいく。

彼にしてみれば夢物語のような部分も多いが、それを実現している者が現実存在していることにスカリエッティは喜びを覚えつつ、笑みを浮かべる。

「何だね、その太陽炉やら縮退炉という物騒な名前の物は……む？オルゴン・クラウド？螺旋力？聞き覚えがない言葉だが……ゲッター線とは何かね」

疑問をぶつけつつも彼の顔から笑みが取れることはない。自らを生み出した最高評議会に恨みすらも持っていた彼はこの瞬間だけは間違いなく、充実した人間らしい笑顔を浮かべていた。

「ギアスキャンセラー？ふむ、何か心に引つかかるものが……オレンジとは柑橘系の果物だということは私も知っているよ」

第18話

「……一体どういふつもりかしら？」
「……」

現在時刻、17時。バー、“天使始めました”の前には現在6人の男女が立ちすくんでいた。その面々を見てプレシアは頬を引きつらせる。

彼女は今日はヴィータに誘われこの店にやってきていた。最近は一緒に飲むこともある二人のだが、ヴィータの誘いが珍しい事も相まって来るつもりはなかった日にやってきていた。

しかし、蓋を開けてみれば他に4人来ている。しかも自分の娘を含め知り合いどころではない人物達。先日はこの店の少女にある事を吹き込んでしまった彼女にとっては顔を合わせるのが辛い相手だ。

「まさか！」

そこでやっと彼女は気づく、あの時吹き込んだのはプレシアだけでなくヴィータも一緒なのだ。つまり気まずいのはヴィータも同じである。恐らくはふとした事で気付かれてしまい、死なば諸共とプレシアに連絡したのだと。

「やってくれるわねっ!!」
「へっ！一緒に堕ちようぜ、プレシア！」

そんな二人の様子に4人は困惑する。この立案者であるはやてでさえヴィータとプレシアの問答には検討もつかない状態なのだ。

「なあ、一体どういふことやと思う？」

「私はよくわからないよ。こんな母さん見たこと無いし」

「私もわからないかな。でもヴィータちゃんとプレシアさんがここま

で仲がいいなんて思ってたし」
「……………」

そんな様子の6人を見つめるのは一人の少女。店の扉を少しだけ開きながら興味深そうに見ていた。

頭の上には丸いロボットの姿もある。

「取り敢えず、入ろうか」

はやての言葉に6人は店の方に近づく。それに反応した少女は6人に気づかれる前に店の中に隠れてしまった。

閉められた扉からカランコロンと音が鳴ったのに・疑問に思いつつもはやては店の扉を開き入店した。

「いらっしやいませ!!!」

『いらっしやい!いらっしやい!』

そして、目の前に現れた青いエプロンを着た金髪の少女の姿に思考を停止した。



「えへへ!見て見て!ヴィータお姉ちゃん!これパパに貰ったの!」

「ん?腕輪か。似合ってるじゃねえか」

「かつちよいいでしょ!」

取り敢えずカウンター席に座ったはやて達はザフィーラを覗いた5人、全員が少女、ヴィヴィオの様子を観察していた。

店長はそんな彼女達には特に反応せずいつも通り彼女達が注文したと同時に品を提供している。

「ヴィータ、説明してくれる？」

右腕に着けた黒に蛍光色で黄緑のラインが入った腕輪と左腕に着けた白に赤のラインが入った腕輪を見せびらかすように振り回すヴィヴィオを膝に載せたヴィータにはやては問い詰める。

それに少し苦笑いを浮かべたヴィータに代わりヴィヴィオの事を知るプレシアはその口を開いた。

「店長の娘なのよ、誰かから預かってるみたいだけど」

「そうなんですか。でもさっきの言葉はどういう意味なんですか？」

そう、入店した彼女達を迎えたヴィヴィオはなのは、フェイト、はやての3人を見渡した後笑顔で言い放ったのだ。

「フェイトママ！はやてママ！なのはママ！はじめまして！」と。

暫く意識が帰ってこなかったのは仕方のない事かもしれない。

3人は少し顔を赤くしながら店長の方をちらちらと見ているが当の本人は何故見られているのかがわからずに首を傾げている。

彼女達の中では店長がヴィヴィオにそのような事を吹き込んだのではと思ってしまうている。恋愛をしたこともない彼女達にとって異性からの好意には慣れていなかった。

そんな事を考えてると感じ取ったプレシアと

ヴィータは目をそらし呟いた。

「酒の勢いって怖いよな」（ね）

「あんたらの仕業か!？」

プレシアに至っては少しばかり計画的な事ではあったが、概ねヴィオが彼女達を母と呼ぶ原因は2人にある。

それを止めたり訂正しなかった店長も店長なのだが、咎められるのはヴィータ達なのだ。

「母さん、どういうことなの？」

「あのね、聞いてフェイト。悪気があったわけではないのよ」

「ねえ、ヴィータちゃん、どうしてこんな事したのかな？」

「だって、プレシアの奴が……」

追い詰められる二人を憐れむように見ながらザフィーラは店長に出された肉料理を頬張る。肉汁が滴る肉に満足気に頷きながらもどんと口に運んでいった。

「正座」

「はい」

等々正座させられた二人をヴィオは不思議に思いながらも身体を揺らしながらカウンター席に座った。

「パパー！」

その言葉とともに現れるハンバーグとジュース。目を輝かせながらフォークで食べ始めたヴィオの様子を見て背後で騒いでいる女性陣を無視しザフィーラは店長へと話しかけた。

「この娘にはいつもこのような物を与えているのか？」

「まあ。食べたいて言ってますし」

「ふむ……私が言うことではないが、野菜も取らねばいけないのでは？」

「一応食べさせてますね」

『ヴィヴィオ！ピーマン！タベル！』

「ヴィヴィオ、ピーマン、嫌い……」

ヴィヴィオが除けたピーマンが消えたのを一瞥し、ザフィーラは店長へと視線を向けた。

「嫌いな物を無理矢理食べさせるのは良くないかと……」

「……少し甘やかし過ぎではないか？」

「そうですか？」

店長の様子はザフィーラから見ても只々疑問に思っている様な顔をしていた。

それに少し疑問を持ちながらもザフィーラは店長へヴィヴィオの教育について聞き出していく。

暫くしてはやて達もザフィーラと店長の問答に耳を傾ける。

今思えば彼女達は失念していたのだ。あまりそうは見えないがこの店長は紛れも無く15歳、自分達よりも年下であるのに少女を育てているというのは大丈夫なのだろうかと考える。

そして、店長はそんな彼女達にある爆弾を落としてしまった。

「親に触れた事もないので、子育ての仕方はあまりわかりませんね」

軽々しく呟いた言葉に彼女達は絶句する。そんな彼女達に気付くこともなく店長は笑顔を浮かべているヴィヴィオの頭を撫でる。

店長も少し笑みを浮かべている様子を見て彼女達は目の前の親子がどれほど危うい存在であるのかを認識する。

どちらもまだ幼い身でありながらも幸せに暮らしている。

簡単なのはヴィヴィオを誰かが代わりに……それこそプレシアやリンデイと言った大人が育てるということなのだが、彼女達には目の前の二人を引き離す事は出来そうにない。

軽々しく自分の娘を、自分の主を親と言ってしまったプレシアとヴィータは頭を抑えつつ後悔した。

「いいよ、じゃあ私が教えてあげる」

そう言ったのは高町なのはだった。フェイトやはやてとは違い、完全にとぼつちりのように親だと吹きこまれた彼女だが、目の前でハンバーグを頬張る少女の笑顔を守りたいと思い、言葉に出したのだ。

何故そこまで思うのかはわからない。ただ言えるのは彼女にとつて、目の前の店長やヴィヴィオは既に他人とは言える存在ではないということだ。

「流石にいきなり結婚とか・付き合うとかじゃないけど、ヴィヴィオがちやんと育つように私も協力するよ」

ニコリと笑うなのはを見たフェイトとはやては苦笑し、やれやれと言いつつも店長に向き合い告げる。

「そういうことなら私も母親になるわ。なのはちゃんだけじゃあ不安やし」

「まあ、流石に放ってはおけないよね」

彼女達の言葉にプレシア達は驚く中、店長とヴィヴィオオ本人達だけが
がいまいち理解していなかった。

第19話

「それじゃあ私達がヴィヴィオの子育てを手伝うって感じでいいかな」

「はあ……」

未だに頭からはてなマークが取れていない上月典矢はなのはの言葉に曖昧に返事をするだけである。

典矢にとって自分の知らぬ間にトントン拍子で色々と物事が決まっていくことは不思議に思えた。しかし、特に出来ることも無いのでヴィヴィオの前にジューズのおかわりを出す。

「それに偶には外出させたりしなきゃダメだよ？何だったら私達が暇な時に連れだすし……」

その言葉に典矢はうーんと唸りつつ首を傾げる。なのはにとって昼間も店を経営している典矢に代わりヴィヴィオの相手を名乗りでたのだ。それはフェイト達も同意見であり、なのはの言葉に頷いていた。

しかし、どうにも典矢はその必要性を感じない。ヴィヴィオを外出させるのはわかるが何故なのは達が連れだすのかを……

「あー……そう言えばなのはは知らなかったよな」

何故典矢が唸っているのかを察したヴィータは一般的な意見を持っていない、というかどことなくズレた感性を持っている典矢に代わりなのは達へある力の事を伝えた。

「こいつ、分身出来るんだよ」

「え？」

「ふえ？」

「なんやて?」

時間停止、瞬間移動までは彼女達もプレシアから聞かされていた。機械を作るのが得意なのと思考を読み取るのも典矢と接するうちに察していた。それだけでも大分頭の痛くなるような規格外さではあるがそれに加えて更に摩訶不思議な力が有ることに彼女達の思考を止めるのには十分であった。

「パパはさいきよーだからねー」

なのは達が呆気にとられている理由を察したヴィヴィオが無邪気な笑顔を浮かべて誇らしげに言う。頭の上のハコも誇らしげなのは皆に無視されたが。

だが、あながちヴィヴィオが言っていることは間違いではないのかもしれない。そう彼女達の中で共通意識が繋がっていく。

目の前でプレシアにワインを注いでいる彼は余りにも規格外な存在であり、余りにも無知な人間でもあるかもしれないと……

「ああ、そう言えば一つ言い忘れてました」

突然典矢はそう口を開いた。

彼はワインのボトルをカウンターに置いた後一瞬ハコへと視線を向ける。

それにハコは頷き、ヴィヴィオの頭から飛び降り、顔の前に浮遊した。

『ヴィヴィオ、ゲーム、スマブラ』

「うん！ゲームしよう！ヴィータお姉ちゃんも行こう！」

「あ、ちよつと待てよ」

ハコの言葉に笑顔で頷いたヴィヴィオはカウンターの側にあるド

アを開きハコとヴィータとともに出て行った。

それに今からする話はヴィヴィオには聞かせてはいけない事だと気付き、なのは達は改めて姿勢を正し典矢の言葉に耳を傾ける。

「自分は、ヴィヴィオちゃん……いえ、ヴィヴィオを管理局に近付けさせません」

いきなりの宣言であった。彼の意図を理解できずになのは達は話の続きを待つ。

カウンターに肘を乗せ手を組んで顎をのせた典矢は少し微笑みつつも続ける。

「これは貴女方を信用してお教えすることです」

彼の口調に若干の変化が現れている。それに気付いているものはプレシアだけであり、これこそが彼本来の話し方であると知っていた。

「まず順を追って説明しましょうか。ヴィヴィオを自分に預けた人物は彼女はある立場から狙われていると言っていました。だからこそ自分がいるこの店にあの子を託しました」

「……「ついいいかな?」

「どうぞ」

「その、ヴィヴィオを連れてきた人って誰ですか?」

思わず敬語になってしまっているはやての言葉に典矢は一瞬目を伏せ小さな言葉である名前を呟く。

「ジェレミア・スカーレット」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【上月邸】

『ブフウウウウ!!』

「ハコちゃんどうしたの？ドンキー落ちちゃったよ？」

『ナ、ナンデモナイヨ』

『（オレンジ！オレンジ！）』

「何で、トサキントが出るんだよ！」

「あ、スカさんのカービィが吹っ飛んだよ！相変わらず運が無いね！」

『……』

【とある研究所】

「あの、ドクター？」

「ちよつと後にはしておいてくれないかな。今ヴィヴィオ君の実力と運に戦慄している所なのだ！」

「ゲームも程々にですよ？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「聞いたこともない名前や。まあそれで狙われてるって誰から?」
「彼は教えてはくれませんでした。だから調べたんですよ」

重々しく話す彼の口調に嘘を付いている様子はない。これで嘘を付いているとすれば相当なポーカフェイスといえるのだが……

それよりもプレシアは改めてヴィヴィオの事を思い浮かべる。
立場的に狙われている。あの幼い子が何かをしたわけではない。
あるとすれば親が特殊かフェイトのように生まれが特殊な場合……

そこでプレシアは情報を頭の中で整理していく。まず彼が告げた言葉にある管理局に近づけさせない。つまりは管理局が狙っている、若しくは管理局に関わりのある組織が狙っていると考えてもいい。出生が特別なのだと思えば研究組織の可能性もある……だが、何かがプレシアの中では引っかかっていた。

そう、ヴィヴィオの容姿、金色の髪に、特徴的な緑と赤のオツドアイ。それを見た時に彼女は何か引っかかっていた……

あれはアリシア・テスタロツサを生き返らせるために様々な文献や資料を読み漁っていた時……そして、フェイトと共に生き、管理局に改めて所属してから調べたこと……

プロジェクトF、フェイトの生まれた研究にある組織が目をつけていた。

「……聖王教会」

「流石ですね」

プレシアの呟きへの返答はまさしく彼女の考えが正しい事を物語っていた。

出来れば当たってほしくなかった。ヴィヴィオの正体。

なのは達はプレシアの行き着いた考えを察することは出来ない。聖王教会に繋がりのあるはやてでさえ気付くことのない事柄。

「ヴィヴィオちゃんは、聖王オリヴィエの子孫……いえ、子供がいた文献はなかった。つまり」

「はい。あの子は聖王のクローンです」

余りにも軽い口調になのは達は一瞬何を言ったのかを理解できなかった。

唯一人、事態を理解しているプレシアはグラスに入ったワインを一気に飲みながら深く息を吐く。

「そりゃあ管理局に近づけられないわね。聖王教会の連中がこぞってあの子を祀り上げるわ」

「スカーレットさんもそれを危惧したのでしようね」

「そのスカーレットって人がどうしてヴィヴィオちゃんを連れていたのかは気になるけど、正直こんな事になるなんて思っていなかったわ」

プレシアはいつになく真剣な眼差しでフェイト達へと向き合った。

「ごめんなさい。軽々しくあの子の母に仕立てあげてしまったのは悪かったわ。正直貴方達には荷が重い」

「……母さん」

「……」

「……どういう意味ですか」

「今なら引き返せるということよ。こうなったのは私の責任だから後は任せなさい」

プレシアは冗談で言っているわけではない。ヴィヴィオという少女はその存在だけで一つの争いが起きる可能性もある。それに娘達を巻き込むわけには……

「店長さん。一つ聞いてもいいかな」
「何かな」

プレシアの言葉に静まり返った店内でなのはの言葉が響く。
それに応える典矢は相変わらず微笑みを浮かべていた……

「貴方はヴィヴィオの境遇を知りどう思い、どうして育てているの？」
典矢は微笑みを崩すことはせずに小さな声で呟いた。

——自分の娘だからだよ

その言葉になのはは笑顔で頷いた。

「ふふ、じゃあ私も一ついいかな」
「ん？」

なのはの言葉に笑みを浮かべたフェイトは同じく典矢へと質問を投げかける。

「クローンだって知っているのに娘だって言えるのは何故？」

それはある意味でプレシアへの言葉でもあったのかもしれない。どちらにせよ、フェイトにとっては己に重くのしかかる事柄である。

しかし、ある意味でこの質問は典矢にとっては意味のないことではある。

「クローンも赤ん坊も等しく人間だからだよ」

その答えにフェイトは満足気に頷いた。

二人が質問したのだから今度は私の番だと言わんばかりにはやては立ち上がる。

「店長さんはヴィヴィオちゃんを守れるんか？ 家族を何があつても？」

「さあ、自分にできる限りでやっているよ。まあ、どちらかと言えばあの子を一人にしない方が大切そうだけど」

かつて両親を失い、新たに得た家族ですらも失った彼女だからこそ、その言葉を聞き絶句した。

典矢の力を持つてすればヴィヴィオの身を守るのは可能だとはやても気付いている。だが、それだけではいけないのだ。ヴィヴィオを守る結果、彼女を孤独にすれば守れたとはいえない。

だが、彼の答えは違った。典矢本人は求められたことをしているだ

けである。ヴィヴィオの身を守るのはスカリエツィの望み、孤独にさせないのはヴィヴィオの望み。

それでもはやてにとってその答えはヴィヴィオを本当の意味で家族だと思っている事だと判断するのに十分すぎる答えであった。

「きまり、やな」

「うん」

3人は改めてプレシアに向き合った。その瞳に迷いはなく、プレシアも目の前の娘達の覚悟に苦笑を浮かべて告げた。

「大変よ？」

「これでもエースオブエースなんです。大丈夫ですよ」

「母さんにばかり任せられないよ。ここまで来たら最後まで付き合うから」

「それにプレシアさんが言ったんですよ？身内に引き込めば店長に関する事は解決するって」

「皆馬鹿ね」

その夜、プレシア達はお互いの顔を見て笑いあった。

第20話

ヴィヴィオの母親になってから数日が経った。基本的には典矢君に任せているけど、時間があればあの店に行くようになった。最初は店長さんって読んでたけど、ヴィヴィオがママなのにパパを店長って呼ぶのはおかしいと言って恥ずかしながらも名前を呼ぶことになったのは記憶に新しい。

まだ会って間もないし、恋人というわけでもないのに夫婦のような立場にいる男の子にどんな顔をして接すればいいのかイマイチ分かっていないというのに名前前で呼ぶのは思った以上に恥ずかしかったな。フェイトちゃんも私みたいに赤くなってたけどはやてちゃんだけは普通みたいだった。

とまあ、まだまだ接してから短いためあまり典矢君の事をわかってない。それでも彼がどこかズレているということとはよくわかった。なんと言えはいいのか、普通の人が感じて思うような常識を持ち合わせてはいないのに人の事をいつもやってくれるお人好しのような人。そのせいでヴィヴィオが凄く甘やかされているのは問題だ。フェイトちゃんも甘やかしているし、はやてちゃんはまだしもヴィータちゃんがヴィヴィオに甘い気がする。

私とはやてちゃんがその分厳しくとはいかないまでも注意している。そのせいで若干ヴィヴィオの懐き具合が低いというか、私達よりも典矢君やフェイトちゃんの方に行っている気がする。

「はあ……」

思わずため息も出てしまうほどだ。必要な事と分かっているけど娘が懐いてくれないのはちよつとくるものが有る……

まあ、何故かハコちゃんがフォロー入れてくれたりもするんだけど……

「どうしたんですか？なのはさん」

「ん……スバル？」

つと、またため息が出ちゃったか。教導の休憩時間とはいえ部下の前ですることではないだろう。いらない心配をかけるのはよくない。

「何だかなのはさん、動きの調子はいいのに心ここに非ずって感じで……」

「……まあ、ちよつとね」

あちゃあ、教導でも影響出ちゃってたか……失敗失敗。まあ、動きの調子がいいのは良い事だから問題ないとして流石に注意散漫での訓練は危険だから気をつけないと……

それにしても典矢君も典矢君だ。ヴィヴィオの母親になるってなつてからお礼としてなんと私の身体を治してくれた。

無茶な戦い方をしていたため大分負荷が溜まっていた身体の歪み？を治してくれただけでなく、ある程度の無茶が出来るようにしてくれたらしい。

確かにそう言われた瞬間いきなり体の調子が良くなって驚いたけど。本当に何者なのかが悩まされる。シャマルさんも私の身体が治っていた事に驚いてたし、今のミッドチルダでは考えられない治療というか治癒速度のようだ。

本人は時間を止めてその間にちよちよいとやったと言っていたが、規格外過ぎると思うんだ。

因みにプレシアさんは高級そうなワインを貰っていて、フェイトちゃんはバルディッシュを調整してもらっていた。ヴィータちゃんとはやてちゃんはお礼を保留にしていたけど……

それにしてもデバイスまで弄れるのは凄いと思う。しかもフェイトちゃんの話では流した魔力よりも魔法になる規模が大きくなっていたり、処理速度が上がっていたりしているらしい。リミッターがかかっているけど今では魔力消費の激しい筈の魔法も使えるそう。正直あり得ないよ。

「悩みでも有るんですか？」

「うーん……まあ、そうかもね。ごめんね、教導の時にボーっとしないように気をつけるから」

でも、やっぱり悩みは尽きないなあ。ヴィヴィオが聖王教会に狙われているのは正直疑っていたのだけど、はやてちゃんが調べてくれた限り、確かにそう言った動きも見られるとのこと。カリムさん達は特にそうでもないのだけど、一部の人が何かを探しているらしい。

このままあの店にいれば安全なのかな。いつかはバレちやいそうだけど、典矢君がいてヴィヴィオを連れて行かれる光景を思い浮かべることが出来ないや。

何と言ってもプレシアさんのお墨付きなのだ。話しによれば単騎で闇の書の闇に普通に対抗できるらしい……

「大丈夫ですよ！それよりも、良ければ聞きますよ！」

「あはは、ありがとうね」

聞くといつても流石に言えないことが多いんだよね。スバルはい子だし真摯に聞いてくれるだろうけど、流石になあ……

「なんだなのは。まだ悩んでんのか」

「ヴィータちゃん」

ヴィータちゃんも少しは悩んでいることの原因なんだよ？私よりもヴィヴィオに懐かれちゃって……母親として寂しいんだからね。

それに元はいえばヴィヴィオの母親になったのもヴィータちゃんとプレシアさんのせいだし……まあ、今となっては私の意思でやっているんだけどさ。

「ヴィータさん、なのはさんの悩みを知っているんですか？」

「ああ、こいつ子育てに悩んでんだよ」

「へー……え!？」

「ヴィータちゃん!？」

いきなり何バラしちやつてるの!?!馬鹿なの!?!どこかに頭でもぶつけちゃったの!?!

「何だよなのは。失礼なこと考えてねえか？」

「当たり前だよ!なんで言っちゃうの!?!」

「いやあ、だってな」

最近のヴィータちゃん頭おかしいんじゃないかな!?!たまにヴィ
ヴィオの写真見てほっこりした笑顔でいるし!気持ちわかるけど
!

「はわわ、なのはさんって子供がいたんだ。あれ?でもフェイトさん
と結婚してるはずなのに、子供……キャロとエリオ?」

「ほら!スバルだって混乱しちやつてるじゃん!」

「いいんだろ。それに遅かれ早かれバレるぞ」

「へ?」

「だって、はやてが色んな奴に言ってるし」

「はやてちゃん!？」

何でそんな事してるの!?!はやてちゃんは常識的にヴィヴィオの教
育をしつかりしてると思って油断していたんだけど!

いや、落ち着くのかなのは。多分はやてちゃんにも深い考えが有る
筈……

「一昨日にヴァイスのやつとの賭けに負けた罰ゲームで話してたな」

「それって限定的な事じゃない?」

「いや、そっから吹っ切れたみたいでなのはがため息を吐いてるのを

聞かれるたびに言ってるぞ」

「私のせいだった!!」

いや、それでも正直に言うのは問題だと思う。仮にもヴィヴィオは狙われてるかもしれないんだよ？

「今なのはが懸念していることはあんま心配しなくていいぞ」

「へ？」

「お前の娘に関する詳細はお前達が話さない限り広まらないさ」

「はやてちゃんは言ってるんじや」

「はやてとお前が子育てが大変だっくらいいしか言ってねえよ」

ちよつと安心したかも。でも、あまりそんな風に目立つちゃったらヴィヴィオのこと嗅ぎつけられてもおかしくないんじや……

「んー、論より証拠の方がわかりやすいか。スバル、コレ見てみる」

「うえ!!えつと、何ですか？」

「ほれ、この端末には何が写ってる？」

「んー……何も写ってないですけど……」

「んじやあなのはも一緒に見てみてくれ」

……一体どういうつもりなのだろうか。確かにヴィーたちちゃんの持つてる端末には何も写っていないけど……

「それじゃあ一回スバル目を閉じてみる」

「はあ……わかりました」

え？ヴィヴィオの顔になった……と思ったらまた何も無い画面に……

「スバル、お前目を薄く開けてるだろ」

「あはは、ごめんなさい」

「まあいい。もう少しで教導も再開するし、ティアナと打ち合わせでもしとけ」

「はい！」

あ、また写った。

「これでわかったら？」

「もしかして、私達以外の誰かが見ていたら見えなくなってる？」

「ああ。はやてもヴァイスに見せようとして見せてなかったぞ」

「一体、どういう……」

普通じゃそんな事は考えられないよ。本人以外が見るときに見えないというのならまだしも何も操作していないのに私達を認識して見せてないなんて……

こんなことが出来るのは、典矢君かな。

「今、なのはは典矢のやつがコレやったって思ってるだろ？」

「違うの？」

「まあ……これはあの店が流行ってない理由でも有るんだけどよ」

え？何でいきなりそんな話になっているの？ヴィヴィオの顔が端末で見えないのとあの店のお客さんの数に関係なんてあるとは思えないのだけど……

「これはハコの仕業だ」

「へ？箱って、あの四角くて物を運ぶときに便利なあの……」

「ちげえよ。矢澤ハコの方だ」

「ハコちゃん？」

確かにあの子は私のフォローしてくれたりもするし、出前にバイクで行ったり、レジとかも打てるけど、端末に何をしているっていの？

「コレ見てみるよ」

「えっと、飲食店の口コミ？」

「ネットがあるミッドだ。美味かったり安かったり特徴のある店ならこんな口コミが少なくとも一つくらい出来る、なのにあの店のは一つも見つからない。どういうことかわかるか？」

「うーん……皆人に教えたくないとか？」

「違うぞ。そうだな、例えばこう書くとするだろ？」

ヴィータちゃんが端末で天使始めましたという店が驚きの安さで物凄く美味いと書いた文章を見せてくる。

「これを投稿してみてもな、投稿されねえんだよ」

「えっと……」

「典矢に聞いてみたら、ハコがいつでもネットとかを監視して情報を規制してるって話だ。あたし達の端末もヴィーヴィオに繋がる情報は他のやつには完全にシャットアウトしてるぞ」

「ハコちゃんが？」

「ああ」

「あの丸くてテカテカしてていつも笑ってるハコちゃんが？」

「そうだ」

あり得ないの。

規格外なのは典矢君だけじゃなくてハコちゃんもだったとは思わなかった。

確かに、ヴィーヴィオを乗せて浮き上がったり、ロボットのはずな

のに寝てたりご飯食べてたりしてて、少しだけ変な所はあるけど……
それでもまだまともだと思ってたのに……

「因みに、ハコは瞬間移動とかもできるそうだ」

……頭が痛くなってきた。私の悩みを増やして何がしたいの。
ヴィーちゃん……

第21話

「おいしい!!」

そう述べたのはケーキを頬張るヴィヴィオだった。

場所は今日も今日とて常連客以外の客が少ないというかない喫茶店【天使始めました】

店長が焼いた巨大な……具体的には4m程の高さをしたケーキを喜々として食べ続けるヴィヴィオに呆れた目つきをしながら見ているのは高町なのはと八神はやての二人。

一応は食べ過ぎはよくないと注意したのだが、ヴィヴィオには店長の過保護が発動しており、虫歯や肥満、健康障害などは起こりえない事をハコから説明され、更にはケーキを巡っての賭け勝負をヴィヴィオは行い、見事に勝利していた。

「あんまり食べ過ぎるのはよくないと思うんだけど」

「だって美味しいんだよ?」

「正直太らないうつていうのは羨ましいけどなあ」

「えへへ、ヴィヴィオは最強だもん!」

えっへんと胸を張りながら話すヴィヴィオはケーキを挟んで反対側にいるハコがケーキを貪り食べているのに気付き、直ぐ様ケーキを食べるのを再開する。

「にしてもあれには驚いたなあ」

「まさか遊○王をアニメみたいに出来るなんて思っても見なかったよ」

「私はなのはちゃんの禁止カードのオンパレードにも驚いたで?」

「私がやってた時は禁止じゃなかったもん」

高町なのはと八神はやてはヴィヴィオの教育にあたっての我儘と

「うか、他の親の甘やかしを抑制するためにある勝負を挑んだ。その内容がヴィヴィオの掲示した○戯王というカードゲームなのだが、店長である上月典矢は何を思ったのかカードのモンスターや魔法を具現化する機械システムとフィールドを作り上げてしまった。」

「そしてなのはとはやて、ヴィヴィオとハコの2人がチームを組んで戦った。」

「小学生の頃に遊戯○をやっていた二人は昔の己のカードを使い戦ったのだが、惜しくもヴィヴィオ達に敗れてしまった。」

「にしてもカオスエンペラーやサンダーボルトは無いと思うぞ?」

「禁止じゃなかったもん。それにヴィヴィオのシューティング・クエーサー・ドラゴンも反則的だったと思うよ」

「あれは召喚が大変そうやったやん。まあ、でもまさかああ来るとは思わなかったなあ」

「うん、まあそうだよ。はやてちゃんもブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン出してたけどまさかね」

「ニディアン・ケトでぶん殴られるとは思わなかった」

「攻撃力5000とかあり得へんよ」

「遊戯○も進化してるんだなあって思ったね」

「いや、ハコちゃんがおかしいだけやと思うぞ」

「二人が話し込んでいる間もヴィヴィオはハコに負けじとケーキを消費していく。」

「その様子は既に意地の張り合いのようになっており、傍から見てもあまりよろしくないような光景になっていた。」

「しかし、既に注意をする事はできない二人はため息を吐きつつ紅茶を飲む。」

「ん、ケーキ?」

「これって典矢君がくれたの?」

目の前に現れたケーキを見た後典矢の方へと視線を向ければ、ニコリと笑い、一度だけ頷いたのが二人にはわかった。

「そーいやあ典矢、気になるんやけどええかな？」
「はい？」

はやてが呼びかければきちんと声を返す。
だが、はやてにはそれが気にかかっていた。

「なんで典矢はあんまし私らと話さへんの？」
「お客さんの会話に店の者が入り込むのは良くないからね」
「……」

そう、この姿勢がはやては気に食わなかった。仮にも夫婦……いや、ヴィヴィオの育て仲間というかよくわからない奇妙な関係の自分に対しての発言とは到底思えない言動。

少なくとも一人の客よりも深い関係に有るであろう自分に向ける態度ではないとはやては思うのだが……

「私達は気にしやんからもつと話さへん？」
「まあ、それだったら」

はやては知っている。この店長に悪気が一切ないことを……いや、物事を知っていないことを知っているのだ。

親に育てられておらず、よくわからない身分で、どこから金が湧いてるともわからない生活をしているも目の前の男は只々世間知らずな子供なのだ。

「そーいやあ典矢は地球のどのへん出身なん？」
「えつと、確かロンドンだっけ」
「え!？」

その答えには黙って話を聞いていたのはも驚いた。

名前や見た目から察するに日本人であることは間違いない。だからこそ、はやては日本の何県出身かという軽い気持ちで聞いたのだ。

「雪の降る中、建物と建物の中で目覚めました。名前は知り合いに付けられましたね」

「そ、そうなんや。その知り合いってのはどこにおるん？」

「とつても遠いところだね。少なくともあと数十年は会えない所に」
「……………」

軽い気持ちで聞いてもこの店長に聞けば重い話となってしまう可能性がある。

更に質の悪いのは店長がそれが重い話だと自覚していない所だろう。まだ若いのに人一倍苦勞をしてきた店長に同情はするが、この無知には頭がいたいとばかりにはやてはため息を吐く。

「そ、そう言えばこのケーキ凄い美味しいけどどうやって作ってるの？」

「えっと、フランスのリヨンで食べたケーキを再現しただけだよ」

「そうなんだ。そう言えば話し方がコロコロと変わるのはどうしてなの？」

「基本的にはその店にあった口調なんだけど、常連さんには普通に話しちゃってるかな。まあ、大体お一人様のプレシアさんを相手にしてるだけだよ」

「成る程……………」

なのはは頭の中で更なる質問を模索する。目の前の典矢は恋人ではないにしろヴィヴィオの父親と母親であるという関係なのだ。少なくとも他人でない以上、きちんと付き合ひ、仲良くなりたと思うている。それには相手のことをよく知る必要があるのだけど、なのは

にはあまり有効な会話を思いつくことが出来ない。今日はフェイトが仕事でいない為チャンスとなつているのだが。それでも歩み寄ることは出来ない。フェイトがいる場合では二人の天然具合が加速し、歩み寄るどころで無くなつてしまう為、今日こそはと思つていたので……これが中々に上手くいかない。

彼の中ではなのはよりもプレシアの方が大きい存在であるという事はなのはには分かつていた。それは偏に言えば接していた時間ということで片付けられるが何故か彼女は納得ができない。自惚れではないが彼女は自分が若い女性だということは理解している。典矢の年代の男であれば興味を持たれてるのは自分のはずだと思ふのも仕方ないのかもしれない。

「なのはちゃん、なのはちゃん」

「どうしたの？はやてちゃん」

「なんか変なこと考えてない？なのはちゃんがそんな顔する時はだいたい見当違いな事を考えてるで？」

「……かもしれないね」

今日も飲食店【天使始めました】は平和です。

第22話

「うん、今日も美味しいね」

「ありがとうございます」

もう昼時だというのに客が一人しかいないハンバーガー屋の店主は客であるフェイト・テストロツサの笑みを見て少し照れくさそうに食器を磨いていた。

フェイトは店長の口調に少しだけふくれっ面になり、またハンバーガーを食べ、頬を緩ませる。

「そう言えばヴィヴィオはどうしたの？」

この前はなのはとはやてが二人揃って仕事を休み、ヴィヴィオと一緒に遊んだと聞かされたフェイトは仲間はずれにされたと感じたのか一人だけ休みをとってヴィヴィオに会いに来ていた。

だが、そのヴィヴィオ本人がいない。いつもは店の中でハコと何かをして遊んでいるのだが、今日の店は静寂に包み込まれていた。

「ああ、ヴィヴィオはスカさんの家に行ってますよ」

「そっか。入れ違いになっちゃったんだね」

「まあ、夕方には帰ってくると思いますよ？」

「……典矢、敬語はやめてくれないかな。私としては君と仲良くしたいから」

「わかったよ」

典矢の答えに満足しフェイトは更にハンバーガーを頬張る。ケチャップが口の端につかせながらその顔は満ち溢れていた。

「そう言えばさ、ずっと聞いてなかったことを聞いていい？」

「どうしたの？」

「典矢はさ、良かったの？母さんが勝手に……その……私達の旦那さんにしちやったの……」
「……そうだね」

何気なく聞いた事柄。だけどそれはフェイトにとってはとても重要なこと。異性からの好意を自覚したことなかったフェイトが初めて抱いた感情。プレシア勝手に話を勧めたというか暴走した結果の事ではあるがフェイト自信はヴィヴィオの母親になることを承諾……いや、決意した。

つまり、典矢の伴侶となることを仮とはいえ承諾したのだ。なのはやはやてはその事をあまり深く考えずにヴィヴィオのためになるのならと承諾したのだがフェイトは凄まじく悩まされた。男性経験は無く、学校でもなのはやはやてにへばり付き、あまり男子生徒と話をしなかったフェイトにとって初めて意識した男性が目の前の店長であった。

「あまりわからないかな。君達のこととは愛しているけど、伴侶と言われても持ったことがないからわからないや」
「愛!?!」

なんてこと無く告げられた言葉にフェイトの動悸が激しくなる。普段ならば誰か他ににいるからこそ平常心で典矢と接してこれだが、一対一、二人きりで話すのは初めてなフェイトにとって今の言葉には凄まじく動揺した。

顔が高揚するのを感じ取りながらフェイトはハンバーガーを食べることで頬の赤さを隠す。

「と、兎に角！典矢はヴィヴィオの父親として何を思っているのか教えてー!」

興奮のあまり意味のない質問をしてしまっているフェイトを不思議

議に思いながらも典矢は己の気持ちを正直に伝える。

ヴィヴィオのやりたいことをさせたいと……

それにフェイトは考えこむ。典矢のさせたいというのは文字通りそのままの意味合いを持つている。ヴィヴィオの要求を典矢が叶えていると言う事は仕事で忙しくあまり構えていないフェイトでも理解している。典矢はヴィヴィオの願いを全てに答えることで出来るのも問題なのだが、それ以上にヴィヴィオという一人の少女が望むものを全て手に入れるということは将来的に見ればあまり良くないことだと感じている。だからこそ、その大本でも有る典矢に対して何かアクションをかけなければならぬが……

(うう……何だか恥ずかしいなあ)

会話をするたびに顔を赤くしてしまう。こういった事を聞くのであればはやてが適任ではないのかと感じつつもフェイトは典矢に確認するように質問を繰り返す。

「あの、さつき愛しているって言ったけど、本当に？」

「変なことを聞くね。嘘をつく必要が無いよ」

「うう……」

更に顔が熱くなっていく。もしここにプレシアがいれば思わずガッツポーズとともにフェイトへの追い打ちをかけていたのかもしれない。

だが、実際の所結局プレシアがいれば煽られて顔を赤く染め、典矢と二人きりであれば実際の答えに頬を染める事になり、あまり意味はなかないのだが・

「あ、あのさ。どうして典矢は私達を……あ、あ、愛してるって言うの？」

「なんでって、愛してるからとしか言い様がないんだけど」

「うう……」

質問の答えに毎度頬を赤く染める始末。更にいえばヴィヴィオのことについての質問のほすが、自分のことに関しての質問になっているのかを理解していない。

フェイトは気持ちを落ち着かせるために一度息を吐く。おもいきり空気を吸い。数回に分けて吐くことで更に気持ちを落ち着かせる。

そうだ、目の前の相手は自分よりも年下の男の子なのだ。お姉さんである自分が恥ずかしがっては情けないと言いつつ、フェイトは視線を典矢に向ける。

まっすぐに見つめている瞳にぶつかつた。

黒く、澄んだような疑いを知らない無垢な瞳で見つめてくる。キョロがフェイトを見つめているような目。一人頼れる人もいない状態で生きてきた子供とは思えないほどの綺麗な目にフェイトは見惚れてしまった。

「あの、どうしてそんな事を聞くのかな？」

「え、えつとね」

声に力が入らない。色々と聞きたいことがあつたのにその全てが頭からスッポ抜けてしまった。フェイトは目の前の典矢の目に吸い込まれているように言葉をこぼすことしか出来ない。

「わわわ、いや、き、きき君が父親として自覚しているのかを確認するためだよ！」

「成る程、確かにヴィヴィオの良き父親に慣れているかはわからないね。僕自身誰かを育てたということもないし、誰かに育てられたことも無いし」

「……じゃ、じゃあさ、一つ提案があるんだけどさ」

震える声が出る。別に典矢が怖いというわけではない。寧ろ無害な典矢に恐怖心を抱くことはフェイトにはあり得ない。ただ、初めて男であると考えて接したのだ。クロノやユーノは友人として接してきたからこのような感情を持ち合わせていなかった。中学の時の同級生にも全くと言っていい程思わなかった男という存在。

「わ、私と一緒に、ヴィヴィオをいい子に育てない？」

勇気を振り絞ったその告白とも言えない言葉。思わず口から出ってしまった事に顔の赤みを増すフェイトは恐る恐るといった様子で典矢へと視線を向ける。当の本人は不思議そうな顔をして首を傾げているだけ。

フェイトは少しショックを受けながら、自分ですら分かっていない感情に悩まされる。

何故ショックを受けたのかもわからない。何故今胸が苦しいのかわからない。

でも

「何で今さらそんな事を確認するんだい？君達とならヴィヴィオはいい子に育つことに決まっているんじゃないかな」

たった一つの言葉で不安や悲しみは晴れていく。

当たり前のようにフェイトという存在を認めてくれているのだと、理解できる。

只々、フエイトにとってはそれが嬉しくて……

自分の中に芽生えた物が何なのかを理解できなかった。

第23話

【管理局聖王教会内部】

「そう言えば何か解ったことなどはありますか？」

「あ……」

ある一定の期間に私達はここに集まって予言について話し合う。メンバーは私、カリム、リンデイさん。後は通信でクロノ君。

と言っても、今回は色々と立て込んでいて予言のことはすっぱりと頭から抜けていたんやけど……

「もしかして忘れていたのですか？」

「いやあ、ごめんな。ちよつと忙しかったから」

『機動六課の設立理由を忘れるのはどうかと思うが』

「まあまあ、はやてちゃんも大変だったんだし」

『母さんは最近といえば居酒屋の話しかしてないじゃないか』

「うっ！」

居酒屋かあ、確かリンデイさんも典矢の店に行ってるんやったよな。私らは居酒屋の時は行ってないから会わへんけど……

まあ、それはさておき予言のこと。調べたりはしてないけど今なにか思いつくかも知れやん。

——王の翼、無限の欲望が交わりし地

——大地の法と蒼き機械が対峙する

——法の者は地に伏せ、王の器は新たな翼を手に入れん

——青き機械が墮ちる時、天よりの使者が現れ終止符を打つであらう

以前にカリムが予言した内容。正直何がなんやらさっぱりやった。

今もあんまりわかってないけど、この中では管理局に何かしら大変なことが起きるとカリムは睨んでいる。

大地の方……多分地上部隊の事やと思うんよな。だから私達が何かあった時のために動けるように機動六課を地上部隊に設立して戦力を集めたねんけど……

「私の方では新たな情報は得られませんでした……」

「うーん、私は忘れてて調べてすら無いけど何か引つかかるなあ」

重要な言葉は……王とか蒼き機械？

何か出かかってんのやけどなあ……機械といえばハコちゃん思い出すけどあの子青色違うし……

王って聞くとオリヴィエのクローンであるヴィヴィオを思い出すんよなあ……流星に違うと思うけど……

「なあカリム？ 一個聞いていい？」

「はい、何でしょうか」

「聖王ってさ、何か翼みたいな物持ってなかったん？」

「はあ……どうして聖王様の話が出たのかはわかりかねますが、翼というよりは兵器としてゆりかごと呼ばれる飛行戦艦がロストロギアとしてありますね」

へ？ そんなのあるん？ 解釈としては翼としては言えやんこともない

……

「と言っても聖王様が居ないかぎり機動すら出来ませんよ？ 子孫でしたら可能性もありますが聖王様に子孫などは居ませんし」

「……………」

あかん、もしかしたら予感的中したかもしれやん……よくよく考えてみたらおかしいんや。なんで今さらヴィヴィオが誕生したんや。

一体誰が、何の目的を持って……

予言の中で見れば、無限の欲望か蒼き機械つてところが怪しいかな……どちらも見当がついてないけど……

『どうして聖王の名前が出てきたんだ？はやて』

「うーん……正直話したくないんやけどなあ」

「教えてちょうだい。もしかしたら重要な事かもしれないから」

「じゃあさ、カリムには一っだけお願いすることがあるねん。今から話すことを聞く上で……」

「わかりました。無茶な要求でない限り聞きましよう」

まあ、この3人やったら信頼できるし大丈夫やろ……

「あんな、私聖王のクローンに会ったねん」

「は？」

「へ？」

『なんだと？』

ああ、やつぱり驚いてるかあ。まあしゃあないよね。私もいきなり聞いた時はものすごく驚いたし……

「ちよ、ちよちよちよ待ってください！え？聖王様のクローン？知りませんよ！そんな話！」

「こうなると思ったから言いたくなかったんよ。でもカリム？お願いっていうのはそのクローンを聖王教会で保護するなんてことをしやんといて欲しいってことなんよ」

『どういうことだ？』

「あんな、正直あの子に会ったんは偶然やったんよ。私がよく行く店におるんやけど、その店長が引き取ったらしいねん」

「一体聖王のクローンを引き取るってどういうことよ……」

「さあ？何でも知り合いに頼まれたらしいで。まあ、クローンやって

聞いたのはプレシアさんからなんやけど……」

『その事をその店長は知っているのかい?』

「まあ、知ってるよ」

私の落とした爆弾に3人は深く考えこむ。まあ、こんな予言があつて、死んだはずの王のクローンがおるつて聞いたら、まあ色々と考えこむよね。

でもヴィヴィオが作られた理由かあ……最初は聖王教会の誰かの仕業やと思つたけど、それやったら流石にカリムが何かに勘付くやろ。それがないつてことは全く違う人つてことになるけど……

「……これは問題かもしれませんね」

「まあ、リンデイさんは会ってるはずやけどなあ」

「へ?私か?」

「ほら、ヴィヴィオですよ。あの金髪でオツドアイの」

「え!?本当に!?!」

『母さん……』

ああ、クロノ君が呆れてしまった。まあそうよね、多分私達よりリンデイさんの方が会つたのは早いやろし。それで気付かんのは……仕方ないか。私達もプレシアさんに言われるまで全く知らんかつたんやし。まあ、会つた日に言われたんやけど……

「兎に角!少し整理したほうがいいかもしれませんね」

『確かに、無関係とは思えないな』

「まあ、もしヴィヴィオがそうだと仮定してや……予言の王つて所に当てはまりそうやな」

「いえ、王の器がヴィヴィオちゃんできオリヴィエが王じゃないかしら?」

「似たようなものだと思いますけど……」

テーブルの上の紙に予言の注釈を書いていく。
とすれば王の翼はゆりかごつてことになるかな。

「私も見たいです。写真か何かは無いのですか？」

「ああ、それがなあ。あるにはあるんやけど見ることが出来ないんや」

『一体どういうことだ？』

「ヴィヴィオのボディガード役がおつてな。そいつのせいでの端末を使つてもどの回線を使つてもヴィヴィオの直接の知り合い以外が見てる時はヴィヴィオに関するデータを開示できやんのよ」

『そんな無茶苦茶な……』

正直私もそう思う。接してきて間隔が若干狂つてる気がするけど、今思つたら近くに居ない相手に対して感情を読み取つてメールするとかぶつ飛んでるとしか言いようが無い。

「まあ、ボディガードや店長の写真はあるで」

「見せてください」

取り敢えずハコちゃんと店長、そしてフェイトちゃんが話している写真を見せる。

「……あのはやてちゃん。もしかしてボディガードつてハコちゃんのこと？」

「そうやで、リンディさん」

「……いや、まああの子はおかしいわね。確かに」

「え？一体誰ですか？このカウンターでフェイトさんと話している方のことですか？」

「ちやうちやう。このカウンターの穴に嵌つて寝てる子よ」

緑色の球体の機械を指して言つてあげる。流石にそれには度肝を抜かれたようでカリムは啞然とした顔を、クロノ君は額に手をおいて

いた。

「そ、それにしても店長さんは随分と若く見えますね。あとフェイトさんは楽しそうです」

「まあ、店長は15歳やから実際若いよ。あとフェイトちゃんの場合は一応旦那やからな」

静寂が部屋を包んだ。リンディさんも今の言葉に絶句して此方を見つめてくる。

クロノ君は抑えている手を両手にしていた。

『運営法に違反していないのか……』

「因みに私となのはちゃんも旦那ってことになってるで」

「どういうことですか!？」

「そうよ! 私初耳よ!？」

『……ああ、まあそれは置いておこう』

「置いておけるわけない!!」

うわあ、二人共凄い剣幕やわ。

まあ、衝撃やろからなあ、私も今でもあんま実感ないし……なのはちゃんはヴィヴィオがおるからあんま意識してないけどフェイトちゃんはプレシアさんのせいで物凄く意識してるんよなあ……

見た目はいい。料理はうまい。性格もいい。時々天然入ってるどころも母性本能がくすぐられる。こちらが知らないことも知ってるけどそれをひけらかさない。

考えてみたら優良物件よなあ……金銭感覚おかしいけど、お金は持つてるらしいし……

「く、詳しく聞かせてくれないかしら?」

「そうですよ!是非とも彼との馴れ初めを!」

「まあまあ、それは今度話すから。でもほんまに頼むで?カリム。こ

の店長、正直ぶっ飛んでるからヴィヴィオを保護とかせんといてよ？」

「うう、どうしてもダメでしょうか？」

「もし無理矢理連れてったとしたら店長が大暴れして管理局が滅びるか、それこそんでもない機械を創りだして……………」

いや、まさか……………なんかいやあな事を思いついたというか……………わかったというか……………

『どうしたんだ？はやて』

「あ、あんな。もしヴィヴィオちゃんが王としたら…店長もこの予言に関わってくると思うんよ……………」

『まあ、そうだろうな』

「……………蒼き機械…私この予言の内容がちよつと解ったかも……………」

「本当ですか!？」

「推測も入るんやけど聞く?」

「ええ。正直もう既に一杯一杯だけど聞かせて」

「まず最初に言っとくけど、この店長はミッドチルダでもオーバーテックノロジーって言える位の機械を作れるんよ。やろうと思えば一瞬で」

『……………無茶苦茶な話だ』

「で、それを知った上で聞いてな。もし、地上部隊が何かしらヴィヴィオちゃんに手を出したとするやろ?」

「ええ」

「そしたら店長怒ってとんでもない機械を作るかも知れやんのや」

「……………蒼き機械」

「それで地上部隊と戦うっていう事ちやうかなあって思ったんよ。まあ、勝手な推測やから宛にはならんけどね」

あははと笑いつつ、頭をかく。

冗談っぽく言ってみたけど、3人の顔は険しいままだ。言ってみた

「一体何のようだ？ルーテシアも連れて来いなど…」

「えっと、今から管理局の地上部隊がこの研究所を襲いに来るんだよ」

「……迎撃でもしろというのか？」

「いや、君達には逃げてもらうよ。ここに魔力痕跡を残さない転移装置がある。それで脱出するんだ」

「……どういうつもりだ？」

「なに、君達を抱えきれなくなったから放り出すってことさ」

「……そうか……貴様の娘達はどうするつもりだ？」

「……あの子達は残るらしいよ。本当はその装置も渡したんだけどね……」

「……貴様はいつものように逃げないのか？」

「私にはやることがある。何、頼りになる友人がいるから大丈夫だよ」

「貴様の心配はしていない。だが、この装置、ありがたくもらっ
てい
く」

「じゃあね、もう一人の友人」

「……ふん」

第24話

「じゃあ、作戦を説明するで」

急いで機動六課隊舎に帰還した私はなのはちゃん達を前に送られてきた資料に目を通してながら今回の作戦。ジェイル・スカリエッティの捕縛についての説明をする。

正直おかしい点も多い資料ではあるが、上層部からの命令をそのまま無視することは流石にできない。管轄外だということは簡単だけどその後には色々と言われて解散なんてことになってしまったら目も当てられへん。

まあ、1年で解散は決まっているけど、それでも問題を起こすのはまずい。

「今回はスターズ部隊とライトニング部隊は合同で行ってもらいます。私達ロングアーチはそのサポートって言った感じかな」

「ジェイル・スカリエッティ……戦力を固めないと危険だっていう判断だね」

「まあ、それもあるけど。他の地上部隊も総動員っていう異例の事態やから下手に分けるよりも固めたほうがいいってことや」

でもおかしい話やわ。なんで今さら本拠地を見つけたっていう情報が入るんよ。まあ、ある程度のエリアに絞れたってだけでアジトが判別したわけではない。それなら偵察部隊が探して戦力を固めた部隊で一気に攻め落としたほうがええと思うねんけどなあ……

「まあ、もう他の部隊も向かってるやろしフォワードの皆はヘリで現場に向かって。私達も後から追いかけるから」

「了解!!」

まあ、今回の注意事項は、必要以上に意気込んでいるフェイトちゃ

んの手綱を握ることかな……

フェイトちゃんにとってスカリエツティは因縁の相手と言っても過言ではないやろし……

……でもなあ…正直いやあな予感がするんよなあ。

予言にある地上の法と青い機械が対峙するって……今が丁度いいタイミングなんよな……でも別にあの店にちよつかいを出したわけもないやろし、もしかしたらスカリエツティが青い機械を作り出したのかも知れやんな。それやったら予言に関しても気が楽になるねんけど……

「はやてちゃん、準備ができましたよ」

「ん。わかつたでライン。今回はいつもより気を引き締めといたほうがええかもしれやんからそのつもりでな」

「了解です!!」

さて……どうなることやら……

◇

「こんな所にスカリエツティのアジトがあるのかね」

「私達の担当部分が荒野部スタートってだけで森林部の可能性も高いらしいですよ」

機動六課のフォワード陣を乗せたヘリはミッドチルダの郊外にある荒野を飛行していた。降下ポイントまではもう少しあるが、他にも幾つものヘリが確認できた。

「こんな大規模な作戦は聞いたこともないな。腕がなるぜ」

ヘリの操縦士であるヴァイスも森林部や荒野部で降下を始める他のヘリを見てその気持ちを高ぶらせていた。

相手は次元犯罪者であるスカリエッティ。ヴァイスにとってそれほど思い入れのない相手ではあるが興味が無い相手ではない。上司である八神はやての「違法研究者でなければ間違いなく歴史に残る天才である」という言葉には興味を持ったものだ。

ヘリや車などのメカニックにも興味がある彼だからこそ少しだけ気になったことではあったが……それ以上に今乗せているある女性のことの方が気になっていた。

「あのさ、もう少し落ち着いたほうがいいぜ？分隊長さんよ」

「わ、解ってるよ。でもやっと思つけた手掛かりなんだ。絶対にあつて話をしたいんだ」

未だに落ち着く様子もないフェイト・テスタロッサに苦笑しつつもヘリの速度を上げる。

「ん……なんだ？」

だが、そうもいかなかった。ヘリの高度が何かに引っ張られるように落ちていく。

高度を上げようとしても下がる一方である。エンジントラブルが起こっているわけではない。機動六課のメカニックに不備があつたとしても何かしらの形で解るはずなのに、機体は正常のままである。

「ロングアーチ！こちらフォワード部隊ヘリ！現在原因不明の機体ト

ラブル。いや、何かが起こっている。何かに引っ張られてるみたいだ！」

『なんやって!? どうにもならへん?』

「全開で高度をあげようとしても下がる一方だ！ 取り敢えず不時着できるように制御してみる！」

『任せた！ こっちもすぐに向かう！』

ヴァイスは舌打ちをしながら機体を安定化させ、プロペラで下降に逆らいながら背後のフォワード部隊へと声を上げた。

「トラブルが発生した！ 今から不時着するからしっかりと捕まってる！！」

◇
「くっ、動きそうもねえな」

多少衝撃はあったがヴァイスは見事にヘリを荒野の一角に着陸させることが出来た。何がヘリを引っ張ったのかも検討もついでいない。更にはヘリをもう一度起動しようにも上がる気配はなかった。

「仕方ねえ。悪いがロングアーチが来るまでここで待機を……」

「……いや、私達は降りて向かうよ。幸いにもあと少しで降下ポイント

トにもつくんでしょ？」

「まあ、そうだが……無茶はするなよ？」

「うん。あとロングアーチへの連絡もお願いするね」

その言葉はフェイト・テスタロッサの独断ではなかった。フォワード部隊は既に降りる準備を始めており、その様子にヴァイスはため息を吐きながらハッチを開けた。

「……誰かいる」

そう呟いたのはヘリから降り、バリアジャケットを身に纏った高町なのはだった。荒野の砂が舞う先に何かがある。

焦げ茶色の服にフードを被り、槍を持った人影が一人居た。

「……すまないな。ここから先に進ませる訳にはいかない」

微かだが、そう声が聞こえた。それになのは達はデバイスを構える。

目の前の人間……いや、槍型のデバイスを持った男はフォワード部隊を一瞥した後、槍を持つ手に力を入れその矛先をなのはたちへと向けた。

「貴様達が一番魔力を強く感じたのでな。悪いとは思いますが足止めさせてもらおう」

「貴方はジェイル・スカリエッティの仲間ですか？」

「ふん……違うな。あいつと私はその様な関係ではない」

男から感じる威圧感は一者ではないということ物語っている。その眼光は戦う者の眼をしており、未だに実戦経験の少ないフォワー

ドの新人達はその男の雰囲気にも飲まれ始めていた。

それになのは達は気づきつつも、彼女達に構っている余裕は無かった。油断すれば負けてしまう。それが解っているからこそ、視線を外すことは出来なかった……

「……どうした？来ないのか？私は足止めが最優先事項だからこのままでも構わないが？」

「……私は管理局地上部隊機動六課所属、スターズ部隊分隊長高町なのは。任務の妨害をするのであれば貴方を捕縛します」

「……そうだ。私は君達の敵だ。障害は排除してみせろ」

男は少しだけニヤリと笑うとデバイスを構えた。

ジリジリとその矛先を揺らしながら攻撃のタイミングを見定める。なのは達もまた男の動きを注視し、動き出しのタイミングを図る。

聞こえるのは荒野を吹き荒ぶ風の音だけ……

息すら止め、男は瞬きもせず攻撃の時を待っている……

しかし、男は視線を空へと移した。

それを好機と見たのかフェイトは一足で男に近付きバルディッシュの魔力刃で男を斬りつける。

しかし、障壁に阻まれた。

「クッ!!」

フェイトは直ぐ様なのは達の元へと戻り、再度前方へと視線を戻し、驚愕した。

空から一人の少女が降ってきた……

第25話

空から降りてきた少女はその金色の髪をはためかせ、左右で色の違う大きな目をなのは達へと向けた後、嬉しそうに笑みを浮かべた。

「なのはママ！フェイトママ！」

「ヴィヴィオ！」

何故目の前にヴィヴィオが現れたのかはわからない。いや、寧ろ何故上空から落ちてきたのかさえも……

「え？ママってまさか……」

「あの子が噂の……」

突然現れた少女の言葉に自分達の隊長の言葉に部下たちは驚愕する……

唯一人、荒野に立つ男だけは険しい顔で隣に立った少女へと眼を配ることもなくなのは達へとデバイスを向けていた。

「どうしてここにいるの?!」

「えっとね、ママ達、ごめんなさい!!」

ペコリといった風に腰を曲げヴィヴィオは謝った。その意味が指すことはなのは達に理解できない。

今現在この場において理解できるのはヴィヴィオ本人のみ。彼女が何故この場に現れたのかも全てはある一つの目的に集約される。

「スカさんはヴィヴィオの友達なの！だからヴィヴィオは悩んで悩んで、友達の少ないスカさんを味方することに決めたんだよ!!」

某バイクに乗るヒーローのポーズを取るヴィヴィオはそう告げる

とデバイスを構えた男へと手を向けた。

「はいゼストさん！ハコちゃんからのプレゼント!!」

「……………これは……………アームドデバイスか？」

手渡された小さな金属体。それに触れた男……………ゼスト・グランガイツは槍を右手に持ち、デバイスを起動させる。

ずっしりとした感触。円筒形の遠距離系デバイス。ハコという規格外が設計したそれはゼストの手に驚くほど馴染んだ。

「……………デバイス、バーンバズーカ……………」

その名と使い方は何故かゼストは理解できた。見た目ほどに重くはない。しっかりと照準を合わせるためには肩に乗せなければならぬが、片手でも問題なく扱える。

偶にスカリエツテイの研究所にやってくる球型の機械に感謝しつつゼストはなのは達へと視線を戻す。

何が起こっているのかわからないといった様子。

その原因とも言える子供は嬉しそうに頷いた後、ゼストの周りに貼っていた障壁を解除した。

そう、フェイト・テスタロッサの攻撃を防いだのはヴィヴィオであつたのだ。

「スカさんって……………ジュレミア・スカーレットって人なんじゃ……………」

「ふへ？スカさんはスカさんだよ」

「……………まさか、典矢が騙っていたのか？一体何のために……………」

疑惑の念がヴィータやなのは達へと襲いかかる。だが、ヴィヴィオはそれを待ってくれなかった。

「なのはママ達を少しでも足止めするよ。二人共お願い!!」

ヴィヴィオの言葉と共に、信じられない光景が広がった。

巨大な、結界が出現し、フォワード陣やヴィヴィオ達を閉じ込めた。

「じゃあ、ゼストさん!一緒になのはママ達の足止めをしてくれる?」

「無論……私はそのためにここにいるからな」

初めてゼストが笑った気がした。

彼はここに来るまでにルーテシアという少女を逃がした。場所は解っていない。少なくともここよりはマシな場所。護衛にユニゾンデバイスであるアギトも付いている……

ならば、何故ここに彼が残っているのか。

ジェイル・スカリエッティの娘でも有り部下であるナンバーズに殺され、そのスカリエッティ自ら生き返らされた彼が何故スカリエッティの為に足止めしようとしているのか……

その真意は驚くほど単純なものであった。

只々、無知な友人の為に体を張るまでのこと。哀れな友人が精一杯反抗しているのを助けるため……

最初は意味が解らなかった。スカリエッティは彼を生き返らせた事を最高評議会には告げなかった。ただ、失敗したと報告した。

それによりスカリエッティには一つ無能という烙印が押された。

レリックの情報を最高評議会から聞き、いくつか回収に失敗したと言いながら破壊している。

それによりスカリエッティは失敗作と呼ばれた。

そんな彼を理解できなかった。無能と呼ばれようと失敗作と蔑まれようと彼は笑っていた。

だからこそ、問うた。貴様は何がしたいのかと……

——人間になってみたいのさ。

その言葉は何故出たのかは解らなかった。

だが、それを告げたスカリエツティは只悲しげな眼をしていた……

——いつか、彼女のように娘達へ慈愛を込めた笑みを浮かべることが出来るようになりたいのさ。

勿論ゼストは彼女という人物についても問うた。

スカリエツティと同じような性格をし、同じ犯罪に手を汚しながら、彼女は死の間際に愛情を取り戻し、笑っているのだと……

——その笑顔が、新たな研究成果を得られた時よりも幸せそうに見えるだけなんだよ。

なんてことはない小さな夢。犯罪に手を汚したのは紛れもない事実ではあった。だが、それでも目の前の男を切り捨てるような事はゼストには出来なかった。

友を得て嬉しそうに笑い。美味しいご飯を得て笑顔になる。

無邪気とも言えるような男を最高評議会などという連中の捨て駒にされるのを唯見過ごせなかったただけであった。

「私は、ゼスト。ゼスト・グランガイツ。愚かな男の友人だ」

その言葉の意味をヴィヴィオは理解できない。何度かスカリエツティの研究所内で会った彼女にとって目の前の男はスカリエツティの仲間だということしか解らない。

でも、それでもこれだけは感じた。

「ヴィヴィオはゲームが下手なスカさんの友達だよ!!」

この男もまた、スカリエッツィの事が大好きなのだ。

「二人共！ヴィヴィオにスカさんを守る力を貸して！」

彼女の両手に嵌った腕輪が光を放った……

◇

「一体どうなってるんやシャーリー！ヴァイスとの通信が切れたで！！」

「わかりません！周囲の部隊のサーチャーから情報を得ていますが……なんとも」

「……まさか、なのはちゃん達が隔離された？」

「……管理局でも屈指の実力を誇る機動六課のフォワード部隊をいとも容易く閉じ込めるなど考えられません」

「……兆候はヘリの操縦が効かなくなった事くらいか……一体どうやって……」

「っ!!はやて部隊長！モニター3を見てください！」

「何や？一体……」

「陸士386部隊が交戦中！」

「……あれは……」

「音声拾います!!」

『……やるんなら本気でやろうか！そのほうが楽しいだろ!? ハハハハッ!!』

「青い……機械……」

第26話

『Start up Model:ARX-8 Rebattein/
Artificial Intelligence:AL』
『Start up Model:Chamber/Artifici
al Intelligence:Pilot Support
Enlightenment Interface System』

「変身!!」

ヴィヴィオの声とともに腕輪の光が全身を包む。

まばゆい光。それに目がくらむなのは達はヴィヴィオから視線をそらす。

光はすぐに収まり、ヴィヴィオの姿を表していく。

体長は成人女性には及ばない程度の大きさ。白と黒が目立ち、ゴツゴツとした機械に全身を包んでいる。

「ヴィ、ヴィオ?」

頭部からはポニーテールのような長い髪が生えており、その顔の目に当たる部分は薄く光ったラインが浮かび上がっている。

右手に機関銃のようなもの、左手には短い剣を持っており、その背中には黒いブースターがついていた……

「その姿は?」

「えっへん!ヴィヴィオの最強フォームだよ!」

『ええヴィヴィオ嬢は準最強です』

『我々の性能は高い』

ゼストに向かって胸を張るヴィヴィオに聞き慣れない声が2つ。

発生源はヴィヴィオの両腕にはめられた腕輪から……

「ゼストさん、どうする?」

「ふむ、私はどちらかと言えば近接戦が得意だな。あの金髪と赤髪二人を引き受ける」

「じゃあ、ヴィヴィオは残りだね!」

その言葉とともになのは達は気を引き締める。

ヴィヴィオからはあまり強い敵意は感じない。それでも威圧感は凄まじいものであった。

「チエインバー!」

『了解。重力制御、良好』

「アルちゃん!」

『こちららも戦闘準備完了です』

「じゃあ、行くよ!」

その言葉とともにヴィヴィオの姿がブレる。

「——ッ!!」

反応できたのは一人だけだった。

高町なのはへと突進したヴィヴィオの攻撃を受け止めるフェイト・テスタロッサはその驚くべき早さと攻撃の重さに驚愕する。

「んー!!フェイトママはゼストさんが相手するの!」

「そうも言ってもらえない……よ!!」

フェイトの切り払いを躲し、空中に浮遊する。

ヴィヴィオの顔は見えないが、戸惑うことなく攻撃してきたことになのはは酷いショックを受けた。なのはにとってヴィヴィオは間違いない自分の娘であり、愛情を持って接してきた。だが、それなのに

こんな一切の躊躇もなく攻撃を仕掛けてくるのはあんまりではないのか。と、まるでヴィヴィオに裏切られてしまったかのような錯覚を覚えてしまう。

「なのはさん!!」

「——っ!!」

また攻撃が来た。今度は魔力弾。狙いはなのはだけではない。後ろにいる部下であるティアナやスバルも狙われている。

「防がれるね……じゃあ今度は同時攻撃だよ！チェーンバー!!」

『了解。デフレクター・ビーム、発射!』

腕輪から聞こえる声とともにヴィヴィオの周囲からレーザーが照射される。

それは編曲し、シールドを張っているなのは達の横をすり抜けて迫ってきた。

「クッ!!」

寸でのところで躲すが、その先には機関銃を構えたヴィヴィオがいる。

「なのは!!」

直ぐ様フォローへ入ろうとするフェイトではあるが、近付いてくる影に気付き攻撃を受け止めた、

「貴様の相手は私だ」

槍を打ち付けたゼストは罅迫り合いになりながらもそう呟く。

そして、左手に持ったバーンバズーカをシグナムへと撃ち放ちながら槍を突き上げた。

「がら空きだ!!」

背後からヴィータの縫が迫る。ゼストはそれを一瞥することもなく、バーンバズーカの後ろ部分から魔力弾を発射した。

「な！そんなのありかよ!!」

攻撃を当てることで直撃を防いだヴィータは直ぐ様距離を取る。

たったこれだけの手合で理解できる。目の前の相手はエース級を相手にしても一歩も引かないどころか、1対1ならば勝ってしまうかもしれない。

そして、ヴィヴィオは、あの上月典矢という規格外が作り上げた機械に身を包み、初めての戦闘だということになるのはたちと互角に近い戦いをしている。

いや、なのはが戦いに身を入り込めていない事を考えれば押されているとも言えた。

「余所見する暇はないぞ……」

その言葉とともにゼストは何かを発射する。

鼻につく臭いがする物……ヴィータにはこの匂いは覚えのある匂いであった。

「ガスか!？」

「超可燃性の魔力だ。じっくりと味わえ」

バーンバズーカから魔力弾が発射された。それは直ぐ様空気に触れると爆弾のように膨らみ、巨大な炎を纏って爆発した。

◇
「うわ、すごい爆発だね」

『好機』

『いえ、待ってください。右斜め前から攻撃が来ます。迎撃を』
「わかったよ!!」

アルからの言葉を受け取り、短剣を振るう。
ガギンと言った音と共にそれはエリオに止められていた。

『前方より熱源反応接近』

「はいー!」

機関銃から魔力弾を発射し、ティアナが放った魔力弾を相殺する。

「貫った!! デイバイン、バスター!!!」

『……ラムd』

「大丈夫だよ、アルちゃん」

背後から現れたスバルがその魔力を込めた拳を撃ち放つ。

高町なのはの魔法を初めて見てから憧れたその魔法。無論スバルにとっても思い入れが深く自身を持ったその一撃は……

「ほら、言ったでしょ?」

ヴィヴィオへとダメージを与えることは出来なかった。

「う、そ……」

「今度はこっちのばん！」

エリオのデバイスを掴みクルリと回転したヴィヴィオはそのままスバルへとエリオをぶつける。

「クッ!!」

「ガハッ!!」

反撃することも出来ずにスバルはエリオを受け止め、そのままヴィヴィオにエリオごと吹き飛ばされた。

「フリード!!」

今度はキャロの使役する竜。それに目を輝かせるヴィヴィオを無視し、両腕のAI達は自動武装と呼ばれる、ヴィヴィオの意思とは関係なしに攻撃する物で迎撃する。

近づこうとも近づけない。攻撃しようともその前に潰される。

ヴィヴィオが命令しているわけでもないその弾幕は凄まじく、フリードリヒに対抗する手段は無かった。

「ふへ!?!」

突然、ヴィヴィオの動きが止まる。

両腕、両足、そして腹部にピンク色の輪のような拘束魔法……バインドがかけられたいた。

「あまり、我儘はダメなんだよ？ ヴィヴィオ」

「ひっ！」

「少し、頭冷やそうか」

豹変したかのような顔で、俯くのはに思わず声を上げてしまう。その瞳は濁っており、普段ヴィヴィオへと語りかけていたなのは面影はどこにもない。涙目になるヴィヴィオに顔が隠れているため気付かないのは、己のデバイスのレイジングハートを構えて、小さな声で呟いた。

「デバイスバスター」

第27話

「ヴィヴィオ!!」

桃色の魔力砲撃に飲み込まれたヴィヴィオを見てフェイトは思わず声を上げ駆け寄ろうとする。

だが、それはゼストに止められた。

「そこを、どけえ!!」

「ません。貴様達は私が相手をすると云っただろう?」

何故この男は味方であるヴィヴィオを放っておいてまで自分達を止めるのだろうか。疑惑とともに怒りが沸き起こる。

「それに……」

槍を振り払い。ヴィータの攻撃を除け、シグナムへと魔力弾を放ちながらもゼストは目の前の相手に呟くように告げる。

「貴様達の娘は、強いぞ?」

力があるというわけではない。強力な武器は持っているが、子供であることを考えれば持て余しているといえる。

だが、そうではない。ゼストはあまり接していないながらもヴィヴィオのその本質を見抜き、見定めていた。

近すぎでは見抜けない強さ。日々の生活では見抜けないそれは、間違いないヴィヴィオをこの戦場に駆り立てた物。

心技体。まだまだ未熟なところはある。

だが、その中でも肝心の心という部分にヴィヴィオは達越して完成していた。

『パイロットの外部、内部にダメージはなし』
『しかし、装甲の破損。精神的な疲労、負荷、及び気力の低下が見て取れます』

うん、痛くはないはずなのに物凄く疲れている。すごいしんどくて、今にも寝ちやいそうになっちゃう。

『現状のエネルギー残量から、武装解除をすれば防御システムに重きを置けるため切り抜けられると断定』

『退避にエネルギーを使えば十分逃げられるとも言っておきます。ですが、今の攻撃を3発喰らえばエネルギー残量はほぼ無くなります』

そうなんだ、もうハコちゃんが言っていた5分の時間を稼ぐということはお出来ているから逃げてもいいんだね……

『ここは撤退が望ましい』

『どうしますか?』

……でも、ヴィヴィオが逃げちゃったり倒れたらなのはママは行っちゃうんだよね?'

『肯定』

『ですが、最低限の仕事はしました』

うん、ヴィヴィオは頑張ったよね……………

——それでも

|||||

◇

パラパラと小石や砂が落ちる音が聞こえる。

すさまじい威力が籠ったなのはの一撃は直撃したヴィヴィオの装甲を壊していた。

腹部から頭部にかけて鎧が剥がれたヴィヴィオは、ゆっくりとしたスピードで地面に倒れようとしていた……

「……………」

だが、倒れなかった。あと一步という所で踏みとどまった。

それを沈黙しながらもなのは内心で驚く。今の一撃は正直やり過ぎとも言えるほどの威力を込めたものであった。それほどヴィヴィオの纏っている鎧の強度が凄まじいのかは分かりかねる。

だが、沈んでいないのなら沈めるまで。もう一度砲撃を放つために

なのはは魔力を高める。

「あ、はは」

小さな声が聞こえた。

発信源はヴィヴィオ、何かがおかしいのか、自傷気味に笑うその顔は少しだけ悲壮感が漂っている。

「きつと、なのはママがしようとしていることの方が正しいんだよね……」

誰に告げているのかは解らない。

どういった意味で言っているのかは解らない。

——ねえ、どうしてルルーシユとスザクは喧嘩してるの？友達なんだよね？

——……ウーン、カンタンニハイエナイケド、フタリトモマチガツテイルツテシリナガラモガンバツテルカラダヨ！

——間違ってるの？何で間違ってる事をするの？

——ヴィヴィオ嬢、この世には不条理な事や納得出来ないことが沢山有るんですよ。

——ふじょーり？

——不条理、事柄の筋道が立たない事

——わかんないよお

「それでも」

——じゃあ、ヴィヴィオが納得できなかつたらどうすればいいのか

な

——カンガエレバイイヨ！

——考えるの？

——しかし、それでも納得出来ないものはある。

——そういう時はどうすればいいの？

——そうですね。一度、それでもって言ってみてください。貴方がしたいことを相手にぶつけるんですよ。

——それでも……

——ソレデモトイイツツケロ！バナージ！

——ふふん、私も勉強してるんですよ！

「それでも、ヴィヴィオはスカさんの友達だから」

立ち上がり、強固な意志を持った瞳でなのはを見つめる。

覚悟は出来た。正しいことは解っている。だが、それでも自分は間違った道を歩き続ける。

言葉にするのは簡単だ。格好いい言葉を並べるのは立派に見えるかもしれない。

人から見たらその姿は滑稽に見えるかもしれない。何故そのような事をするのかと非難するかもしれない。

だが、ヴィヴィオの瞳の強い意思に高町なのはは微笑んだ。

「わかったよヴィヴィオ。そこまで言うんだったら、本気で相手をするね」

限定解除。隊長格としてリミッターを設けている魔力を開放する。
レイジングハートの先端にとどめている魔力は凄まじい勢いで増
長する。

「ヴィヴィオの覚悟、見せて貰うよ」

今から行う砲撃は凄まじいものだ。非殺傷設定とはいえ直撃すれ
ばそれこそ意識を失うほどの一撃を秘めている。

それでも躊躇はしない。目の前にいるのは覚悟を決めた人間唯一
人のみ。

「行くよレイジングハート」

『All right』

「来るよ、アルちゃん」

『ええ。大丈夫です』

見るだけで腰の抜けそうな魔力を相手にヴィヴィオは立ち向かう。

「エクセリオンバスター!!!」

先ほどのデイバインバスターよりも巨大で強大な威力を持った砲
撃はヴィヴィオへと突き進む。

飲み込まれれば今度こそ倒れてしまうかもしれない魔砲。だが、そ
れを目の前にしながらもヴィヴィオは不敵に笑った。

『ラムダ・ドライブ起動!!』

凄まじい斥力がヴィヴィオを中心に発生する。

ヴィヴィオの意思によりその斥力は増し……いとも容易く、なのはの砲撃をかき消した。

「……やるね」

「うん。だって、ヴィヴィオは最強だもん!!」

覚悟の証明は終了した。意志の強さは思い知った。
技量は未だ未熟。肉体は未成熟。

『見事でした』

『その意思、驚嘆に値する』

だが、その精神力は目を引く物がある。だからこそ、ヴィヴィオのパートナーである2機は己の主人を誇りに思い。この場において勝てる可能性のある唯一つの道を提示する。

『ヴィヴィオ嬢』

「どうしたの？」

『勝ちたいですか?』

「勿論」

『パイロット』

「ん……」

『今なら退避は可能』

「ヴィヴィオは逃げないよ」

ならば、後は勝つのみ。

『よろしい。Start up Engine: Degenerate furnace』

『Start up Engine: Solar furnace』

2機の動力部分が開放される。

矢澤ハコにより組み込まれたその動力。

『右手を前に』

「こう?」

出現するのは空間にポツカリと開いた黒と紫で彩られる穴。

景色が歪むように見えるそれは言い知れぬ不気味さが漂っている。

『ええ、その穴から取り出してください』

「これは、 剣?」

『ええ、貴方の最強の武装の一つ……グランワームソードです』

まさに大剣とも言えるその武器を構えるヴィヴィオの装甲に変化が生じていく。

白と黒に彩られた鎧は、少しずつその色を変え……

蒼い外装へと変化した。

第28話

その大剣は一目見て危険なものだと感じ取ることが出来た。魔力は感じない。デバイスというわけでもない。だが、その威圧感は凄まじい物を秘めている。

更に、その取り出した場所が問題だ。何もなかった空間に突如と開いた穴。只々ぽっかりと空間に浮かび上がった黒色。

言い知れぬ緊張感を持ちながらもものは達はデバイスを握る手に力を込める。

だが、それは悪手であった。これより始まるのは一方的な戦い。彼女達はヴィヴィオが動き出す前に戦いを決めなければならなかった。

『ワームホール射撃、始動』

気づいた時にはもう遅い。

右手にグランワームソード、左手には機関銃。一刀一銃のヴィヴィオはニイッと笑った後、魔力弾をただ撃ち放つ……

黒い穴に向けて。

「——ッ!!避けて!!」

何かを感じたなのはは直ぐ様スバル達へと指示を飛ばす。

そして、信じられない光景を目の当たりにする……空間に幾つもの黒い穴が浮かび上がっていた。

「うわ!!!」

その穴から出てくるのは先程ヴィヴィオが放った魔力弾。一発一

発の威力は大きくはないものの、直撃すればそれなりのダメージを負うことになる。

先程までは直線的だから容易に避けることは出来た。今も直線的ではあるが、その出処は全く予想の出来ない。

「クツ!!」

「うお!?!」

「……………」

それはヴィータ達の所にも出現する。ゼストと熾烈を極めた戦いを繰り広げていた3人に向かって殺到する魔力弾は、ゼストの懐へと潜る事を困難にしている。

そして、その光景を見定めるゼストは、己の立つ場所には魔力弾が掠りもしていないことにいち早く気づくと、バーンバズーカを構えて砲撃を繰り出し始めた。

「穴から出てくるっていうのなら!!!」

ティアナは魔力弾をかわしつつも、穴に向かってシュートバレットを放つ。穴に吸い込まれるそれに、ヴィヴィオの元にも出現するであろう砲撃を見定めるために視線を動かす……

「うそ!?!」

目の前に己のはなった魔力弾が出現し、間一髪の所で躲す。

いや、そうではない。ティアナから外れた魔力弾は別の穴を通り違う穴から出現する。

よく見れば他の魔力弾もそうだった。

穴を通るたびに威力は減衰するが、それでもヴィヴィオが魔力弾を打ち続けている限り、その弾幕の密度は無制限に増えていく。

躲すたびに少しずつ被弾する。

速度に関して言えばそれほどでもないが、こうまで多く、不規則に四方八方から出現する弾幕はともではないが信じられるものではなかった。

「なら、出どころを止める!!」

スバルは数々の穴から出現する魔力弾を回避することを諦め、ヴィオへと突貫する。

腹部、胸部、脚部、至る所に被弾するが、それを物ともせず突き進み、右拳を握り、振りかぶる。

『ラムダ・ドライバ起動』

だが、ヴィオから凄まじい斥力が発生し、吹き飛ばされてしまう。

これでは近寄れない。地面の砂の動きから見て、後方にも斥力は働いている……いや、近づけないだけではない。ヴィオが放つ魔力弾に対しても斥力は働きその威力を増大させている。

このままではいとも簡単にやられてしまう。だが現状打つ手など存在しない。ヴィオのガス欠を待つという選択肢は思い浮かぶが、いつエネルギー切れになるかは解らない。そんな不確定な事を頼れるはずはない……

「落ち着いて！バリアジャケットに魔力を多く回して被弾した時の防御力をあげつつ回避に専念して！絶対に反撃のチャンスは来るから!!」

空中を飛び回りながら魔力弾を躲し続けるのははティアナやキヤロ達へと指示を飛ばす。

それにコクリと頷き、魔力を集中させてただ、回避と防御に専念す

る。

それも悪手であった。いや、現状それ以外に方法がないといえばそうだったのだが、ヴィヴィオの、いや、ヴィヴィオのパートナーのアルの狙いはそれであった。

ヴィヴィオは突如、機関銃を撃つのを止め、穴に飛び込んだ。弾幕に押されているなのは達はその事に気付かない。

ただ、どこから魔力弾が来るのかを予想して、動いている……

キャロの背後にヴィヴィオが出現した。

気づいたのは近くにいたエリオだけ。ソニックムーブでキャロとヴィヴィオの間に滑り込んだエリオはヴィヴィオが振り下ろしてくるグランワームソードを自身のデバイス、ストラダーの刃で受け止める……

「グッ!!!」

凄まじい衝撃が両腕にかかる。そして、その衝撃は長く続くことなく、ストラダーは接触している部分からヒビが入り、呆気無く壊れてしまった。

「まずは一人目だよ!!」

ヴィヴィオは直ぐ様その姿を消し、今度はスバルの正面に現れる。咄嗟に事に拳を突き出すスバルのリボルバーナックルへとグランワームソードを打ち付け、破壊した。

「もういつかい!!」

デバイスを壊され一瞬茫然となったスバルの腹部を蹴り上げ、ヴィオはスバルの足に装着されているマックスキャリバーすらもグランワームソードで破壊する。

「スバル!!」

ティアナは直ぐ様クロスファイヤーシュートでヴィヴィオへと攻撃するが、目の前に穴が現れ、呆気無く魔法は吸い込まれ……

「キヤア!」

背後に出現した穴から飛び出た自身の魔法に直撃する。

一瞬怯み、ヴィヴィオから視界を外してしまえば、もう遅い。目の前に出現するヴィヴィオの一撃を咄嗟にクロスミラージュで受け止めるも、その衝撃で破壊されてしまった。

◇
「クッ!」

魔力弾を躲しつつゼストの砲撃を交わしている3人は新人達が次々ヴィヴィオに落とされていつているのに焦っていた。

これだけの密度の弾幕の中でフェイトは切り札の一つとも言えるソニックフォームになることも出来ない。スピードと引き換えに防

御を無くしてしまうのは現段階において悪手と言えた。

「……さて、ではやらせてもらうか」

魔力弾の弾幕に苦戦している3人にバーンバズーカを向け、タイミングを図る。

このバーンバズーカが放つことの出来る魔力弾は3種類。一つは通常の魔力に炎をのせた弾。もう一つは可燃性の魔力を辺りにばらまく弾。そして……

「……尾獣玉」

唯一名前を持つその弾は、バーンバズーカ内に蓄積される2種類の魔力を2:8の割合で混ぜた赤黒い弾。矢澤ハコがゼストが持つデバイスだからこそ放てるようにしたそれをゼストは3人が固まる瞬間を見定め、発射した……

「クッ！下がれ！ヴィーター！テスタロッサ!!」

いち早く察知したシグナムは2人の前に飛び出ながらもレヴァンティンのカートリッジをロードし、炎をまとった一撃を発射された尾獣玉に叩き込む。

「な!?!」

しかし、尾獣玉はシグナムの攻撃に触れ、その大きさを爆発的に増し、シグナムを飲み込んだ。

「シグナム!!」

「仕留めきれなかったか……」

熱を放つバーンバズーカを抱えながらゼストは舌打ちする。

凄まじい威力を放つ攻撃ではあるが、どうやら放つには少なからずインターバルが必要となっているようだ。

ヴィヴィオが放っていた弾幕も薄れ始めている中フェイトは墮ちていくシグナムを受け止め、地面へと寝かせた。外傷は見れないがバリアジャケットはぼろぼろになり意識を失っていた。

「……やはり、最後はこれか」

ゼストは己の持つ槍を握りしめ、険しい目で見てくるフェイトと対峙する……

◇

ティアナのデバイスを壊したヴィヴィオは直ぐ様残ったキャロのグローブ型のデバイス、ケリユケイオンを破壊し、なのはと対峙した。

フリードリヒがキャロ達を守るように立ちはだかっているのを横目で確認しつつ、邪魔者は消えたとばかりにヴィヴィオはグランワームソードを構える。

先ほどの無理な戦闘でエネルギーは随分と消費した。それでもなのはを倒すつもりであるヴィヴィオは佇むのはに向かい、加速す

る。

なのはのアクセルシューターがヴィヴィオを襲うが、ワームホールに潜ったヴィヴィオはなのはの背後に回りこみ剣を振り下ろす。

しかし、寸での所で躲かれてしまう。

直ぐ様切り上げようとするも、背後からアクセルシューターが接近している事をチェインバーに告げられ、ワームホールを背後と目の前に出現させ、アクセルシューターをなのはへと誘導する。

「……………」

それでも、なのはは余裕を持って躲す。そこをヴィヴィオは剣を薙いで攻撃をする。

レイジングハートで受け止めようとしているのを視認し、ヴィヴィオはグランワームソードの先端部分だけワームホールに通過させなのはの背後から出現させる。

一瞬遅れた攻撃はなのはの背中に……

「させねえ!!!」

当たらなかつた。

グランワームソードに何かが当たり、その軌道を逸らされた。見れば落ちていく鉄球がある。

それを放った人物、ヴィータはヴィヴィオの背後からグラーフアイゼンを振り下ろす。

しかし、ワームホールに逃げられ、その一撃は空を切った。

「チッ！強すぎるだろー！」

「反則的とも言えるね…………でも…………」

なのははチラリと現れたヴィヴィオに視線を向ける。肩で息をし、グランワームソードを持つ手をだらりと下げているヴィヴィオの姿がある。

ここまで集中して戦うのは子供のヴィヴィオには酷なもので、既に気力がなくなってきた。

それだけではない。少なくなってきたエネルギーはもう警告域にまで入っており、これ以上戦うのは危険だというアラームが鳴っていた……

「もう、限界かな」

「ま、まだ戦えるもん！」

精一杯のつよがり。それは誰の目にも見て明らかだった。

そう、強がりではある……

だが、それは嘘ではない。

『パイロット、最終通告』

「……ヴィヴィオは逃げないよ」

『否定。これより、機体の性能を向上させる』

「……そんなことが出来るの？」

『肯定。制限時間は3分。それ以上は不可能』

「……ありがとう。二人共あと少しだけ付き合って」

『了解』』

エネルギーは既に限界を迎えている。これ以上戦うのは危険……

だが、まだ切り札はある。矢澤ハコが積んだ二つの動力の一つ、太陽炉のブラックボックスをチェインバーは開く。

凄まじい負荷がかかる中、機体の性能の上昇に伴い、再度、ラムダドライバを発動させている。

斥力を放ちながら砲撃をかき分け、ヴィヴィオは進む。

「クツ……!!!」

少しずつ、少しずつその距離を詰めていく。

それに焦り始めるのはは更に魔力を高める。残り5 m程度となれば更にヴィヴィオへとかかる負荷は大きくなっている筈だ……

そして、瞬間的になのはは砲撃の手応えを失った。

同時に真横にワームホールが出現する。

一瞬のタイムラグ。ヴィヴィオがワープするたびにほんの少しだけラグが発生する……だから解る。

またヴィヴィオがワープしてくる……それを感じ取ったヴィータはグラーファイゼンを振りかぶり、現れたヴィヴィオを捉え、振りぬいた。

「な!？」

信じられないことが起こった。ヴィータの一撃はヴィヴィオへと直撃し、地面へと叩き落とす事になるはずだった……

しかし、まるで、空気を切ったかのような手応えのなさ。ヴィヴィオは赤い粒子を残し消えてしまう。

「トランザム、ライザアアア!!!」

逆側から現れたヴィヴィオはその一撃を高町なのはへと振り下ろす。

スターライトブレイカーを放った反動で動けないなのはにそれを避けるすべもなく……

高町なのはへと斬撃は到達した。

「なのは!!」

落ちていくなのはをヴィータは追いかけて、受け止める。

意識はない。だが、血も出ていないことからヴィヴィオの武器も非殺傷のデバイスと同じ原理の物を施されていたことに安堵した。

|||||

「はぁ……はぁ……」

凄いしんどい。もう寝ちゃいたいくらいに……浮いているけど、ただ息をするだけで大変。

でも、まだ止まれない。まだフェイトママもヴィータお姉ちゃんも残ってる。

今ヴィヴィオが気を失っちゃったらスカさんの所に行っちゃう……

止めないと、止めない……と

「もう、十分だ」

|||||

意識を手放し、ヴィヴィオが纏っていた鎧も消え、落ちそうになる所をゼストは抱える。

この幼い少女が管理局でも有数な実力者達を相手取り、よもやエースオブエースとも呼ばれる者を墮としたのはゼストは心底驚いた。

確かにエース級の実力を持った者はまだ2人いるが、それでも4人いたうちの2人を墮とし、それ以外の者を無力化させた。

偏に矢澤ハコや上月典矢が開発した兵器が凄まじいと言えるが、結局ヴィヴィオの覚悟がここまでの戦果を上げたと言っても過言ではない。

「クッ!!」

デバイスを構えこちらを睨むフェイトを一瞥した後、ゼストはポケットからスカリエツテイに渡された転移装置を発動させた。

既に役目は終えた。今は眠るヴィヴィオを安全な場所……否、安心できる場所に連れて行くのみ……

ヴィヴィオが気絶したことによって辺りを覆っていた結界が解除されていることを視認しつつ、ゼストとヴィヴィオは転移した。

第29話

森と荒地が広がる大地。管理局地上部隊の戦闘部隊は戦いが始まってからものの十数分で殆どが壊滅した。

戦場を青く大きな身体をしたロボットが駆ける。両手に持つ銃を乱射しているようで、その全てを命中させ、次々と陸戦魔導師を無力化していく。

何もロボット一体だけが戦っていたわけではない。広範囲にわたったの作戦中であり、その身一つでは逃走する陸戦魔導師を仕留めることは困難だ。しかし、協力者がいるとなると話は変わってくる。

10人の人造魔導師、ナンバーズと呼ばれる彼女達は各々の強みを活かし、陸戦魔導師の足止めや撃破を行い、ロボットが戦う上での援護を行っていた。

奇っ怪な笑い声を上げながら魔導師を無力化させていく姿に敵も味方も些か恐怖を覚えたが、そうも言ってられない。

機動六課の隊長である八神はやては青いロボットをなんとかしよと、自身の部下であり家族である3人の力を借りて戦いを挑んだ。現在は唯一残っている陸士108部隊の数人とともに戦っているが、その数も段々減らしている。

撃破できればいいのだが、最低限足止めができればいい。今も尚通信が途絶えている機動六課のフォワード陣と合流できれば一気に戦況は傾くことになる。

魔法を発動し、ザフィーラと格闘を繰り返しているロボットへと攻撃する。

死角からの攻撃も交えての攻撃なのだが、それは思いの外当たらない。シヤマルがザフィーラに補助魔法をかけているが、この状況がいままで続けることが出来るのかは不安である。

それに、ナンバーズの姿も無いのだ。はやてにとっては数人の協力者がいることは把握しているがそれが何人で今どうしているかなどは把握できていない。

今にも背後から奇襲してくるかもしれないのだ。闘いながらも警戒を解く訳にはいかない。

『アハハハ!!中々いいんじゃない?』

「牙獣走破!!」

「ナツクルバンカー!」

ザファイラの飛び蹴りを青い機械はパンチで迎撃し、ギンガ・ナカジマの魔法をひらりと躲す。

何故左手に持った銃を乱射してこないのかは解らない。たまに撃ってくるが、牽制かそれこそ108部隊の弱った陸戦魔導師へのだめくらいにしか火を吹かない。

「まあ、遠距離攻撃を多用してこんのは都合がいい……後はなのはちゃん達が来てくれたら……」

『八神隊長!ヴァイス陸曹から通信が入りました!!』

「ほんまに!?直ぐ繋いで!!」

待ってましたと言わんばかりに通信回線をシャリオ・フィニーノに繋いでもらったはやては、クラウ・ソラスを撃ちはなった後、興奮気味にヴァイスへと声をかける。

「こちら八神はやて!一体何があつたんよ!」

『説明するのは少し時間が掛かるが……不味いことになった』

「なんやって!?!」

『簡単に報告すると、敵は撤退したもののフォワード部隊、テストロッサ分隊長とヴィータ分隊副隊長を除き、戦闘不能になりました』

「嘘!?なのはちゃんとシグナムは!?!」

『二人は現在意識不明です。幸い非殺傷武器での攻撃でしたので命に別状はありませんが……』

はやてにはその報告が俄に信じ難いものであった。高町なのはは管理局のエースオブエースと呼ばれ、過去に一度墮とされはしたもののその実力からして管理局でも最強の一角である。シグナムも事近接戦においてはフェイトと同等であり、なのはにも負けることはない。そんな2人がやられたとなると、いかに相手の戦力が高かったというのが見て取れる。

「取り敢えずこちらに合流を！なのはちゃん達の治療も早くしたほうがええ！後、他のみんなは大丈夫!？」

『スバル達はデバイスを破壊され無力化された。その点で言えば高町分隊長達はデバイスが壊されてないので回復したら戦線復帰は可能かもしれない』

「了解！できるだけ早く来てな！シャマル！フォワード陣が合流したらなのはちゃんとシグナムの治療を至急行つて！」

「2人がやられたの!？」

誰もが驚愕する事実にはやてはギリツと歯を食いばり、青い機体を見る。

ザフィーラとギンガのコンビネーションを凌ぎながらも他の魔導師達を落としていく姿は見事というしか無い。

「ジェイル・スカリエツティ……とんでもない相手や……」

|||||

「うう、疲れたよお」

「ヴィヴィオ凄いな！あのエースオブエースを倒したんだろ!？」

「えーすおぶえーす?」

「管理局屈指の実力者……高町なのはのことだ」

「おお、なのはママだね!」

「そうだぞ!でもよく倒せたなあ」

「ヴィヴィオは最強だもん!」グウ

「最強でも腹は減るようだな」

「うん。チンクもお腹すくでしょ?」

「ああ。そうだな」

「それにしてもハコちゃん遅いなあ……なにしてるんだろ」

「ハコなら私達をここに転送してからも最後の仕事で戦ってるぞ」

「手伝いたいけど、もうアルちゃんもチェインバーもエネルギー切れ

だよ……」

『面目ない』

『同上』

「まあいいじゃん。ハコなら大丈夫だろうし」

「おーい、ケーキ焼いたけど誰か食べる?」

「二はい!!!」

「……あまり食べ過ぎるなよ、夕飯が入らなくなるぞ」

「はあい、わかってるわよ、デイエチ」

「そう言えばスカさんはあ?」

「ドクターなら今頃ゆりかごのところにいるわね」

「ゆりかご?」

「まあ、気にしなくていいよ」

|||||

◇

フェイトとヴィータはバリアジャケットと騎士甲冑を纏いへりか

ら飛び降りる。

フォワード部隊が壊滅したのも自分達の実力不足が原因なのだ。それによって戦況が著しくないのであれば戦えない他の人達のため自分達が頑張るしか無い……

フェイトは既にソニックフォームとなり、下で戦いを繰り広げている青い機体へと空を駆ける。

巨大な大剣となっているバルディッシュを振り上げ、上空から不意打ちで斬りかかった。

『おっと、危ないねえ』

だが躲される。並の反応速度では視認できても回避は困難である筈だが青い機体には通用しない。

直ぐ様刃を飛ばし、後方へ下がる。

一撃でも喰らえば危険なのだ。速度で翻弄して一気に畳み掛けないとフェイトには勝ち目がない。

「鋼の軛！」

ザフィーラが魔法で動きを止めようとするが躲されてしまう。

しかし、その軛によって出来た死角からギンガが飛び込み、打ち下ろしからの打ち上げによるコンビネーションを叩き込む。

ストームトゥース、防御破壊と直接打撃を組み合わせたコンビネーションのだが、それは青い機械には無意味であった。

『残念だけど、ここでリタイヤだ』

「きやつー！」

ギンガの身体を掴みあげ、至近距離から銃を接射する。

魔力弾による衝撃で気を失ったギンガをザフィーラに向かって投げ捨て、上空から振り下ろしてくるグラーファイゼンを片手で受け止

める。

地面に亀裂が入るが、あまりダメージを与えたようには見えず、ヴィータは舌打ちをした後、跳び下がった。

『さて、役者は揃ったかな?』

対峙するのはザフィーラにフェイトとヴィータ。後方に控えるのははやて。

シヤマルは既にヘリに向かいなのは達の治療を行っている。

そう、それ以外の陸戦魔導師、即ち陸士108部隊も含め、管理局地上部隊は機動六課を残し全滅したのだ。

『安っぽい言い方だけど、ここから先に行かせる訳にはいかないんだ』

「この先にジェイル・スカリエッティがいるんだね」

「何でヴィヴィオを巻き込んだ!」

「何?ヴィヴィオが来ていたのか?」

「ああ、なのははヴィヴィオにやられた」

「信じられんが……」

「ヴィヴィオを戦わせるなんて、許せない……」

敵意を見せ、魔力を高めている3人を前にロボットは銃を持った手で頭部を掻きながら小馬鹿にした口調で言い放つ。

『あ、そうなんだ。で?それが何か問題?』

ピキリという擬音が走り、ヴィータは怒りの表情を隠さずにアイゼンのカートリッジをロードする。

「容赦しねえぞ!!」

「……限定解除」

「二人共、落ち着け!」

ザフィーラが止めようとするも二人共目の前の敵を殲滅しようと突っ込む。

「轟天爆砕!!」

「ジェットザンバー!!」

巨大な刃と巨大な槌が青い機械へと襲いかかる。

その攻撃を見て青い機械は何をするでもなく、その攻撃を食らう

……

「な!?!」

「何で、避けなかったの?」

2人の攻撃に避ける素振りすら見せなかった機械に困惑する。

だが、その疑問を晴らす暇もなく、機械から銃が発射された。

「クッ!」

「フッ!」

フェイトは持ち前の速さで躲すが、ヴィータは躲しきれずに数発被弾してしまう。

ダメージは大したことではないが、それよりも攻撃が全く聞いてい

ない事が問題であった。

「二人共……非殺傷設定を解け。目の前の相手は人間ではない」

「ほんとう？」

「それを早く言え！馬鹿！」

非殺傷設定。基本的に対ガジェット等機械類を相手にする場合それは意味も持たないどころか、威力を激減させてしまう。

ヴィヴィオを見たから仕方のないことではあるが、二人は非殺傷設定で攻撃を繰り返していた。これではダメージがほとんど通らないのも無理は無い。

「今度こそ行くぞ！」

『いいじゃん、盛り上がってきたねえ!!』

第30話

「本当に良かったのかい？」

「いいよ。君には色々と大事な事を教わった恩もあるし、それを差し引けば対価として十分に事足りる」

「大事な事…… ヴィヴィオ君か？」

「さて、ね。それにハコも色々世話になっているよ」

「寧ろこちらの方が彼には色々教わっているさ」

「ん？ああ、そう言えばいい忘れてたね」

「何をだい？」

「ハコは機械だけど性別で区切るとしたら女の子なんだよ？」

「それは本当かね。初めて聞いたよ」

二人は森を進む。遠くから戦いの音が聞こえて来るがそれに気をつける事もなく目的地向かかっていく。

白衣を纏い手につけたデバイスで目の前の草木を刈り取りながら先導するスカリエッティは共に行く者、上月典矢へと語りかけている。

彼を呼んだのは他でもない。スカリエッティがある目的の為に連絡したのだ。

本来であれば…… いや、管理局が攻めてこなければスカリエッティは一人で目的を完遂していただろう。だが、間に合わなかった。後一月あれば事足りただろうが、今となってはもうそれらも意味をなさなかった。

その目的はなんとしても完遂しなければならなかった。だからこそ、苦渋を舐める思いで彼に協力を仰いだ。

彼ならば何も言わずに引き受けてくれることは解っている。だからこそ、本当は巻き込みたくは無かった。彼には気ままにあの店で平穏な暮らしをして欲しかった。

スカリエッティは己の事を人間擬きと評価している。最高評議会

がアルハザードの技術を使って生み出された存在。何のクローンでもない。生命体から生まれたわけでもない彼は永遠と続く欲望の飢えを感じていた。何を達成しようが少し経てば物足りなくなる感情。最高評議会に操られていると理解していた。彼らの命令を忠実に守っていた。

あの日、ある人物に再会するまでは……

プレシア・テストロッサ。娘であるアリシア・テストロッサを実験中の事故により失った彼女はスカリエツティの研究していたクローン体実験に執着とも言えるほどの意思で協力してきた。

実験は見事に成功し、アリシア・テストロッサのクローン、フェイト・テストロッサは誕生した。だがそれは彼女が望んだ結果では無かった。

当時のスカリエツティにとってクローン体もオリジナルも違いがわからなかった。同じ遺伝子情報を持っているのだから同一な存在であると定義した。

だが、プレシアにはフェイトがアリシアとは別人に見えていたようであった。だからこそ、彼女は本当にアリシアを蘇生させようと研究し、スカリエツティと同じ所まで堕ちた。

そんな彼女は変わっていた。アリシアの蘇生は叶わなかったが、フェイトを本物の娘であると自覚し、愛情を向けていた。

それがスカリエツティには不思議であった。研究に没頭していた彼女を知っている。何かの手掛かりを得て喜んでいた彼女を知っている。娘を思う気持ちで自身が壊れていくことも厭わなかった彼女を知っている。

でも、あんな風に笑う彼女を知らなかった。

だから興味が湧いた。人間擬きの自分に近かった彼女が人間らしく見えて……自分も人間になれるのではないのかと感じた。

それからは最高評議会への復讐心も薄れ、他人へ興味を持つようになった。

創作物などを見ては自分の感じた事と他人が感じた事を見比べたりもした。ネット上で顔も見えない相手と喧嘩もしたりした。よくわからない大会に挑んだりもした。

他人に触れる事が多くなってからだろうか……人道的に、倫理的に悪と言われる行為に嫌気がさしたのは。

最高評議会の指示にはしたがっている風に見せかけ抗った。

ヴィヴィオを作ったのも独断の事だ。管理局に潜入してくれている娘、ドゥーエから報告された。聖王のクローンを作り、ゆりかごを動かすという作戦があると。

そんなものは溜まったものではない。自分がクローンを作るのを拒否しようと、既に基盤は出来ており、成功させた研究者プレシアもいるのだ。いつかは作られゆりかごが復活してしまうだろう。

だからこそ、スカリエツティはゆりかごを破壊する為、秘密裏にヴィヴィオを作りあげた。ゆりかごはヴィヴィオがいなければ干渉すら出来ないものだ。仕方ない事であったがスカリエツティはまた自分は罪を重ねたと感じた。

でも、せめてもの罪滅ぼしとして、ヴィヴィオには幸せになって欲しかった。

そんな時だ、上月典矢と出会ったのは。

自分が犯罪者であると知っていても変わらず接し、本質を見極めていく。人の感情を読み取り精一杯のもてなしを行う。あれだけの知識を持ち合わせているのに、自分達のような欲望に飢えた存在ではない。誰をも寄せ付けない絶対的な力を持っている。

スカリエツティは上月典矢という存在を見てある事を感じた。完璧なように見える彼が酷く歪で自分と同じような人間擬きに……チグハグな彼は他人には思えなかった。孤高に生きる彼だからこそ、

スカリエツティはヴィヴィオを託した。

彼らが幸せになるというのであれば惜しめない助力はする。だが、あまり自分が関わりると迷惑をかけてしまう。

ヴィヴィオの幸せを、上月典矢の平穏を。そして、娘達に立派な生活を送って欲しいと願う。彼は最後の仕事に取り掛かる。

「ついたよ、ここがゆりかごだ」

「これを壊せばいいんだね？」

「ああ。ある程度防御機能は低下させているけど、それでも十分に硬い。でも、君ならば関係ないだろう？」

「さあ。わからないね。ああ、後さ。どれくらい壊せばいい？」

「ふっ……やるならば粉碎くらいいしようか」

「じゃあ、やりますか」

典矢はゆりかごを見上げ、一度息を吐くと小さな声でバイキルトと唱えた。

それから少しずつ深呼吸をして息を整えていく。

風が彼を纏い紫色のオーラが漏れ出して来る。段々とそれは濃くなり、典矢の身体自身が光を放ち始める。

「スカさんは離れててね」

「あ、ああ。頼んだよ」

典矢はゆりかごへ近付くとおもむろに腕を振りかぶった。

「マ　ジ　殴　り」

周囲から音が消えた。

第31話

凄まじい光が彼方から発生する。それは交戦中のフェイト達にも見えた。

太陽よりも眩しいと錯覚してしまうほどの閃光。それに意識が一瞬奪われた後、爆音と共に膨大な衝撃が襲いかかってくる。

周囲の木々をなぎ倒し、雲もポツカリと穴が空くほどの爆風に気付くまでもなく、フェイト達の元へ到達する。

『ギャハハハ!!やばいやばい!』

奇つ怪な笑い声を上げながら青い機械は風に向かって巨大な障壁を発生させる。

自分を守るには大きすぎる盾。見上げるほどに高く、横方向にも伸びているその障壁へと衝撃が到達すると、重い何かを壁にぶつけた音を響かせる。

しかし、それだけで済んだ。障壁はその場にいた者達全てを凄まじい爆風から守りぬいた。一瞬だったから防げたのかもしれない。今のが断続的に続けば障壁は持たなかったのかもしれない。だが、そんなことよりもフェイト達には青い機械の行動が解せなかった。

「何故、私達を守ったの?」

青い機械にとってフェイト達は倒すべき敵であり、守る必要のないもの。先ほどの爆風からは自分だけ守っていれば少なからずフェイト達はダメージを受けていただろう。それも軽傷ですまない程度には……

『さて、何でだろうねえ。ま、いいじゃんどうでも!』

腕をふるい障壁を解除した青い機械はその眼を怪しく光らせなが

らフェイト達を見ながら笑う。

小馬鹿にしたような態度。相手の真意を掴むことが出来ない。それは段々とフェイト達の苛立ちを募らせ、とうとう耐え切れなくなった八神はやてが叫んだ。

「なんであんたは戦ってるんや!」

後方から魔法による援護を行っていたはやてには青い機械の存在を理解することは出来なかった。管理局地上部隊を壊滅させてもなお、笑いながら戦うその機械に……

『ギャハハ……笑えないな』

初めて、青い機械の声から楽という感情が消えた。

その途端に感じる威圧感にはやて達は一步下がってしまった。しかし、青い機械は見逃してくれない。誰の眼にも止まらない速度ではやての目の前に出現して、表情の読めない顔ではやてを見下ろす。

「な、なんや」

『……』

ただ、無言で見下ろしてくる青い機械はこれまでとは違った不気味さを感じる。先程までは理解不能な不気味さではあったが、今の不気味さは理解できる。

目の前の機械にただ恐怖しているのだ。

怒気を含んでいることは理解できる。何が事線に触れたのかには理解できていない。

「何がしたいんやー！」

『黙れよ……』

低く響く言葉は先程までの青い機械では考えられない声色で、はやてにはそれに畏怖を抱く。

銃を構えているわけではない。ただそこに立っているだけ……

『茶番はもう終わりだ』

青い機械の背後からフェイトが斬りかかる。

それを一瞥することなく躲し、振り切ったフェイトの腕を掴んだ青い機械はヴィータに無かつて投げた。

背中を見せた青い機械にはやては魔法を叩きこむも障壁に阻まれてしまう。

『……』

青い機械は目にも留まらぬ速さでフェイト達から距離を取る。

一瞬も眼を離したわけでもないのにあそこまでの距離を移動するのはとてもではないが信じられないことだ。言ってみればあの機械にとつていつでもはやて達を制圧することは出来るが、ただ気まぐれで泳がされていたことになる。

『……お前達を褒めてやるよ。何も疑問に思わずにただ言われるがままに戦うその姿。オレ達機械の領分まで己の力で手にしている』

距離にして500m。探知魔法によって場所も確認できる。目で見ても遠くにいるが把握はできる。

だが、青い機械の目の前に現れる黒い穴を目視することは出来ない。

『お前達がそうだというのであれば……人間のために生まれたオレにはもう存在意義なんて無いのかもしれない』

フェイトの速さならば数秒あれば届く位置。だが、投げられたことにより体勢を崩しているフェイトでは更に数秒時間が必要になってしまう。

『だが、お前達が機械のように戦い続けていたとしても』

何をしようとしているのかはわからない。ただ、嫌な予感がしてたまらない。

『オレは見たいんだ。お前達人間の可能性を』

青い機械は穴からあるものを取り出し、その手に持った。

『さてと、じゃあいつちよ行きますか！』

——不明なユニットが接続されました。

——システムに深刻な障害が発生しています。

——直ちに使用を停止してください。

己から発する警告音を無視し、背中にある円筒状のガスタービンが開き、周囲の魔力を収集しながら青い機械は巨大な銃を構える。

ヒュージキヤノン。本来であれば核弾頭を用いて超遠距離かつ一定範囲に壊滅的な被害をもたらす代物。

そこまでの威力は秘めていないものの、その破壊力はとてつもないもので……非殺傷とはいえ、放たればまさしく必殺というもの。

『愛してるんだ、君達を!!ハハハハハ!!』

閃光とともにその砲弾は放たれた。

それは音速を超えた速さで移動しはやて達の近くを通過する。

直撃はしていない。ただ、撃つた瞬間には既に通過した後であったその砲撃は、一瞬の静寂の後、その全てを吹き飛ばすほどの衝撃をはやて達へともたらす。

その砲撃が向かう場所をはるか遠くにある山。

山は直撃し、すさまじい光とともに……爆散した。

青い機械はその光景を見ながら底をついたエネルギーにため息を吐きただ呟く。

『やるもんじゃないね、キャラじゃないことは……』

「ライオットガンバー・カラミティ……」

唯一人砲撃を免れたものがいた。

管理局一の速度を持つフェイト・テスタロッサは巨大な大剣を振りかぶり青い機械の目の前に現れた。免れたと言っても余波を受けたためかボロボロな姿のフェイトは傷に痛む自身の体にムチを打ちその奥の手であるライオットザンバーを開放する。

真ソニックフォームのせいで防御面は無いに等しい身体には余波の影響が大きく出ている。だが、ここで彼女は引く訳にはいかない。

正直はやての言い分には呆れもした。自分達でスカリエツティに攻めながらも戦いの理由を相手に求めるのを。それははやてにとつて戦いの理由が上層部からの命令以外になかったからに他ならない。だが、フェイトにとってこの戦いには理由がある。自分が作られた原因となった人物、スカリエツティにはどうしても聞き出したいことがあるのだ。

更に言えばこの戦いが始まってからも理由は増えた。ヴィヴィオが現れたこと、なのはが落とされた事。

それら全てを考えればフェイトにとって目の前の相手が何者であろうと戦う意志には関係は無かった。唯、フェイト・テスタロッサとして、障害を排除するだけ……

「ジェット、ザンバー!!!」

先程は見向きもしなかった魔法。青い機械はその攻撃に込められた意思を感じ取り、抵抗する素振りも見せずに、ただ小さく呟いた。

『これだから面白いんだ、人間ってヤツは……』

青い機械は胴体から両断された。

イトへと反抗の意思を示している。

何故か少しだけ頭が痛くなってきたフェイトはハコを掴み上げると顔の近くまで持って行き、ニッコリと笑った。

「もし、話さないのなら、ハコの部屋にあるお菓子没収するね」

『オニー・アクマ！ナノハ！』

恐ろしいまでの残酷な発言にハコは思わず叫んでしまう。

しかし、その瞳は機械のはずなのに涙が浮かんでおり、目の前のフェイトに恐怖しているのは誰の眼から見ても明らかであった。

「なんで、なのはの名前が出たのかは解らないけど、話してくれるよね？」

『ウウ……………ワカッタ』

フェイトはハコを開放し、取り敢えず聞き出すことを整理する。

順序立てて聞く必要がある。速くスカリエッツェイの確保にも動きたいためあまり時間をかける訳にはいかない。

「いつもヴィヴィオが言っていたスカさんっていうのはジェイル・スカリエッツェイの事で間違いない？」

『ウン』

「ハコとヴィヴィオはスカリエッツェイの友達だったんだ」

『ウン』

「でもスカリエッツェイは悪い人なんだよ？」

『……………シツテル。デモ、モットワルイヒト、イル』

「……………知ってて助けたんだ。それ程大切なのかな」

『……………スコシチガウ。ボクガキョウリヨクシタノ、ヴィヴィオノタメ』

「ヴィヴィオの為？」

いまいち要領を得ないフェイトだが、管理局がスカリエッツェイを確

保することはヴィヴィオにとって良くないことなのだと言っている事だけは理解した。

だが、それでも具体的にどう良くないのかは理解できない。

『スカリエツテイ、ヴィヴィオツクッタ』

「……………そう」

何故、ヴィヴィオと関わっているのかは理解できた。まさかとは思っていたがヴィヴィオを創りだした張本人がスカリエツテイだとは……………

『スカリエツテイ、ネガツタ。ヴィヴィオノシアワセヲ』

「……………え？」

『スカリエツテイ、カンガエタ。ヴィヴィオノシアワセヲ』

「ちよ、ちよつと待つて！」

『ダカラカクシタ。サイコウヒョウギカイカラ』

「え？え？」

『ダケド、スカリエツテイ、カクシトオセナイコト、シツテタ』

フェイトの抑止の言葉を無視し、次々とんでもないことを言うハコに理解が追いつけなくなる。

フェイトにとってスカリエツテイとは犯罪を繰り返し、自分のことしか考えていないような悪人だと思っていた。

だけど、ハコの話では……………

『ダカラ、ヴィヴィオカラリヨウカチ、ナクシタ』

「……………利用……………価値？」

『セイオウ、オリヴィエノイサン。ユリカゴノハカイ』

「それって……………本当なの？」

『……………スカリエツテイ、マニアワナカッタ』

「……………」

「ダカラ、タヨツタ。ゴシユジンヲ」

ハコの話の頭の中でまとめる。

スカリエツティは自身で作ったヴィヴィオの幸せを願い、最高評議会から隠した。

でも、いつかはバレるから、ヴィヴィオを捕える意味をなくすため、ゆりかごを破壊しようとしたが間に合わなかったと……

『……ユリカゴ、ハカイデキタ』

「さっきの光……」

『ウン』

先ほど戦闘中に突然襲いかかってきた爆風の正体。ハコがその衝撃から守ってくれたのだが、その発生源がゆりかごの破壊からだとかコが言っている。

信じ難い。だけど、何故かハコが嘘をついてるようには見えなかった。

『……ジカンギレ。スカリエツティ、ニゲタ』

「——っ!!!」

時間をかけすぎた。ハコの目的は時間稼ぎ。まんまと引つかかったフェイトは歯切りをして、スカリエツティのいたであろうハコが守っていた方向へと飛翔しようとする。

『ゴシユジン。カンガエタ』

だが、ハコがボソリと呟いた言葉に、身体を止めた。
ご主人……つまり上月典矢の事。そう、最初から典矢はスカリエツ
テイの事を隠していた。スカリエツテイと何かしらの繋がりがあ
ることは解る。

『スカリエツテイガワラエルヨウニ』

「……笑う？」

『スカリエツテイ、リヨウサレナイヨウニ』

「……一体何を……」

『スベテノゲンキョウ、サイコウヒョウギカイ』

「……まさか」

何かがかチリと嵌った。理由がわからないけれど、最高評議会はス
カリエツテイを利用している。それを典矢が止めようとしているの
だと言う考えが頭を駆け巡る。

だが、典矢は先ほどゆりかごを破壊した……普通に考えれば今はま
だ行動していないと思える。

それも典矢に限っては話が変わる。瞬間移動、分身。時間停止。幾
らでも手段は有る……そして……

「地上部隊は……壊滅している」

不思議に思った。スカリエツテイの確保のためだけに地上部隊を
全員動かす必要があるのかと……

上層部からの指令だから従った。逆らう理由も無かったから何も

思わなかったが……

今現在。地上本部にいる陸戦魔導師はどれくらいいるのだ？

周囲を見れば大勢の意識を失っている陸戦魔導師がいる。全員ではないだろうが、主力は皆この場に来ているだろう……

「ハコ、まさか」

目の前にいる存在はとんでもないという事を忘れていた。見た目から騙されてしまうが、このロボットは、遠隔でどんな状況である機械にも介入することが出来るのだ。

上層部からの指令の捏造や変更も不可能ではない。

『……ニッコニッコニー』

フェイトは何故かふんぞり返ってドヤ顔をしているハコへと一発チョップをかました後、ハコを掴んでヘリへと戻る。ヘリならば情報を得ることは可能なのだ。

もし、典矢が地上本部を襲撃でもすれば、それこそ彼は犯罪者になってしまう。それは何としても防ぐ。

フェイトはスカリエツティに辿り着く証拠品等よりも、典矢を止める事を選んだ……



「……………」

『…………そう、だったのか』

『よもや、本当に存在しているとはな…………』

『俄には信じ難いが、信じるしかあるまい』

『…………貴様は…………いや、貴方が神か』

「え?」

『え?』

第33話

『……天使、か』

『どちらにせよ、人智を超えた存在に違いない』

『……我等の人格を生前まで戻すことなど、普通に考えればあり得ぬのだからな』

3つのカプセルに浮かぶ脳は目の前に佇む一人の男に意識を向ける。

幼さを残した顔で無表情を浮かべている男はとさりとその場に座り、3人へと視線を移した。

『それで、天使である貴方は我等に何をするのかね』

『己の肉体まで捨て生きながらえている我等を断罪するか？』

『何もしないさ』

『なに？』

予想外の答えであった。それと同時にある疑問が湧き上がる。目の前の天使は何を考えてここにいるのか。もしや我等の人格を戻すためだけなのかと、3人の頭をよぎるが、正解を知るのは目の前の存在だけしかない。故に彼が口を開くのを待った。

「自分にとって、結局君達も人間にすぎないのさ。寧ろそこまでして生きていることに賞賛を送るくらいだよ」

『……我等は、ただ生きてきたわけではない』

『ああ、多くを犠牲にしてきた。そして、救えなかった者達もいた』

『……損得勘定で生きてきた。理性を持つ人間としてではなく、獣のように』

彼らは自分達が歪んでいることを理解していた。リスクを避け、犠牲を厭わずに、逆らうものは排除し、徹底的に管理という名目で人間

を守ってきた。

それは人から見れば間違っているのかもしれない。だが、彼らは、平和を目指す彼らにはそれ以外の道がなかった。

『今更、理性を取り戻そうとも我等は止まることは出来ぬ』

『犠牲にしていた者達を忘れる事はしないが、我等の道はこれしかないのだ』

『力無き者が淘汰される世界など許してはいけない。ならば誰かが上に立たねばならないのだ』

「……」

天使は、彼らの主張を黙して聞いた。

目の前の男達は自分よりも生きている年数は少ない。そして悩み、考え、後悔をしながら生きていくのだ。

天使にとって示されている道は2つ。

彼らの望みを叶え、後悔をしようとも目的を達成させること。

彼らの役目を終わらせる事……

天使は考えた。己の成すべきことを……目の前の子供の苦悩を

……

だから、天使は決めた。

『……これは……』

『きお……くっ？』

3人の男が見る記憶は過去の記憶。犠牲となった者達が見た自分たちの姿。

理不尽で残酷な法による圧政。侵略。その元凶となる自分達への恨みを感じ取る。

改めて深く根付いていく大きな後悔。忘れてはいけない。犠牲となった者達はもう帰ってこないのだから……

『……ぬ？』

だが、記憶はそれだけではなかった。

新たな記憶。一人の少女が荒れ果てた街で生氣のない目を空へと向けている……

深い森で一人の少年が空腹のあまり倒れ、動けぬ身体でただ空を見つめている……

燃え盛る中、一人の少女が涙を流している……

銃で腹部を撃ちぬかれた男性が家族を守ろうと手を伸ばしている……

『……』

記憶は続いた。

空を見上げる少女に手を差し伸べる男の姿。管理局の制服に身を包んだ名も知らぬ魔導師。

森で倒れ伏す少年に駆け寄る管理局の女性。この女性も名を知らない。

涙を流す少女の目の前に現れる管理局のエース。

銃を持った相手を無力化し、男性を病院へと担いで走るおかしな仮面を着けたスカリエツテイ。

記憶の持ち主全ての共通点。

助かった事への安堵……そして……

——ありがとう

たった一つの感謝の言葉。

3人の男はその記憶に涙を流す。

身体を捨て去った彼らに涙を浮かべる事はできないが、それでもこみ上げるものがあつた。

そして、最後の記憶が再生される。

見覚えのある場所、目の前には見覚えのある顔。

——俺は、誰もが笑える世界を

既に忘却の彼方にあつたその記憶。

——僕は、救いの有る世界を

彼らが平和を目指す事になつた根底の記憶。

——私は、争いのない世界を

歪む前の願望の記憶。 3人の男はかつての己に誓つた言葉を思い出す。

『……そう、であつたな』

『……始まりは唯の夢物語だつた』

『……友との語らいから生まれた理想』

『手段を手に入れ、我等は忘れたのだな』

『純粋な願いだつた。それは多くの犠牲を生んだ』

『多くの人が涙を流した……だが、それでも。救われた者もいた』

『間違っていたのかもしれない。だが、それでも』

『感謝の言葉一つで後悔は消え失せた』

『犠牲となった者達は還らぬのだ、ならば我等の答えは一つ』

『救われぬものに救いを……』

手段を間違えたのかもしれない。多くを犠牲にしてきた彼らはここに改めて決意を語る。

その様子を天使はただ見ていた。己の道を見出した彼らに対して示した道。

「いいかな？」

『なんだ？』

「唯一つ言いたいことが有るんだ」

『……』

「何故君達は僕に頼まなかったんだい？世界の平和を」

『確かに、人智を超えた存在である貴方ならば出来るかもしれない』

『だが、駄目なのだ。神とは象徴、その存在が平和にしようとも、神自身が入入してはそれは神とはいえない』

『それくらいの事は理解している。だからこそ、言おう』

『『人間を舐めるでない』』

言い切った一つの言葉。それに一瞬虚を付かれた様な顔をした天使は、一度顔を伏せると口角を上げ、笑みを浮かべた。

目は爛々と輝き、ただ純粋な感情を浮かべ、笑みを浮かべた。

それは天使にとって初めてのことだろう。生まれてから初めて得た感情……否。初めて気づいた感情。

「やっぱり君達は凄いな。天使として、人間である君達を賞賛するよ」

天使はムクリと立ち上がり、笑みを浮かべたまま男達と対峙する。
天使として示す道は2つあった。

だが、彼はその道を選ばなかった。

彼は人間として示す道を得る。

「天使としてではなく、人間として、君達に協力することにした」



「って感じになった」

「成る程……ってそれは本当かい!？」

ゆりかごのあった場所から上月典矢に連れられゼストや娘達共々
飲食店【天使始めました】に避難したスカリエッティは典矢の告げた
言葉に思わず声を上げてしまう。

「まさか最高評議会に君が協力することになるなんてね」

「と言つても影分身があそこでずっと3人と話し合うだけなんだけどね」

「ふむ……実質的に最高評議会が4人となったわけか」

「まあそうなるね。君の娘のドゥーエちゃんの代わりにメッセンジャーの役目も請け負ったよ」

「成る程……だからドゥーエは帰ってきたのか」

ちらりとヴィヴィオや他の娘達とカードゲーム大会を繰り広げるドゥーエに視線を移しつつ、そうこぼす。

先に逃げていたルーテシアもゼストの希望でこの店に連れてこられていた為、その中に彼女の姿も有る。

余りにも色々と事が起こりすぎている為、一度冷静になるためにスカリエツティは手に持ったグラスに入った茶を飲み干した。

「あと、伝言だよ。自分なりの道を進めだつて」

「……それは……まさか」

「スカさんみたいな問題児は抱えきれないだつてさ。手配も取り消すらしいよ」

「……そうか」

スカリエツティはコトリと音を鳴らしグラスをテーブルに置いた。

自身を産んだ最高評議会を恨んだこともあった。自由を欲したこともあった。新たな目標を持った事で薄れていったとしても消えてはいない。

だからこそ、手に入れた物が理解出来ない。改めて思えば何をすればいいのかがスカリエツティには解らなかつた。

「私は、どうすればいいのかね」

「さあね……ところで話は変わるけど」

「なにかね」

「そろそろこの店も規模を拡大して従業員を雇おうと思うんだ。具体的に15人ほど」

店長の顔をスカリエッティは見つめる。その真意を理解したスカリエッティは少しだけ笑みを浮かべてつぶやく。

「……………君には感謝してもきれいな」

これまで人間味の薄い笑みしか浮かべることが出来なかった典矢は、その言葉を聞き、いたずらが成功した子供のような笑みを浮かべていた。

第34話

ジエイル・スカリエッツィのマジトへの強襲任務からもうすぐで1ヶ月が経ちます。あの時は正直ヴィヴィオに負けるとは思わなかった。それだけ覚悟を持って立っていたのだと思い知らされたな。まあ、目を覚ましてからフェイトちゃんとはやてちゃんの3人で店に行ったらもうヴィヴィオと典矢君は帰って来ていた。

ヴィヴィオは口の横にケーキのクリームのついた顔で私達を見て、フェイトちゃんが驚掴みにしていたハコちゃん存在を確認したと同時に大急ぎで残りのケーキを食べはじめた。そういう所は子供なだけでなあ…

まあ少し拍子抜けしていた私達にヴィヴィオはケーキを食べ終わってから謝った。結果的に私達の仕事を邪魔した事には変わりはないのだ。戦っている最中も気付いていただろうけど、私達に迷惑をかけるよりもスカリエッツィを助けたかったのだと思う。

スカリエッツィの事は店に来る前にフェイトちゃんに軽く聞き、典矢君を問い詰めて詳しく聞かせてもらった。

最高評議会がアルハザードの遺産を利用して作り出された研究者。生み出された当初はフェイトちゃんが生まれるきっかけとなったプロジェクトF等の研究に没頭したり、犯罪行為を繰り返していたらしいけど、ある出来事を境に最高評議会からの命令を無視していたらしい。そのある出来事というのは教えてくれなかったけど。まあそれで、最高評議会がスカリエッツィを不要だとして討伐させようとしたんだって。

正直その話は簡単には信じられなかった。自分達の職場のトップがそんな事をしているなんて…

でも典矢君はこれまで一度も無いような真っ直ぐと視線を向けて言ってくれた。これは本当の話だって。

その時は私達はなんだか恥ずかしくなって目を逸らしちゃったけど、ヴィヴィオが嬉しそうにスカリエッツィの話をしているのを見て本当にスカリエッツィはいい人なのかもしれないと思えた。

まあ、次の日に機動六課に行ったらはやてちゃんからスカリエツ
テイの捜査の禁止命令が上層部から送られてきたと教えられたんだ
けどね。名目は陸戦魔導師総動員で捕まえられなかった相手は危険
すぎるからだとされているけど、多分典矢君が何かしたのだろう。
フェイトちゃんはその報告を聞いて頭を抱えていたし……

なんでも、フェイトちゃんの話では全陸上部隊の出動は典矢君が仕
組んでハコちゃんが指令を弄って起こったことらしく、その間に本部
に乗り込んだと思うって言っていた。流石にその時はやりすぎだと思
ったな。

とまあ、色々タバタしていたんだけど、やっと仕事も落ち着いて
私達はちょうど8月の真ん中から終わりまで夏季休暇をもらう事が
出来た。私の故郷の海鳴に帰る事にしたんだけど、典矢君達にも声を
かけてみたんだ。まあ、来てくれなかったけど……

フェイトちゃんはプレシアさんと一緒に海鳴に休暇で先に向かっ
ていたし、はやてちゃんもヴォルケンの皆と実家に帰った。お父さん
達にヴィヴィオを紹介したくて、ヴィヴィオだけでもと思ったのだけ
ど、ヴィヴィオは私と典矢君、どっちのどこに行くかを聞かれて即答
で典矢君と言った。

涙が出そうになったのは仕方ないと思う。

やっぱり接している時間が短いせいもあるかもしれないけど、ヴィ
ヴィオにもう少し懐かれないと思う。

と言うわけで私は夏季休暇のお土産としてヴィヴィオの好きそう
なおもちやだつたり、翠屋のケーキやシュークリームを持って店に向
かっている。

フェイトちゃん達は荷物を機動六課の寮に置きに行ったから私だ
けなんだけど、少し緊張するな。

あそこに行くのは大抵誰かと一緒にだから一人で行くのは慣れて
いない。私もフェイトちゃんと同じように男の人との交際経験は無
いのもあつてか、仮とはいえ旦那さんである典矢君との距離間がわか
らないままにいる。

恋愛対象でと考えるのは何だか後戻りが出来そうに無いからあまり考えないようにして接しているけど、多分男の人の中では一番そう言った対象に見てしまう場所にいるだろう。

ユーノ君はなんだか違う感じがするし、他の男の人は管理局って場所の人だから男の人っていうよりも職場の人って感じてしまう。

ああ、ダメダメ。深く考えちゃいけない。私はヴィヴィオをいい子に育てる為に母親になったんだ。典矢君に恋しちゃったらヴィヴィオをどう見てしまうかわからないよ。

フェイトちゃんはもう抜け出せそうに無いけどね。たまに寮の部屋で典矢君の写真見てポーツとしてたり、何かを思い出したかのように顔を赤くしてジタバタしたり、色々とおしやれについて調べたりしていた。プレシアさんの思惑通りになっている気がするけど、フェイトちゃんは気付いてないよね？

フェイトちゃんの場合はプレシアさんの血もあつてか凄い親バカだからヴィヴィオもすっかり愛しているのは解る。でも私は自分がどうなるかはわからない。もし恋しちゃったら……ちよつと怖い。

だから私は深く考えない。ヴィヴィオの事だけを考えよう。典矢君はまだ子供だから私がしっかりしないとイケないもん。だって年上だし。

そう息巻いて電車をおりて店に向かう。

少し裏になっっている場所。一本道が違えば人通りが多いのにここはあまり人がいない。

「……………え？」

目の前の光景が信じられなくてとさりと手に持った荷物を落とし
てしまう。

日差しが照りつける中、その暑さがこの光景が現実のものであることを証明づけていることに只々呆然とする。

「……なんで、店が……」

色んな形に変化する店。変な機械に変な店長がいる店。自分の愛娘がいる店。

天使はじめましたというおかしな店の名前は忘れる筈も無い。

だからこそ、この光景には絶句するしか無かった。

「店が、ない!?!」

店があつた筈の場所は空き地となっており、売り地と連絡先だけ書かれた看板が立っている。

まるで最初から何も無かったかのような風貌の場所。

私はただ立ち尽くすしか出来なかった。

第35話

とんでもないことになってしまった。私達が夏季休暇でミッドチルダを離れている間に典矢の店が無くなってしまっていた。狼狽するなのはちゃんから連絡を受けて向かってみたけど、まるで最初から何も無かったかのように空き地になっていた。

フェイトちゃんはその光景に何も言えずに涙を流して座り込んでしまった。あれほど典矢を好いとったんや。仕方ないだろう。私も物凄いショックを受けている。流星に典矢が私たちに何も言わずに消えるとは思わなかった。ヴィヴィオの事で私たちのことは特別な存在になっていると思っていたのに……

プレシアさんにも何も連絡はないらしい。いくら店のことを考えてもハコからのメールもない。音沙汰なく消えたのは一体何故なのだろうか……

それからはなのはちゃん達は暫く仕事に身が入っていなかった。私も仕事なんかしたくなかったけど、流星に3人とも仕事をしないのはまずいからと必死に言い聞かせて頑張った。

まあ、1週間経つたらなのはちゃん達も立ち直ったのだけど……いや、どちらかと言えば典矢君を探すようになった。

教導はしっかりしてるけど、情報収集は怠っていない。ミッドチルダ中の情報をくまなく探して典矢の行方を追っている。でも成果はない。多分なのはちゃん達も気づいているだろう。典矢はもうミッドチルダにおらんって。

私も仕事の合間を見て情報を集めたりクロノ君に頼んだりしてミッドチルダ以外の情報も集めている。

でも、それでも成果は得られなくて……

フェイトちゃんは目に見えて落ち込んでいた。自分に悪いところがあったのかと考えこんだり、ため息の数も多くなった。

本当に典矢とヴィヴィオの事が好きやったのがわかる。

プレシアさんやヴィータ、ヴァイスもお酒を飲む店が無くなって暗

い顔をしているようだ。

そんな理由で暗くなったらフェイトちゃんに怒られそうやけど
……

◇

典矢が失踪してからもう1ヶ月が経った。相変わらず情報は入ってこない。フェイトちゃんは日に日に元気が無くなっているようだった。エリオ達にそんな姿は見せないように空元気ではおるけど、誰が見ても無理してゐることは解った。

本当にかしかないといけないだろう。せめて少しでも情報が得られれば元気になるかも知れやん……

「で、今日はどうしたんですか？」

私はそんな問題を抱えながら過ごしていたけど、突然ミゼットさんに呼び出された。

地上本部にいるミゼットさんは私を見てにこやかな笑みを浮かべている。一体何の用があるのだろうか……

「今日来てもらったのは運営費の増加についてです。今年度は管理局全部隊の予算が増えました。しかし、機動六課は申し訳ないのですが増加量は少ないです」

「そうですか……まあ、増える分には文句は言いません。私達は戦力が偏っているのは十分解ってますし」

「それならいいのです。すみませんね。最高評議会からの指令なので私にはどうしようもありません」

「他の部隊の戦力の底上げってことですかね」

「おそらく。まあ、彼が最高評議会に加わったことで色々指針が変更されたんですね。以前までの指令は研究に関することばかりでしたから」

「はあ……誰か最高評議会に入ったのですか？」

「一体誰やろ……と言っても元々の最高評議会の人の名前すら知らんのよな。」

「あそこは基本的に謎に包まれているし……」

「えっと、恐らくは次世代ということと新たに入ったのでしようね。名前までは教えてもらってませんが、今の時間だと食堂でご飯を食べると思いますよ。あの子は最高評議会に所属しながらメッセンジャーの役割を持っていますから」

「そんな食堂なんて公の場所におつていいんですか？」

「まあ、本人は気にかけていないからいいと思いますよ。一度あつてみてもいいかもしれませんね。独特な感性を持っていますが面白い子ですよ」

「へえ、まあ見てみます。特徴なんかはありますか？」

「黒髪でボーっとしながらご飯を食べている子ですよ」

黒髪でボーツとしてるんか。なんか典矢みたいやけど、まさかこんなところにはいないやろ。なのはちゃんかミッドチルダ中を探しまわってたし、流石に地上本部を探していないとは思えない。

「じゃあ、私は戻ります」

「ええ。また今度一緒にお茶でもしましょうね？」

私は地上本部食堂へ向かった。



「つて、何でおんねん!!」

食堂に入って黒髪の男の子を探した。まあ、ミッドチルダにはあんまり黒い髪はおらんからポツポツと目立ってたんやけど、その中に普通にラーメンを食べている典矢の姿があつた。まさかと思つたけど本当におるなんて思いも知らへんよ!

叩いてしまったのは仕方ないだろう。避けられたから当たつてないけど……

「ん、はやてちゃんか。どうしたの?」

「どうしたつて、こつちのセリフや!何で勝手に居なくなつたんよ!」

「あー……まあ、ちよつとね」

「私達がどれだけ心配したと……!!」

「そこは謝るよ。でもちよつと事情があるんだよ」

事情つてなんや、事情つて。

まあ、取り敢えずフェイトちゃんとなのはちゃんにも連絡しておこう。あの二人に黙つてたら何されるかわからんし、これであの二人が元気になってくれたら問題もないし……

「事情つてのは?」

「それは言えないかな。本当は君達にも色々伝える予定だったけど、ちよつと問題が発生してね」

「……本当に、バカやわ……何で何も教えてくれやんのよ……」

「……悪かったよ。事情に関しては話せないけど、それ以外は言えるよ」

「……店はどうなつたん?」

「移店したよ。場所はまだ教えられないけど、経営は続けてる」

「そうか……ヴィヴィオは元気？」

「うん。元気だよ」

「そうか……」

何故か言葉が浮かばへん。会ったら色々と言句を言ってやろうと思ってたのに思ったように口が動かへん。

そんな事よりも何だか涙が浮かんできた。

居なくなったらどうしようかと思っていた。ヴィヴィオのこともあるけど、典矢の事も心配やった。家族がいなくなったら心配するやろ……

考えないようにしていたもう会えなくなるという事を今更思い出した。フェイトちゃん達が悲しんでるから私がそんな姿を見せられるはずがなかった。精一杯強がっていたのはフェイトちゃんだけやない。

だからこそ、無事に会えて、心の底から安心している。

「典矢!!」

食堂の入り口からフェイトちゃんの声が聞こえた。

振り返り確認すると視界の端に映る黄色い線が見えた。入り口にはフェイトちゃんの姿はない。

ボフンという音が後ろから聞こえ確認すれば啞然としているフェイトちゃんの姿が有る。

「ど、どうしようはやて」

フェイトちゃんは今にも泣きそうな顔をして両手を見つめながら口を開く。

声も震えている。けど、それよりも気になるのは典矢の姿が見えないこと……

「典矢、抱きしめたら消えちゃった……」

「……」

うん、少しだけ冷静になれた。やっぱり誰か混乱しているというからおかしい人がいると人間は冷静に慣れるんやね。

「いきなりどうしたの？フェイトちゃん」

背後から声が聞こえる。振り返るとそこには典矢の姿が。一体いつの間に移動したのだろう。

つと、そんな事よりもフェイトちゃんがまた満面の笑みを浮かべて典矢に抱きつく。今度は消えないようだけど、顔が胸に埋もれて羨ましいことになっている。

あのフェイトちゃんの豊満でけしからんおっぱいに埋もれるなんて、他の管理局員が見たら発狂ものなんじゃ……

「おい、あれテストタロッサ執務官じゃないか？」

「あの抱きしめられている奴はなにもんだ!？」

「オレ知ってるぞ！最近食堂に現れる妖精って噂がある!？」

「妖精か。なら問題ないな」

……勘違いしている間に引き剥がさないといけないということだ
けは解った。

第36話

それから少ししてなのはちゃんとヴィータも食堂にやってきた。急いできたのだろう、少し服が乱れていて息も絶え絶えな状態だ。

まあ、六課におつてこの短時間で来るのは無理しやなあかんからなあ……フェイトちゃんは異常なのは置いておくとしよう。

フェイトちゃんはまだ典矢を抱きしめている。と言つても体勢は変わっており、ラーメンを食べる典矢の背中から抱きついているという感じだが……

それにしても典矢は本当に男なのか？普通今も形が変わるくらい押し付けられている柔らかいものに何かしらの反応を示すはずやけど……興味もなさ気に箸でラーメンを食べている。

取り敢えずなのはちゃん達の息が整うのを待つてから頭の中で整理しておいた事項について問いかける。

典矢が答えてくれない質問もあるだろう。それを追求した所で口を割ることはない。典矢は頑固なところがあるから仕方ないだろう。それなら聞けることはなんでも聞いといたほうがいい。

「ハコは何してる？メールが届かなくなったけど」

典矢は私の質問に視線をこちらへと向けて箸をテーブルに置いた。

そう言えばどうして典矢は箸を使っているのだろうか、ミッドチルダに箸なんて文化はない。あつても地球などの外部世界の出身者がやっている店やろうけど、地上本部の食堂では無かったはずだ。

そう思えばラーメンもそうだ。地球の食べ物がなんであるんやろ。周りを見てみればこちらの様子を伺いながらカレーを頬張る局員の姿もある。美味しそうなのが腹立つ。

「ハコはヴィヴィオについて回ったり店の手伝いをしてくれてるよ。メールは僕が止めておいた」

変わりは無し……ってことか。
にしてもメールは止めたかあ……

「どうしてそんなことを!?!」

「……それは言えない」

なのはちゃんの質問とも言えない叫びに典矢は応えない。以前の典矢では考えられない表情をしている。彼ならば都合の悪いことは軽く流していただろうが、今は正面から受け止め、申し訳無さそうな顔をしていた。

でもなのはちゃんは納得ができないみたいで、今にも掴みかかりそうに息を吐いている。

取り敢えずなのはちゃんを羽交い締めにしておこう。

「どうして何も教えてくれないの!!」

「……実は、なのはちゃん達には言っても大丈夫なんだ」

なのはちゃん達は大丈夫? だけどどうして教えてくれないのか……他の誰かに聞かれるのが駄目ってことか……管理局に知られるのは駄目……とか?

考えられる事はいなくなる前にあったある事件。ジェイル・スカリエツティやけど……

あかん、確証は持てやん。

「じゃあ、どうして!?!」

「……はやてちゃんに知られるのが駄目だからね」

「へ? 私?」

何で私に知られたらあかんの? 意味がわからん。地上本部とか他の管理局員に知られたらあかんってのならわかるのに。

「なのはちゃん達に教えてはやてちゃんに伝わらないわけがないからね」

「いやそれよりも、どうしてもはやてちゃんに知られたらダメなの？」

少しだけ落ち着いたのか、声の勢いを抑えて質問するなのはちゃん。正直助かる。私達が騒いでいるのに周りの局員たちのひそひそ話はどんどんとエスカレートしているからだ……妖精の恋人を取り戻すってなんやねん。

「言えないよ」

「……誰だったら教えてくれる？」

「プレシアさん……はダメか」

プレシアさんの名前を出したけど、ちらりと後ろにいるフェイトちゃんを見て訂正した。そうやね。あの人はフェイトちゃんには激甘やから聞かれたら答えちゃうよね。そう考えたらヴィータ達もダメになる。

でも、どうしても気になる。何で私に知られたらあかんのか、それがどんなことなのか……

「……随分母さんを信頼してるんだね」

黒い！なんか典矢に抱きついてるフェイトちゃんの顔が黒みを帯びてるで！笑みを浮かべてるはずなのに目は笑ってないやん！何？プレシアさんに嫉妬でもしたの？

「そ、それはおいといてや！取り敢えず居なくなっただけでも気になるけどもう一つ大事なことがある！」

うん。大事なこと。ミゼットさんの話に一人の若者が最高評議会に新しく入ったっていうこと。この場に居るってことは典矢がその

若者であることは間違いない。

でも、そんな事は全く知らへんし、そんな様子もなかった。一体いつの間にそんな立場に……

「つい最近だよ。その立場に立った理由としては、彼らに協力したくなつたからかな」

「……相変わらず人の考えを読むんやね」

もう慣れたわ。

にしても協力したくなつたか……私は最高評議会を見たこともないから知らへんけど、そういうんやったらあつてみたいかな。

典矢はよくも悪くも純粹だ。それでいて己をしつかりと持つてる。そんな典矢が協力したいということは芯が通った人物たちに間違いないのだろう。それに彼らには色々と言いたいこともある。

「まあ、流石に会えはしないかな。でも伝言くらいなら大丈夫だよ」

「……そう言えばメッセンジャーやったんやっけ」

「ちよつと待つて！話についていけてない！」

ああ、そう言えばなのはちゃん達は知らんかった。というか教えてなかつたか。

私は簡単に典矢が最高評議会の人間であること。メッセンジャーを務めていること。そしてこの時間にここでご飯を食べていることを伝えた。

「成る程、ここに来れば毎日典矢に会えるつて事だね」

「まあそうやけど、それはそこまで大事なことじゃないで？フェイトちゃん」

「一番大事だよ！」

うん。フェイトちゃんは暫く休んだほうがええかも知れやん。

ちよつと仕事をさせすぎたかな……

「ヴィヴィオはここにこれないの？」

「まあ、ちよつと厳しいかな。ヴィヴィオも色々あるし」

「そつか……何時会えるようになるの？」

「それは本人次第。でもそう遠くないうちに会えるよ」

「……わかった。待ってる」

なんや、なのはちゃんも随分といい顔するようになったんやね。あれこそ母って顔やわ。でも今の会話聞いた局員がなのはちゃんのことを子供連れて逃げられた妻って言ってるで。

「そう言えば典矢はちゃんとご飯は食べてる？毎日3食食べないとダメだよ？ここのご飯は美味しそうだからって好きなモノばかり食べてたらダメだよ？」

フェイトちゃんはダメになってる。典矢は食事に関してはちゃんとしてるんだしそう心配せんでもええのに。

「昨日もラーメンだったし大丈夫だよ」

「全然大丈夫ちゃう!？」

あかん。そう言えば典矢も天然やった。それに食事でもともつていうのは客やヴィヴィオに関してや。自分のことは思ったよりもずぼらやったわ！

「だったらこれからは私が……作っても典矢よりおいしくないよね。ごめん」

フェイトちゃんがしょぼくれてしまう。確かに典矢は料理がとんでもなく上手い。正直女として自信をなくしてしまいうくらいにはう

まく、料理に自信がある私も逆立ちしても勝てやんと思えるほどに……

しかし、それは味の話。フェイトちゃんに作ってもらえるというのであれば世の男の殆どはどんな激まずだろうと喜んで受け取るだろう。まあ、フェイトちゃんは料理できるからそんな心配はないけど……

といっても典矢にそんな常識は通用しない。不思議な顔をするだけだ。

「頼む！妖精さん！テストタロツサ執務官のお弁当を食べてやってくれ！」

「あんたが食堂のメニューを良くしてくれたって噂は知ってるが、彼女の曇った顔を見たくない！」

「彼女を幸せにしてやってくれ!!」

何故か周りで見ていた局員が近づいてきて典矢に頭を下げている。色々と突っ込みたいところがあるよ。怪しいって思ってたこの食堂は典矢が手を加えてたんかい！とか。妖精ってなんやねんとか。それにこういうのって男の人は普通嫉妬するもんとちゃうの？もうわけがわからなくなってきた。

「みんなありがとう。でもいいよ。私のお弁当を典矢にあげれないのなら私が典矢よりも美味しいごはんを作れるようになればいいだけのことだから……」

「くうう!!なんて健気なんだ！」

「悔しいがお似合いのカップルだぜ！」

「ちよつと待て、テストタロツサ執務官は高町一等空尉と恋人だって噂を聞いたことがあるぞー！」

「なに!?まさか三角関係か!?初めて見た」

「なあなあ典矢。アイスねえか?ちよつと暑くなってきた」

「はい、ヴィータちゃん」

「おい、あれ。妖精さんとヴィータ三等空尉いい雰囲気じゃないか？」

「まさかの四角関係か!？」

「なんてこった!我等がロリ教官が見たこともないような笑顔を浮かべてるぞ?!」

「おい、今ロリって言ったやつ表出る」

「「「こいつです!!!」」」

「おいてめえら!」

「ちよつと待って!」

「た、高町一等空尉……」

「私が旦那に逃げられたんだって噂してるのは誰か教えてくれるかな?」

「救いの手だと思ったら魔王の誘いだった!!」

暫くして姿を消していた典矢に皆が気付くまでこの騒ぎは続いていた。

【新たな】食堂に現れた妖精【マスコット】

1：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：05：

22

聞いてくれ、食堂に妖精さんが現れたんだ。

2：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：06：

14

何を言っているんだ。もしかして、機動六課の曹長のことか？

3：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：07：

56

違うんだ。見た目は普通の人間なんだが、管理局内で見たこと無いし、食堂でご飯を食べてるだけなんだ

4：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：09：

05

おいおい、侵入者か？

5：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：11：

23

いや、あの伝説の三提督と話している所も見たし、部外者ではないと思う。

6：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：13：

43

妖精か。機動六課にいい医師がいるから紹介してもらえ。美人だぞ。

7：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：15：

14

正直普通に紹介してもらいたいけどそうじゃないんだ。本当のことだって！

8：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：18：

21

そういえば聞いてくれ。

俺も変な物を見たことがあるぞ。

丸っこい機械なんだけど、何故かデバイスを持って転がっていたぞ。

9：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：20：58

>>>8

何だ、それ。

10：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：2

1：32

>>>8

丸くてどうやってデバイス持って転がるんだよwww

11：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：2

2：26

本当なんだって！ほら、最近新しく導入されたアームドデバイス有るだろ？あれを運んでたんだよ！

12：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：2

4：13

>>>11

そう言えば新型デバイスを俺も貰ったな。随分と高性能だったけど、何でいきなりあんなものを支給されたんだろうな。

13：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：2

5：23

>>>12

あれじゃないか？JS事件。全地上部隊壊滅したから戦力アツプとか。

14：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：2

5：57

>>>13

やめろ！あれは思い出してはいけないことだ！

15：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：2

7：15

ああ、青い機械が……高笑いが……

16 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 2
9 : 45

>>15
しつかりしろ!!

17 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 3
5 : 34

あの青い機械に関しては他スレで議論がしているな。確か60
スレくらいあったっけ?

18 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 3
6 : 23

問題はどの発言も予想なんだってことだよな。ジェル・スカリ
エツテイがとんでもない奴だってことしかわからないし

19 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 3
8 : 01

お前ら、ここは妖精さんの話をするところだぞ。

20 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 4
0 : 22

ああ、すまなかったな。で、いい治療薬の紹介だっけ?

21 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 4
1 : 54

ちげえよ。機動六課の曹長が可愛くて誘拐しようぜって話だ!

22 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 4
2 : 12

局員さん、こちらです。

23 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 4
2 : 14

局員さん、あそこの変態です。

24 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 4
2 : 17

魔王様、あそこのロリコンです。

25 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 09 / 05 17 : 4

- 2 : 4 2
 >> 2 2 | 2 4
 やめろお!!俺はロリコンじゃない。フェミニストだ!
- 2 6 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 7 : 4
 4 : 2 8
 >>> 2 4
 魔王様はえげつないからやめてさしあげろww
- 2 7 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 7 : 4
 5 : 0 0
 で、妖精さんんだけど、食堂のおばちゃんから変なことを聞いたんだよな。
- 2 8 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 7 : 4
 5 : 3 2
 変なこと?
- 2 9 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 7 : 4
 7 : 4 5
 なんでも食堂のメニューのレシピをくれたりとか料理を教えてくださいたりとか。
- 3 0 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 7 : 4
 8 : 1 1
 ああ、そう言えば最近地上本部の食堂変なメニュー増えたよな。
- 3 1 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 7 : 4
 9 : 2 2
 変ってwww確かあのメニューって魔王様達の故郷の料理らしいぞ。
- 3 2 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 7 : 5
 1 : 2 7
 つまり、地上本部の食堂で食事をとっていたら魔王になる可能性があるかと?
- 3 3 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 7 : 5
 3 : 0 4

魔王様になるのは怖いけど、あの管理外世界出身の人って基本的に出世してるし、もしかすれば何かいいことがあるかもな。

34：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：54：59

まじか、明日久しぶりに行ってみるか。誰かおすすめとかあるか？

35：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：56：13

>>34

カレーライスっていうのは美味しかったぞ。見た目は変だけど、スパイシーな風味が最高なんだ。

36：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 17：59：07

あ、俺もそれ食べたこと有るぞ。むちゃくちゃうまかった。

37：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：2：09

なんか腹減ってきたな。

38：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：4：10

いい加減妖精さんの話をしようぜ、お前達！

39：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：5：54

そうだな、本当に食堂のメニューだけを良くしに来たっていうのなら正しく謎の人物だし。

40：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：7：33

ってか、何で1は妖精って呼んだんだ？

41：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：9：47

>>40

あれだろ。羽が生えてたとか。

4 2 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5
1 8 : 1
0 : 0 3

>> 4 0

いや、俺は耳が尖っていたとかだと思う。

4 3 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5
1 8 : 1
0 : 5 2

>> 4 1 | 4 2

なにそれ、見たい。

>> 4 0

いや、なんかそう思ったただけなんだ。自分より年下の男にしか見えないので。

4 4 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5
1 8 : 1
1 : 2 4

>> 4 3

「(「^o^)」 ?

4 5 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5
1 8 : 1
2 : 3 2

>> 4 4

いや、残念だけどそうじゃない。自分の性別は雌だ。

4 6 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5
1 8 : 1
4 : 5 5

>> 4 4

ここに湧くんじやない!!

4 7 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5
1 8 : 1
5 : 0 3

>> 4 5

女だったのか。

4 8 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5
1 8 : 1
6 : 3 9

なんだ、ホモはいなかったのか。

4 9 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5
1 8 : 1

7 : 2 3

いや、ちよつとまで。逆に考えてみるんだ。キマシなのだ

5 0 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 8 : 1

8 : 1 8

>> 4 9

なん : だと?

5 1 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 8 : 1

8 : 5 4

>> 4 9

天才か

5 2 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 8 : 1

9 : 3 6

>> 4 9

ボーイッシュな子にキャリアウーマン。燃えてくるな

5 3 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 8 : 2

0 : 0 4

ここには変態しかいないのか。

5 4 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 8 : 2

7 : 5 1

ああ、その妖精さん。どっちかというとうと幽霊みたいなものだぞ

5 5 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 8 : 3

0 : 2 1

>> 5 4

いい病院を紹介しようか?

5 6 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 0 9 / 0 5 1 8 : 3

2 : 1 6

>> 5 5

結構。俺は頭がおかしくなったわけじゃないぞ。

それに幽霊っていうのはちゃんと理由があるぞ。

俺も不思議な雰囲気を感じて1回端末のカメラで撮ったんだけ

どき、映らなかつたんだよね。

57：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3
3：52

>>56

おい、トイレから出られなくなっちゃったじゃねえか。どうして
くれるんだ

58：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3
4：06

>>56

お、落ち着け。深呼吸しろ？嘘なんだよな？嘘だつて言つてくれ
よ！

59：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3
4：18

>>56

ふっ、1回してしまえば後は同じこと。どんな話でも怖くない。

60：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3
4：43

>>59

お前のズボン濡れてるぞ。

61：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3
6：55

いや、本当なんだよ。何回か撮ったけどそこだけ映ってないんだ
よ。

62：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3

6：32

……本当に幽霊さんなのか。

63：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3
7：05

妖精さん怖くない？食堂よくしてくれた事をお礼したいけど、幽
霊だったら俺ちびちまうよ

64：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3

8：11

ん。写真に写らない。そう言えば前にうちのたぬ……隊長に見せてもらった写真もそうだったな。

65：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3
8：51

>>64

どんな写真だ？

66：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：3
9：30

>>65

魔王様や黒い雷光様、そしてたぬk……機動六課の隊長の娘の写真

67：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：4
0：19

>>66

そういやあ、そんな噂もあつたなあ。あれってガセだったんだっけ？

68：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：4
1：54

>>67

いや、本当だぞ？その写真を見せようとしてくれたのもたぬき……機動六課の隊長なんだから

69：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：4
2：13

>>68

たぬきのこと機動六課の隊長っていうのをやめろよな！

70：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：4
3：46

妖精さんは写真に写らない。魔王様達の娘も写真に写らない。つまり、妖精さんは魔王様の娘ってことか！

71：名無しの管理局の社畜局員：75／09／05 18：4
4：07

403 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :
09 : 23

俺、妖精さん見たけど、凄い場面だった。

404 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :
10 : 27

>>403

新たな目撃情報か。待ってたぜ。

405 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :
10 : 52

>>403

報告を頼むぞ。

406 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :
11 : 43

今日、カレーを食べてると食堂の一角が騒がしかったんだ。

様子を見に行けばそこには機動六課の隊長格がいたんだ。

407 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :
12 : 56

>>406

なんかイベントでもしていたのか？

408 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :
13 : 11

>>406

まじか、俺が行った時はいなかったぞ

409 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :
13 : 57

>>408

昼過ぎの事だったよ。

で、なんで集まっていたかかって言うと、皆で妖精さんに詰め寄ってたんだよ。

410 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :
14 : 33

>>>409

まじか、詰め寄られる妖精さんはどんな感じだった？

411：名無しの管理局の社畜局員：75／10／02 19：

16：25

>>>410

黒い雷光さんに抱きしめられてたけど何食わぬ顔でラーメンを食べてた。

412：名無しの管理局の社畜局員：75／10／02 19：

16：40

>>>411

なにそれ、羨ましい。

413：名無しの管理局の社畜局員：75／10／02 19：

16：47

>>>411

そこには魔王様はいらっしゃったのか？

414：名無しの管理局の社畜局員：75／10／02 19：

17：54

>>>413

たぬきさんに抑えられながら色々と呼んでただけど、その内容がね……

415：名無しの管理局の社畜局員：75／10／02 19：

18：32

>>>414

はやくしてくれ。話を聞くために服を脱いだんだ。焦らされたら風邪を引いちゃう。

416：名無しの管理局の社畜局員：75／10／02 19：

20：56

まあ、変態はいるけどすすめる。

魔王様「どうしていなくなっちゃったの!? ヴィ〇イオはどこ!?」

たぬきさん「落ち着いて! そんな顔しても答えてくれやんで!」

魔王様「ちゃんと話して! 娘の心配するのは普通でしょ!?!」

とまあ、なんだか旦那に子供連れて逃げられたような感じだった。

4 1 7 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :
2 1 : 2 5

>>> 4 1 6

なん: だと!? まさか妖精さんは魔王様の旦那!?

4 1 8 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :
2 1 : 2 7

>>> 4 1 6

ちよつとまって。黒い雷光さんが抱きついてたってどうしてなんだ!?

4 1 9 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :
2 1 : 3 2

>>> 4 1 6

修羅場 w w w

4 2 0 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :
2 3 : 4 3

>>> 4 1 8

よくわからないけど、黒い雷光さんのあの顔は恋する女の顔だったぜ

4 2 1 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :
2 4 : 5 3

まじか。あの人って魔王様とできてたって聞いてたのに。

4 2 2 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :
2 4 : 5 9

色々とぶつとんできてるな。

4 2 3 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :
2 5 : 3 3

>>> 4 1 6

すげえ修羅場だな

4 2 4 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :

27 : 13

でも、ここで終わりじゃ無いんだ。

425 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :

27 : 54

>>424

はやくしてくれ。俺はいつまで裸でいればいいんだ？

426 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :

28 : 32

>>425

服は着とけ。

で、魔王様はその後落ち着いたんだけど、さっき言った黒い雷光さんだけじゃなく、なんと赤いロリ様も妖精さんといいい雰囲気だったんだ。

427 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :

28 : 54

>>426

ハーレム？

428 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :

29 : 57

>>427

いや、妖精さんは女なんだ。男に見えるけど女なんだ!!

429 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :

30 : 16

>>426

修羅場の中でも何食わぬ顔で飯食ってそうな妖精さんを想像できいな。

430 : 名無しの管理局の社畜局員 : 75 / 10 / 02 19 :

31 : 24

>>429

ああ、正しくそのとおりだった。妖精さんはメンタルも凄まじい
と思い知ったぞ。

それと俺の友人は魔王様の供物になりました。

4 3 1 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :

3 2 : 3 2

>> 4 3 0

安らかに眠れ (一人)

4 3 2 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :

3 2 : 2 7

>> 4 3 0

供物が成仏できますように (一人)

4 3 3 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :

3 2 : 5 4

>> 4 3 0

魔王様が満足しますように (一人)

4 3 4 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :

3 3 : 2 0

>> 4 3 0

取り敢えず手合わせとけ (一人)

4 3 5 : 名無しの管理局の社畜局員 : 7 5 / 1 0 / 0 2 1 9 :

3 3 : 3 9

>> 4 3 0

友人に幸あれ (一人)

新着レスを表示する

第37話

【高町家】

「俺は今から翠屋の方へ行くけど、何かあったら連絡しろよ?」

「もう、私も二十歳になるんだから心配しなくていいよお兄ちゃん」

ヴィヴィオに会えなくなってからもう随分経った。機動六課も解散したし今では概ね教導隊での仕事ばかりだ。

何も言わない典矢君には何度も詰め寄ったけど相変わらず進展はない。あまりに詰め寄りすぎて管理局では変な噂も立っているし、ふんだり蹴ったりだ。

フェイトちゃんは相変わらず典矢君にべつとりで偶にヴィヴィオへのプレゼントを典矢君に預けて渡してもらっているみたい。私も色々送ったけど、ちゃんと受け取っているのだろうか。ヴィヴィオも来年からは小学校に通う年齢のはずだし、ちゃんと出来るかな。典矢君のことだからちゃんと考えてるとは思うけど……

とまあ、それはおいておいて。私は年末年始の休業に故郷である海鳴に帰ってきていた。今もこたつに入りながらのべーつとしている。なんで一人で寂しくいるのかには理由はあるようでない。フェイトちゃんやはやてちゃんは大掃除で忙しいし、アリサちゃんとすずかちゃんは昼間からお酒を飲みに行ってしまったみたいだ。私は誕生日が遅く二十歳にはなっていないので遠慮したのだけど、これなら行ったほうが良かったかな。

「にしても、大掃除終わってるなんて考えてなかったよお」

フェイトちゃんやはやてちゃんと違って海鳴の家に家族がいる私はお父さんたちが既に済ましてしまっていることがある。正直毎年そのことを忘れて結局大掃除していないのだけど、こうなると暇になつてくるのだ。かといって大掃除を手伝いに早めに帰る事も出来

ないし、毎年この暇な時間を過ごすしか無いのだ。

こんな時典矢君がいれば時間を潰せるのに……まさか管理局に残るとは思わなかったなあ。分身だから本体ではないけど。

そう言えば前にハコちゃんも見かけた。私の顔を見た瞬間ものすごい勢いで逃げられたけど……あんなに速く逃げなくてもいいのに。ちよつとヴィヴィオのことを聞こうと思ったただけなのに。

こうなったらフェイトちゃんの家で大掃除手伝いに行こうかなあ。迷惑かなあ。

「ん？」

突然端末が鳴り出した。画面にはアリサちゃんの名前。今はお酒飲んでるはずだけど……

「もしもし、どうしたの？アリサちゃん？」

『あ、なのはあ？あんだなんでこないのよお!!』

端末から聞こえる声は何だかいつもより甲高くて間延びしている変な声だった。

うん、もしかしなくてもただけど。

「アリサちゃん、酔ってる？」

『酔ってないわよお。それよりはやくきなさい!!』

「絶対に酔ってるよ！」

私の声のアリサちゃんは笑い声をあげる。それから察するに物凄く酔っているのだろう。少し見てみたい気もする。まだ昼過ぎなのにべろべろに酔っ払ってるなんてアリサちゃんらしくないし。でも、今行ったら巻き込まれるよね。正直大変だと思う。

行くか行かないか迷う所だけ……

『あ、すずか！あんた私のチーズ取ったわね!!』

『えへへ、ちよつとくらいいいでしょ?』

『まあいつか。典矢！追加よろしく!!』

「え?」

私が迷っている間に聞き逃せない言葉が聞こえてきた。
今アリサちゃん、典矢って言った?

「アリサちゃん?」

『どうしたの?なのはあ』

「今典矢って言ったよね?」

『うーん、覚えてないー!!』

駄目だこれ。取り敢えず確かめないといけない。もしかすれば本当に典矢君かもしれないし。

「私も今から行くからどこにいるか教えてくれる?」

『えつとねえ、何処だっけ?あははは!!』

アリサちゃんはだめかもしれない。

『すずかあ。ここって何処?』

『海鳴図書館前の道路沿いにあるエンジェルってバーだよ、なのはちゃん』

『だってー!!』

うん。間違いなく典矢君の店だろう。

まさか地球の海鳴で店を開いてるなんて。ある意味灯台下暗し

だったよ。

「待ってて、今から行くから!!」

◇

準備をして私は走った。運動音痴な私が陸上選手顔負けで走っているのは気にしない方向で行こう。魔力で強化とかしていないよ!

とまあ、誰に言い訳してるかもわからない事はおいておいて、海鳴図書館前の道路沿いにある、建物の一角にあるエンジェルという店。同じ建物だけど隣にはstarredという名前のパン屋がある。外から見ればレジに立つ銀髪の女の子がいる。日本ではまずみない髪の色だし、典矢君の関係者だろう。だって、エンジェルstarredって天使始めたってことでしょ?流石に偶然とは思えない。

取り敢えず、エンジェルという店に入る。

カランカランと音がなり、窓がないから暗いと思ってたけど淡い証明が案内店の中を明るく照らしている。入ってすぐにアリサちゃんの笑い声が聞こえる。

「あ、なのはだあ!!」

奥に進んでみれば案の定カウンター席に座るアリサちゃんとすずかちゃんの姿が。そして、そのカウンターには。

「典、矢君」

見間違うわけがない。彼の姿があつた。

いつも食堂でフェイトちゃんのお弁当を食べている彼を見ていた。でもそれは彼ではなかったのだ。今ここにいる典矢君こそが本物。

あの時は会えるのは直ぐだつて言っていたのに1年も経つたよ。ヴィヴィオにも会いたかつたけど、君にも会いたかつたんだよ？

「早く来なさいよお!!」

アリサちゃんの声は無視して私はカウンターでコップを拭いている典矢君に近づく。

私がここにこれたつてことはもう来るべき時が来たつてことなんだよね？

普通に考えればありえないけど、典矢君ならば未来が見えていてもおかしくない。彼なら何が出来ると言われても驚かないだろう。寧ろ出来ないと言われる方が驚くくらいだ。

「ねえ、典矢君。久し振りだね」

「なに？なのは典矢と知り合いなのお？」

「ちよつと黙つてて！アリサちゃん！」

すずかちゃんにお腹を殴られて唸っているアリサちゃんを放置して典矢君を見つめる。ミッドチルダにいた頃よりも表情が豊かになつているね。苦笑しながらこちらを見ている。

「で、今度こそ理由を教えてくださいよ？」

結局これまで色々とはぐらかされてきたんだ。もう教えてくれないだろう。もし話さないっていうのなら……

敵わないかもしれないけど、管理局のエースとして精一杯頑張らせてもらうよ。具体的に言えばフェイトちゃんのお弁当に細工をした

り。

「それは私がお答えしよう!!!」

「アクセルシューター」

いきなりカウンター横の扉が開き白衣を着た男、ジェイル・スカリエツテイが現れた。

とつさに魔法で迎撃したけど私は悪くないよね？驚いちやっただし正当防衛だよ。

「お、落ち着きたまえ。そんな怖い顔をしていればしわになって……あ、すいません、なんでもないです」

「なんで貴方がここにいるの？」

「愚問だ！私はここの店員。いや、今は典矢君をオーナーとしたパン屋の店長を務めているのさ!!」

予想外な事だった。まさか犯罪者を雇うなんて思わなかったよ。もしかして私たちに話せなかったのってこの男のせいなんじゃ……いや、確かはやてちゃんだけ言えないって言ってたしまた違うことかな。

「と、取り敢えず理由を言えば典矢君は何も悪くないのだ！」

「ふーん……」

「悪いのは全て彼女なのだ!!」

彼女……女か。なに？新しくヴィヴィオのお母さんでも出来たの？それだったら私ちよつと典矢君に言いたいことが有るなあ。
あれ？どうしたの？アリサちゃん。私は怒ってないよ？

「そう言えばヴィヴィオはどうしたの？典矢君」

「ハコと魚取りに行ったよ、すずかさん」

「そうなんだ」



【海鳴公園】

もう、母さんにも困ったものだ。大掃除はやらなくてもいいって……流石に困っちゃうよ。最近は典矢のことであまり母さんに会えてなかったからプレゼント渡したら感動のあまり大掃除を一瞬で終わらすなんておかしいよね。

母さんも典矢みたいにとんでもない人種だとすこしだけ思うな。

それにしても買い出しかあ。もうお正月用のご飯はあるし、後は母さん用のお酒とかかなあ。

でも私一応お酒買えるけど、どれがいいなんてわからないよ。こんな時典矢がいてくれたらいいのに……典矢に会いたいな。

ん？なんだろう、この曲。どこかで聞いたことがあるような……

「ハコちゃん！準備はいい!!？」

『ウン!!』

確か、前にはやての所のテレビで見た無人島生活の時にかかった曲だったかな。

「いくよ!!」

『レマゲンテツキョウ!!』

えつと、こうウエットスーツを着た男の人が銚子を持って海に飛び込んでたっけ。

「海へ!!」

『ピョーン!!』

「何でヴィヴィオがいるの!?!」

信じられない光景に思わず思考を変なほうにやっていたけど、見過ごせない。というか突っ込みどころが多すぎる。はやてがいたら今頃ツツコミの嵐にあふれていただろう。

どうしてこんな所にヴィヴィオがいるんや!とか、何で海に飛び込んでるねん!とか。

「え!?!冬の海に飛び込んでる!?!ちよつと!ダメだよヴィヴィオ!寒いよ!?!」

私は急いでヴィヴィオがいた場所まで走る。隣にハコがいた気がするけど気にしない。

ヴィヴィオが飛び込んだ後の海面には泡が立ち込めており、今のが
幻ではないのがわかる。

流石にこんな中で海に入ったら……

「取ったどー!!!」

『トツタドー!!!』

心配して見ていると、タコが刺さった銚子を持っていてヴィヴィオと
カジキマグロが刺さった銚子を啜えているハコが海面に現れた。

「あ、フェイトママだ!!!」

取り敢えず、ヴィヴィオをお風呂に入れたらいいかな。

「リン、フォース……？」

第38話

はやての目の前にいる一人の女性。銀色の髪に少し強張った表情を浮かべて人物。本来であれば存在するはずのない女性であった。はやてが唾然として立ちすくむのも無理はない。

約10年前、はやての目の前でその存在を消滅させた者。はやてによつて悠久リインフォースの風と名付けられ、夜天の書を葬るために消えた彼女。そんな彼女が昔と変わらぬ姿で……右手に鰯を掴んで立っていたのだ。

「……本当に、リインフォースなん？」

「はい主。恥ずかしながら、帰ってきました」

はやてはこの際右手に持つ物を視界に入れずにヨロヨロとリインフォースへと近寄る。

一体どうしてここにいいのかはわからない。どうやって生き返ったのかはわからない。

だけど、一つだけ言えることはある。失った家族が戻ってきたのだ。はやては一度息を吐いてからニコリと笑い告げた。

「おかえりなさい」

「……はいっ!!」

はやては両手を広げて自分より背の大きなリインフォースを抱きしめる。

久しぶりの家族は少し生臭いにおいがした。

◇ 「そっか、まさかリインフォースさんを蘇らせたなんて思わなかったよ」

「私も驚いたさ。幽霊等を信じてはいなかったが、実際に目の前で見せられれば認めざるを得なかったよ」

所変わってバー【エンジェル】では高町なのはとジェル・スカリエツティが典矢に出されたミルクを飲みながら話し込んでいた。

話し下手な典矢に代わってスカリエツティが話すのは典矢がミッドチルダから離れ、なのは達にも教えなかった理由。

「でもさ、リインフォースさんってそんなヘタレだったっけ？」

「ああ！八神はやての所に行く決心を持つのに1年と3ヶ月も使うほどにはね」

「……典矢君がいなくなっただけで蘇ってたんだね」

リインフォースを蘇生したはいいものの、本人が八神はやてと会う決心がつかずにこれ程の歳月が経過したというわけだ。

あのような別れ方をしたばかりでおめおめと戻るのには恥ずかしいだとか、今更合わす顔など無いとか、本人にとっては至極大事ではあるのだろうかなのはにとってはそんな理由でヴィヴィオと離れて過ぎなければならなかった事に物申したい気分であった。

リインフォースにとっすぐのことでもこちらとしては10年前のことなのだ。再会して喜びはすれど恥ずかしがる必要などないのだ。

「典矢君って何者なのかな」

リインフォースに呆れ、典矢の力の深さが余計に見えなくなったなのは視線の先にはすずか相手に接客をしている典矢がいる。

アリサは少し落ち着いたのかカクテルを典矢から受け取った後ちびちびと舐めるように飲んでいった。

「ふむ、それは私も気になるがあまり詮索するのはおすすめしないよ」

「まあ、無理矢理聞いてもはぐらかされるだろうし、典矢君が話してくれるのを待つよ」

「それがいいさ。それに蘇生と言っても今回が特別だと典矢君は言っていたよ」

なのはは視線を動かしスカリエッツィを見る。

いつの間にか彼の頭にはコック帽が乗っていたのだがなのはは何も言わない。

唯、早く続きを話せとばかりに目を細めてスカリエッツィを見抜いていた。

「……リインフォース君は元々がデバイスだ。それでいて夜天の書という存在に深く関わっていた」

「夜天の書には主が死んだ時に次の主の元へ現れる転生機能が備わっているのは知っているね？」

「まあ、色々あったからね」

「その転生は本来の輪廻転生という枠組みから離れた物らしくてね、リインフォース君の場合輪廻転生から離れ、この街に魂だけが留まっていたそうだ」

何やら雲行きが怪しくなってきた話になのはは身震いする。彼女は少しだけ、そう。本人曰くほんの少しだけ幽霊という物を苦手としている。スカリエッツィの話が本当だとすれば、リインフォースとい

う幽霊がずっと海鳴市にいたということになる。

「だから彼はその魂をひっ捕らえて機械の身体……まあユニゾンデバイスとしてリインフォース君を蘇らせたのだよ」

「……………そっか」

なのはは心のなかで安堵する。どうやら幽霊については深く話さないようだ。魂くらいならば問題はない。

「まあ、会いたい気持ちはわかるが今は家族水入らずにしておこうではないか。心配しなくても暗くなったら帰ってくるさ」

少しだけスカリエッティは勘違いしたようだが会いたいというのは嘘ではない為なのは特に気にしないことにした。確かに今は久しぶりの再会に八神家は大いに賑わっているだろう。そこに友人といえど自分が行くのは憚れる。

素直にこの店で待っていたほうがいいだろう。

「所でヴィヴィオは今は何処にいるの？」

「ヴィヴィオ君？確か今朝方リインフォース君とハコ君の3人で海に向かっていたが……恐らくリインフォース君は八神はやての元へ向かったし、今はハコ君と魚釣りでもしているのではないか？」

「大丈夫かな……………」

「何を言っているのかね。君の砲撃でも傷一つ負わないヴィヴィオ君が早々怪我を負うことすら無いのだぞ」

スカリエッティの言葉に1年前の戦いを思い浮かべる。笑みを浮かべながらも必死になって戦っていた自分の娘の姿には心底驚きとその成長に喜びを感じた。些か強くなり過ぎだとは思いが気にしない方向でいこうと考える。

時空犯罪者がそのへんを闊歩しているわけでもないし大丈夫だろ

うと、なのははミルクを飲む。

この管理局員、目の前の男の存在を忘れているが、本人が気にしていないので問題はないのだろう。

「それにそろそろ昼食時だ。お腹が空いて帰ってくるさ」

「そうだね。おとなしく待っておこうか」

|||||

||

「ねえヴィヴィオ？確かにこのスーツ温かいけどさ、普通冬に潜って魚はとらないんじゃないかな」

「でもまだマグロとってないもん」

「さつきハコがカジキマグロとってたよ？」

「あれはカジキだよ？フェイトママ」

「それはそうだけどさ。こんな所にマグロがいるわけ……」

『ヴィヴィオ！マンボウ！』

「え!?どこどこ!？」

「……………」

『ホラ！アソコ!!』

「本当だあ!!でもマンボウって食べれるのかな」

『ワカンナイ!』

「うーん、お姉ちゃんは鰯とってたし、美味しい魚獲りたいね」

『トツタド——!!』

「おお!!カレイとヒラメの2枚抜きだあ!!」

「……………あつたかいなあ」

「石鯛獲ったどーー!!」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||

第39話

「ほんまに、ほんまにありがとう！」
「……」

あれから暫くしてからはやてちゃんは店にやってきた。ヴォルケンの皆にリインフォースさんの姿も見える。本当に生き返ったんだね。典矢君ってやつぱり規格外だなあ……

「典矢、キツイの一杯くれ」

よく典矢君の店に通っていたヴィータちゃんは早速カウンターに座ってお酒を注文している。平静を装っているけど、嬉しいのがバレだね。リインフォースさんが帰ってきた事もそうだけど、典矢君に会えたのが嬉しいんだね。ヴィータちゃんも典矢君がいなくなつて落ち込んだし、仕方ないよね。

ヴィータちゃんの横ではザフィーラさんがいつの間にか現れた肉を食べている。機動六課ではいつも守護獣の姿で肉を食べてなかったからいっぱい食べておくのだろう。

というより、はやてちゃんの家では食べてないのかな。

「失礼」

「構わないよ」

「なのはもここにいたのか」

「あそこで寝ちゃってるアリサちゃんの連絡を受けてね」

シグナムさんが私達の座っているテーブルの椅子に座ったのを見ながらカウンターで一升瓶を抱えて床で寝てしまっているアリサちゃんを指差す。

アリサちゃん日本酒飲んでたつて訳でもないのに、眠ってから典矢君が布団を引いて一升瓶をそつと持たせていたんだよね。つい面白

くて写真撮っちゃったよ。

すずかちゃんは相変わらずニコニコしながらお酒を飲んでる。強いんだね。

「まさか今年最後にこんな事になるなんて思わなかったな」

「そうだね、私も驚きすぎてもう何がなんだかわからないよ」

はやてちゃんは感極まったのか典矢君を抱きしめている。まあ、分身か本体かはわからない状況だけど、涙を浮かべて笑っているはやてちゃんを見れば、どっちでもいいのだと思う。

失った家族が帰ってきたのだ。嬉しさの余り泣いちゃうのは仕方ないよね。

「所でヴィヴィオはいないのか？てつきりいるものだと」

「ふむ、ヴィヴィオ君ならばハコ君と魚釣りに行っている筈だ」

「成る程、情報感謝する。所で貴方は？」

ヴィヴィオかあ。そう言えばリインフォースさんが来たっていうんだったら、文句を言わないと。だってあれなんだよね？リインフォースさんがヘタレたせいでヴィヴィオの運動会とか見れなかったんだよね？許しがたいよ。というかスカさん達と典矢君、ハコちゃんにリインフォースさんの集団で応援に行ったなんて、羨ましすぎるよ。

ハコちゃんがまた無駄に有能な所を見せて映像がみれなかったし、今の私は少し怒ってるよ。

「よくぞ聞いてくれた。見ての通り私は典矢君に雇われ、パン屋の店長兼科学者をしている者だ！」

「ついでに元犯罪者」

「成る程………犯罪者？」

「ふむ？私は今は犯罪者ではないのかね？」

「聞いてないの？ 貴方に手を出すのは危険だからって手配が取り消されたの」

「…………いや、明確には知らなかったよ。というより、殆ど半信半疑だったさ。まさかそんな事をしでかすとは…………」

「うん、典矢君のせいだね」

最高評議会に入るって正直意味がわかんないよ。

最近いろんな部隊で支給されてるデバイスも性能が上がったって話だし、典矢君が手を加えたのかなあ…………

「名前を聞かせてもらおうか」

「察しているだろう？ 私はジェイル・スカリエッティ。典矢君の友人だ！」

「……………なのは、こいつを逮捕しなくていいのか？」

「いいよ。ヴィヴィオにも良くしてくれてるし、本人は悪い人じゃないさそうだし」

そんな事よりも悪いのはリインフォースさんだ。目があったので、目配せしてこっちに来てもらおう。

「いや、しかしだな…………」

「ちよつとシグナムさんは黙ってて」

不思議な顔を浮かべてこっちに来たリインフォースさんへ笑いかける。

そして、何故か少し強張った表情を浮かべたリインフォースさんへ私は出来るだけ優しく語りかけた。

「正座」

「大漁、大漁！」

『タノシカツタネー』

「多すぎだと思っただけどなあ」

海からあがり、ヴィヴィオから渡されたスーツから着替えた私はヴィヴィオを先頭に典矢が新しく始めたという店に向かっている。

今日の釣果と言っているのかわからないけど、取れた魚の量は石鯛2匹、黒鯛1匹、ヒラメ2匹、カレイ1匹、タコ2匹、鰯1匹、カツオ2匹、イカ1匹、サザエ3匹、それとカジキマグロ1匹。正直色々おかしい魚がいるだろうけど、気にしないでおこう。因みに私が獲ったのはサザエだった。

一度こういうのって漁業権とか大丈夫なのかハコちゃんに聞いたら、ヴィヴィオの関係者は大丈夫なように典矢がしたと言っていた。何をしたのはかは教えてくれなかったけど、それについても気にしない事にした。

こんなに多くの魚を持ってないと思ったけど、ヴィヴィオが目の前に大きな穴を作ってそこに魚を放り込んでるのを見て、私は深く考えないことにした。

「今日はお刺身食べたいね」

『ネー』

「美味しそうだね。私も貰っていい？」

「いいよ！足りなかったらハコちゃんも獲ってきてくれるし！」

うん、一瞬納得しかけたけどハコがヴィヴィオの言葉に衝撃を受けたような顔をしているよ？

まあ、ヴィヴィオが嬉しそうだしいいかな。

あ。母さんにも連絡しておこう。典矢の店が無くなって少し元気なかつたし。年末の忘年会って事でお酒も飲みたいだろうし。

「あ、彼処がパパのお店だよ！」

ヴィヴィオの指差す方向にあるのは大きめの建物。その左側にあるエンジェルと書かれた看板の店。隣のパン屋さんからもいい匂いがするな。また後で行ってみよう。

「いこー！フェイトママ！」

「うん。行こうか。後、ハコ。足りなかったら私達が買ってくるし気にしなくていいよ？」

『ダ、ダイジョウブ。ヴィヴィオノキタイウラギレナイ』

気持ちはわかるけど、そんなに気負わなくてもいいよ。私はヴィヴィオのお母さんだから私も色々としてあげたいんだ。

『ワカッター！アリガトウ！フェイト！』

そう言えばハコも言葉に出さなくても解るんだったね。ふふ、取り敢えずどういたしましてと言っておくよ。

「ただいまあー!!」

『マー!!』

「お邪魔します」

「うー? フェイトママ。ただいまだよ?」

「ふふ、そうだね。ただいま」

「おかえりー!!」

ヴィヴィオが元気よく扉を開けたのでそれに続いて私も中に入る。カウンターでコップを磨いているであろう典矢へと視線を向ける。

「……………」

店の中が色々と大変なことになっているけど、気にしない気にしない。

「はやて。取り敢えずどこうか」

「ん? フェイトちゃんも来たんか」

何故かはやてに抱きつかれてる典矢のところに向かって歩いて行く。ヴィヴィオは……一升瓶を抱えて寝ているアリサの所へ行つたみたいだし、大丈夫だろう。

「はやて、それは私の役目だと思うんだ」

「もうちよつと待つてな。典矢に感謝の気持ちをしつかり伝えやんとあかんねん」

「……………」

よく見ればはやてが少し泣いているのが解つた。そこまで典矢に会いたかつたのだろう。流石に邪魔は出来ないなあ。

仕方ない。分身だけど、今カウンターですずかの相手をしてる典矢の所へ行こう。私も20歳になったし、少しお酒飲もうかな。

第40話

年末は典矢君とヴィヴィオとの再会。リインフォースさんの生き返り、スカさんの一発芸と色々賑わっていた。

それから年が明けてからヴィヴィオと初詣に行ったり、フェイトちゃんが酔っ払って典矢君をお持ち帰りしそうになったりとゆっくりできる時間もなかったのだけど、私達の冬季休暇もあと少しで終わってしまう。

そんな中、私はまだ日も高いうちから「エンジェル」にやってきていて、ある事実に関頭を抱えるしか無かったのであった。

「お父さんたちになんて説明しよう」

典矢君のこと、ヴィヴィオの事、話さなければいけないのだけど、上手く説明できる気がしない。

流石に20になつてないのにもう小学生になるっていう娘がいるなんて言ったらどうなるかなんてわからない。お姉ちゃんやお母さんは大丈夫かもしれないけど、お父さんやお兄ちゃんは考えたくもない。

いつそ言わないでおこうとも思ったけど、いずれはバレちゃうだろうし、言っておいたほうがいいのだとは自分でもわかっている。

でも、言ってしまったら典矢君にあらぬ疑いがかかっちゃうんじゃないだろうか……そ、その。ヴィヴィオが私と典矢君の子供なんだって……

いや、事実そうなんだけど、別に私が産んだわけではないのだ。そ、そんな行為は経験すら無いし……

ああ、こういった時最初から知っているプレシアさんの娘であるフェイトちゃんが羨ましくなる。はやてちゃんもグレアムさんに言えないでいるみたいだし、フェイトちゃんだけだよ。こんな悩みを抱えていないの……

「ふう……困ったな」
「ん？」

今典矢君が困ったと言ったのかな？

珍しいことがあるものだ。典矢君なら何でも出来ると思うし、悩み事とか無いものだと思ってたから……

私の方の悩みが解決したわけではないけど、ここは年上として典矢君の悩みの解決を手伝ってあげよう。時間止めている間もカウントすれば私の方が年下だって言うのはなしの方向で。

「何かあったの？」

「まあ、ちよつとね」

「もし良かったら聞くよ？私にできることは無いかな？」

「うん。正直僕ではどうしようもないから、手伝ってもらえると助かるよ」

夢でも見てるのだろうか。まさか典矢君が私に手伝ってっというなんて……正直嬉しい。何だかんだ何も出来てないし、私に出来る事なら精一杯やるよ。

「ヴィヴィオがいなくなったんだ」

「……………え？」

◇

日が落ちた海鳴市の街中。街灯が淡く道を照らしている中、ヴィイオは見たこともない道を恐る恐る歩いていた。彼女の傍らにはいつも彼女を守ってくれている心強いボディガードがいるのだが、生憎と彼は睡眠中のようにヴィイオの頭の上で瞼を閉じていた。

しかし、そこにいるのはヴィイオとハコだけではない。彼女達の姉に当たる立場の銀髪の女性、リインフォースも一緒に歩いていた。周囲は静寂が支配している。別にヴィイオが初めて日が落ちてから外に出たというわけでもない。スカリエツテイの家から夜遅くにこの3人で家に帰ったこともあるのだ。

それでも、ヴィイオの心は不安が支配していた。

街の様子がいつもと違う。見慣れているはずの光景がまったくの別物に見えてしまう。

あったはずの場所に建物が無く、無かったはずの場所に建物があ
る。

まるで夢でも見ているような光景にヴィイオはリインフォース

の腕を握りしめて一歩一歩その歩を進める。

やがて、見知った茶髪が見えた。

背丈はいつもより小さく見える。髪はたまに見せるようなツインテールでまとめているがあの後ろ姿はヴィヴィオにとって良く知る人物の一人であった。

「なのはママ!!」

「あ、ちよつと待て！ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオが思わず声を上げ走りだしてしまった。何やら様子がおかしくて、リインフォースが呼び止めるがヴィヴィオは構わず走って行ってしまふ。

仕方無く、リインフォースもヴィヴィオを追い、目の前の人物の方へと走る。

どこかで見たような面影を持ったその姿。見たのは最近だと思えるその姿に何かが引つかかる。

白い服を着た栗色の髪を持った魔導師が光に包まれようとしている中、ヴィヴィオとリインフォースは光に飛び込んだ。

「むぎゅっー」

◇

あまりの眩しさに目を閉じたリインフォースはその光が転移魔法

の副産物であることを思い出す。

つまり、自分達はどこか違う場所に転移したということになるのだが、一体何処なのか、何故転移したのかが検討がつかない。

警戒しておくに越したことはないのだ。彼女にとって、ヴィヴィオを守るということは、自分を生き返らせてくれた典矢への恩返しでもあり、姉としての意地でもあった。

「……は……」

見覚えがある。自分が消える前に一度だけ来たことがある場所。

「あなた達は？」

「……………」

次元航空艦アースラ。

その艦長であつたリンデイ・ハラオウンが目の前に立っていた。

「あれ？リンデイさん？」

ヴィヴィオにとって少しだけ顔見知りでも有る彼女。ミッドチルダに典矢が店を構えてた時の常連。何故か以前よりも若々しく見えるリンデイに疑問を抱きつつ、ヴィヴィオは踏みつけている人物から飛び降り、リンデイの事を下から覗き込む。

「いたたた」

ヴィヴィオに踏みつけられていた人物。高町なのはは背中を擦り

ながらも立ち上がる。

「なのはママ?」

その背丈はヴィヴィオよりも高いものの、いつもの彼女のものではない。幼さが残った顔つきに、ヴィヴィオは目の前の人物に言い知れぬ不信感を抱く。

「えっと、ヴィヴィオちゃん?」

対するなのは目の前の少女の様子に困惑する。

まるで自分とは初対面のように振る舞うヴィヴィオの様子はおかしい。頭の上にいる機械も見たことも無い。だとしても“アレ”には見えない。

見た目は……少しだけ、ほんの少しだけ自分が知るヴィヴィオよりも目線が低い気が……

「……………ふええ」

「?」

ヴィヴィオはなのはの視線に思わず涙を浮かべてしまう。

こちらの様子を伺う目。いつもの様に母親らしい視線ではないその目はヴィヴィオの心を悲壮感が埋めていく。久しぶりに会ってあまり話もできていなかったのに、今度はよくわからない目で見られる事に深い悲しみを覚えてしまう。

なのはもいきなり涙を浮かべたヴィヴィオに驚き、オロオロと視線を泳がせ、この状況をどうかしてくれる人を探す。

「どうしたの?なのはママ」

そして現れた。リンデイの背後にある扉から現れた金色の髪に左右で違う目を持った少女。

高町ヴィヴィオが……………

第41話

「成る程、まさかとは思ったが、やはり過去の世界だったか」

急に現れた2人の中で話のわかりそうな方、リインフォースへと事のあらましを伝えていた。

様々な世界、いや、様々な時間の世界からここに飛ばされた者は他にもいる。今現在、高町なのはの周りをなのはママコールをしながらぐるぐると回っている二人のヴィヴィオに対してもそうだ。

同じ時間軸に二人の同一人物が存在している。それは問題があるのかもしれないのだが、リインフォースはこの世界が既に己のいる世界ではないことを理解している。ヴィヴィオの名前が高町ヴィヴィオだということは未来の話なので解らないが、この世界においてありえないことが起こっている。

リンデイ・ハラオウンからの話を聞いている間に他の人達も現れている。その中に、この世界のリインフォースがいたのだ。

しかし、彼女はこの事件の記憶はない。更に言えば闇の書事件の直後に消えている事は間違いがないため、ありえないのだ。

この世界のリインフォースは何故か寿命が少し伸びたらしいのだが、そのような事は自分には起こっていなかった。

ヴィヴィオの事も考えればここは自分達の世界の過去ではないことを理解できたというわけだが……

「なあなあ、リインは未来でも生きることが出来るんやね？」

「……………」

それを過去の主、この世界の八神はやてへと伝えることが憚れる。希望を持たしてもいいのかが解らない。もしかするとこの世界では自分が蘇ることはないかもしれない。上月典矢がこの世界においてはやて達と接触すれば蘇ることが出来るかもしれない。

しかし、もしもう一人のヴィヴィオがこの世界におけるヴィヴィオ

だとするならば……高町ヴィヴィオと言う名前から察するに典矢とこの世界のなのには接点はない。リインフォースの世界においてヴィヴィオとなのはが接点を持ったのは上月典矢がいたからなのだ。故にヴィヴィオが典矢と接点を持たずしてなのはと典矢が接点を持つているとは考えにくい。つまりは、はやてと典矢に接点がないということ。

それでは蘇ることは出来ない。典矢がいたからこそ己を蘇らせることが出来たのだ。

と言ってもこの世界において蘇らない保証はない。

「少し待っていてください」

「ん、わかった」

リインフォースは己の考えの正確性を得るために高町ヴィヴィオの元へ向かう。

「一ついいかな?」

「あ、お姉ちゃん、どうしたの?」

「お姉ちゃん?えっと、リインフォースさんですよね?」

高町ヴィヴィオの口ぶりからリインフォースとは家族という関係ではないことが察せられる。

はやても母親の一人であることからそれは考えにくい……

「君の世界で私は存在しているか?」

「……………」

その無言に込められた意味をリインフォースは読み取る。無言は肯定と同意義とはよく言ったものでこれで自分が復活し得ない未来が存在することを理解した。

一礼してリインフォースは次にこの世界のフェイト・テストアロツサ

の元へ向かう。

この世界において自分の世界と同じように典矢と接触するか否かを確かめる方法は現状において一つしか無い。

「フェイト・テストロッサ」

「は、はい」

「母親のプレシア・テストロッサは……」

リインフォースの言葉にフェイトの顔を俯かせた。

この反応から察するに、プレシア・テストロッサは既に生きてはいない。つまり、この世界では典矢がプレシアを助けていないということ。

「……悪かった。いきなり酷な事を聞いて」

「い、いえ！大丈夫です」

見るからに元気の無くなったフェイトにリインフォースは罪悪感を感じながらも、はやての元へ向かった。

下手に希望を持たせても仕方がない。まだ推測の域を出ない事ではあるが、この世界においてリインフォースは蘇らない可能性が高いのだ。

「主」

「ん。どうしたん？」

はやての横にはこの世界の自分がいる。些か変な気分になりながらもリインフォースは重々しくその口を開いた。

「恐らく、この世界では私。リインフォースは蘇りません」

「な!?!」

「……………そうか」

はやてにとつては一度は見えた希望が無くなった言葉。この世界のリインフォースにとつては何故かは分からないが理解できていた事。

未来にリインフォースが存在して何故この世界のリインフォースが生きていけないのか。納得のできないはやては震える声で問うた。何故と。

「私を蘇らせた者、その人物が主達と接触していないのです」

「……………リインを蘇らせた？」

「はい。そして、プレシア・テスタロッサを救った男。ヴィヴィオの父親がいないのです」

「そ、それじゃあ、もしその男の人を見つけれたら蘇るかも知れやんってこと!？」

「……………そうですね」

リインフォースの返答に僅かながら希望を抱くはやて。どうか典矢を見つけ出せば家族を失わなくて済むと…………

『ムリ』

しかし、その希望は一体のロボットの一言で一蹴された。

リインフォースの頭に着地する球体の機械。上月典矢が作り出した規格外の存在は寝ぼけた目をしながらはやてを見下ろす。

いきなり現れ、いきなり否定されたはやては目の前の存在に困惑する。

頭に乗られているリインフォースは口を閉ざし、矢澤ハコの言葉を待つ。その機械が語る言葉は基本的に真実であり、リインフォースが

知り得ない情報を数多く有している。

そんなハコが断言したのだ。確かな根拠を持った答えを持っているに他ならない。

「な、なんでや!」

『ゴシユジンハヒトリダケ。ドノセカイニモイナイ』

「ど、どうしてそんなことが!」

『ゴシユジンダカラ』

ひどくリインフォースは納得してしまった。典矢の規格外さを傍で一年もの間見続けていたからこそ、その言葉が持つ魔力を知っている。しかし、はやては納得ができない。何故存在しないのか、何故自分の世界のリインが生きられないのか……

「なんでなんよ!なんで、なんで!」

「主」

そのはやてを止めたのはこの世界のリインフォースだった。

既に己の運命は知っていた。未来から来た自分に淡い希望を抱いたが、それは手の届かぬ幻想だと知っても、ただ「そうなのか」と理解するだけだった。

もう覚悟は決まっていた。主との別れも、この世界で消えるのも。全てを受け入れていた。

だからこそ、今も尚抗おうとするはやてにこの世界のリインフォースは語りかけた。優しい言葉で、ただ自分の気持を素直に。

「私は主に思われて幸せです。確かに、ずっと一緒に暮らせるのなら

もつと幸せでしょうけど、私はもう十分幸せなのです」

「リイン……」

「違う世界では貴方と歩める私もいるかもしれない。ですが、例え姿形は無くなるうとも、私の心は貴女と共にあります」

幽霊として海鳴市にいたと聞かされたリインフォースは割りと洒落になっていないその言葉に少し冷や汗を掻きながらもはやてを見る。

涙を浮かべ、一瞬俯くとゆつくりと顔を上げ、まっすぐと二人のリインフォースを見た。

「そうやね。もう時間もあんまりないんや。だったら一杯思いで作らんとな」

「はいー」

涙はまだ出ている。しかしはやての顔には笑みがある。真実を伝えた罪悪感を感じていたリインフォースも少し重荷を下ろしたかのように心が軽くなったのを感じながらも、辛い役目を受け持ってくれたハコに心のなかで感謝する。

「う？…はやてママ泣いてるの？」

「ん？ちっちゃい方のヴィヴィオちゃん、か」

「すぐおつきくなるもん！」

「はは、そうやね」

なのはと遊ぶのに飽きたのか、こちらにやってきたヴィヴィオははやての顔を覗き込みながらはやてに笑いかける。

「えへへ、悲しいのどっかへとんでっちゃえー!!」

はやてのお腹を一度触り、何かをどこかで飛ばすように手を振るう

ヴィヴィオにはやての顔が綻ぶ。

人の悲哀を察することが出来るのは子供ゆえかもしれない。

「ヴィヴィオちゃんはいいい子やね」

「パパとママ達の子供だからね！」

その笑顔にはやては救われた。

そして気付く。ヴィヴィオのおかしな言葉に。

——はやてママ

——ママ達

「なあ、ヴィヴィオちゃん。ヴィヴィオちゃんママは誰？」

「フェイトママ！はやてママ！なのはママ！」

「……………」

高町ヴィヴィオは母親をなのはだと言った。そして、目の前のヴィヴィオは母親を3人あげた。

一度目を閉じ息を吐いて落ち着く。

そしてゆっくりと瞼を開き、バツの悪そうな顔をしているリインフォースへと視線を向けた。

第42話

「と、今の状況はそんな感じよ」

顔合わせも滞り無く終わらせたリインフォースは、何故自分達が過去に来たのか、また今何が起きているのかの全容を聞いた。

永遠結晶エクザミアを核としたシステム、砕け得ぬ闇。システムU—Dの暴走、それを手に入れんがためにエルトリアという世界からやってきたアミテイエ・フローリアンとキリエ・フローリアンの次元超越の際に次元が歪んだためにあらゆる時代から呼び出されたのだと。そして、今は砕け得ぬ闇の暴走を止める為の最後の作戦会議を行うところだったと赤と青の翼が生えた八神はやてに似たマテリアル、ロード・デイアーチェより伝えられたのだ。その間、ヴィヴィオとハコは特になんかすることもなく、つまらなかつたからなのかブリッジからいなくなっていた。

「その事件の解決に力を貸すのは問題ありません」

リインフォースの言葉にはやての顔が綻ぶ。戦力が増えるのは彼女達にとっても願ったり叶ったりなのだ。と言っても、恐らくは最大の戦力になり得る二人がこの場にいないということにリインフォースは苦笑いを浮かべる。

かたや管理局の陸上部隊を壊滅に追い込み、かたや管理局のエースオーブエースを一对多という状況で打ち破る程の実力。

この場にそれを知るものはリインフォース以外にはいない。もしかすれば高町ヴィヴィオもそれくらい力を持っているのかもしれないと考えるが典矢がいらないという事より戦い方から違うのだろうと結論づけ、実力の断定をやめる。

「リンデイ艦長！大変です！」

ブリッジに碎け得ぬ闇を監視していたエイミイの声が響く。
すぐさまリンデイが駆け寄り、碎け得ぬ闇の映ったモニターを凝視した。そこにあるのは赤黒い結界。封時結界のようなものかもしれないが、問題なのは結界よりも違うこと。

「これは……!」

「闇の欠片の大量……だと!?」

数えるのが馬鹿馬鹿しくなるほどの数の闇の欠片が出現していた。その姿は多種多様でなのは達を模した者も存在している。

転移装置で碎け得ぬ闇のいる結界内に行ったとして、結果以外の闇の欠片が暴れまわれれば唯ではすまないだろう。となれば必然的に戦力を分担させなければならなくなった。

戦えるであろうリーゼ姉妹もこの場にはいない。ただ戦力を分担しても碎け得ぬ闇の力は強大なのだ。闇の欠片を止めることに割きすぎては暴走を止めることはできないだろう。

悠長に構えていることは出来ない。刻一刻と状況は悪くなる一方なのだ。直ぐにでも向かわなければいけない。

「リンデイ艦長! 転移装置が起動しています!」

「なんですって!?!」

だからこそ、更に追い打ちをかけるような報告に頭が回らなくなる。アースラの艦員で転移装置を使うものはまずいない。使ったとしても何かしらの報告がある筈だ。報告もなしに使いそうなものは達はこの場にいる。だとすれば一体誰が転移装置を起動させたのか……

「……………まったく」

「転移装置の設定先のモニターを移します!」

モニターの一つの映像が切り替わり、丁度闇の欠片の大群がいる上空を映し出す。

あまりの数に絶望すらも感じる光景の中、一人の人間の姿が見えた。

両腕に嵌った腕輪が淡く光り、自由落下の法則を無視し、傍らに球体の機会を連れ、ゆっくりと降下している少女。

「やはり、無茶をするな」

ヴィヴィオの姿がそこにはあった。

それはリンデイを困惑の渦に飲み込む。転移装置、あれを動かすとなれば多少の手順が必要となる。以前ユーノ・スクライアに勝手に起動されたことを反省し、初めてではまず動かせない程度にはしていたはずだが、彼処にいる以上ヴィヴィオが転移装置であの場に向かったこととなる。

「ちよつと！はやく助けに行かないと！」

「なんであんなところにヴィヴィオちゃんがおるんよ!!」

ブリッジ内のモニターを見ていた者達はヴィヴィオを助けるために転移装置へと向かう。

あれほどの数の闇の欠片がいてたった一人の、魔導師でもない少女ではとてもじゃないが無事で済むわけがない。最悪の場合命を落とす可能性すらも有る。それは高町ヴィヴィオ自身も懸念していた。

自分のことだから解る。オリヴィエのクローンであり、自身は失った聖王の鎧を持っていようとまあヴィヴィオがどの程度使えるのかは解らない。今でこそ自分はストライクアーツの修行により力を手に入れているが、あのヴィヴィオはそんな物は無いだろう。更に言えば彼処にいるのが高町ヴィヴィオであっても窮地という状況は変わらない。

数は少なく見積もっても4桁。もしかすると5桁を超えているかもしれない。そんな中にヴィヴィオという少女がいて助けに向かわない者はここにはいなかった。

「待て」

しかし、たった一人だけ、ヴィヴィオを助けに行く者達を止める者がいた。

転移装置がある通路に立ち塞がるように立つリインフォースにはやては困惑する。

このままではヴィヴィオが危ない。リインフォースもそれを理解している筈だ……リインフォースにとってヴィヴィオは妹のようなもの。なのに何故じやまをするのか。それが解らない。

「そこをどいて!」

「……なんと云えばいいのか」

対するリインフォースも言葉を濁していた。

確かに心配ではあるが、ヴィヴィオがやられることはまず無い。攻撃力こそなんとかエースオブエースを倒せるといった程度の物だが、その防御力はエースオブエースの一撃を持ってしても外傷を受けないほどになっている。

そんなヴィヴィオの元へこの人数で行ってしまえばそれこそ当初の目的でも有る砕け得ぬ闇の暴走を止めるということが出来なくなってしまう。

「まあ、ヴィヴィオのことは私に任せて主達は砕け得ぬ闇の元へ向かってください」

「そんなん、無理に決まってるやろ!!」

やはり簡単にはいかない。それも無理はない。ヴィヴィオの実力

を知らないのだ。

しかし、このままいかせるのは問題だ。

何故ヴィヴィオがあの場合に行ったのか、何故ハコは何も言わずに付いて行ったのか。その真意は解らないまでも、リインフォースは己のやるべきことを頭のなかで理解させ、はやてへと語りかけた。

「あの程度の雑魚相手に苦戦はしません。ヴィヴィオの救援には私が向かいますので、主達は決戦の準備を」

「何言ってるんや!」

「主は見えていてください。そして、砕け得ぬ闇の元へ」

「でも、でも!」

あくまでもヴィヴィオを守ろうとするその姿勢。違う世界とはいえど家族であるリインフォースの妹。つまりヴィヴィオすらも家族なのだという意思をもったはやての言葉にリインフォースは一度目を瞑った後、息を吐いて少しだけはやて達から離れた。

「安心してください。道は私達が切り開きます」

そう伝えたリインフォースは小さな声で何かを呟くと、光を纏って姿を消してしまう。

魔力の痕跡すらも残さずに消えたリインフォースに驚きつつも、はやて達はリンディから呼び止められ、ブリッジへと戻ったのであった。

◇ 「やっときた！」

『チコク！チコク！』

突如真横に現れたリインフォースにヴィヴィオは笑みを浮かべ待っていましたと言わんばかりに右腕を回す。

「私を待っていてくれたのだな」

「勿論だよ！一緒にやっつけよ！」

ヴィヴィオの明るい声に苦笑し、視線を前方に向けた。

眼前に浮かぶは万の軍勢。対するは一人の人間と二体の機械。数の上での戦力差は一目瞭然だといえるだろう。彼女達を知らない誰に問うても勝負にすらならないと答えるだろう。

傍から見ればどうしようもない絶望的な状況。だが、そんな状態でも彼女達は笑っていた。

己に授けられた力は一騎当千の証。いや、それ以上の力を秘めていと理解している。

三人の身体が光に包まれる。

目的は殲滅。目の前にいる者達は全てが有象無象の存在。

彼女達の心に、敗北という文字は存在しないのだ。

「お願い！チェインバー！アルちゃん！」

『ハングドマン！』

二人に比べればリインフォースの力は弱いのかも知れない。だが、それでもヴィヴィオの姉として彼女を守らなければならぬ。

姉としての意地を張るため、リインフォースはその力を開放した。

「行こうか、ブラックサレナ」

第43話

モニターに映るその戦いにアースラ内の魔導師達は絶句し、立ちすくんでいた。

誰が見ても不利な状況。2人、いや3体対1万という劣勢にも関わらず戦況を有利に進めているのはヴィヴィオ達であった。

ヴィヴィオは白と黒に彩られた機械を手足に纏い、左手の銃で相手の動きを止め、右手の剣で近付いてくる敵をなぎ払う。

それだけではない。ヴィヴィオの身体から時折照射されるレーザーは闇の欠片が放つ魔力弾を尽く撃ち落としている。

そんなヴィヴィオを青い機体が後方より確実な動作で敵を打ち落とすことで守っている。

接近すらも許さぬその射撃は凄まじいもので、フェイトを模した闇の欠片が高速で移動してもあっけなく撃ち落とされている。

しかし、そんな2体よりも目を引く機体。漆黒と呼ぶべきその機体はヴィヴィオたちよりも数段身体が大きく、敵のいる最前線にてその猛威を振るっていた。

ヴィヴィオのような全方向への対応性があるわけでもない。青い機体のような精密な射撃を行っているわけでもない。それどころか、武器らしい武器が小さな銃だけというその機体。

それは恐るべき速度で飛び回り、ヴィヴィオの銃撃により動きを止めた相手を優先して巨体の特性を活かした体当たりを行っていた。

圧倒的な質量を誇っているのは容易に想像できる。そして、フェイトの姿をした闇の欠片のソニックフォームですら振り切れない速度。当たれば途轍もないダメージを負うのだろう。巨体に触れる傍から闇の欠片が霧散していく。しかもその機体の空間が少し編曲して見えるのも何かの力がかかっているからだろう。黒い機体に当たる前に少しだけ魔力弾が曲がっているようにも見える。まるで空間を捻じ曲げているような……

リインフォースが出撃前に告げた言葉は真実のものであった。彼

女にとって1万という闇の欠片という存在はただの雑魚でしかなく、守るべき者が存在しても物ともせずには戦う姿ははやての隣りにいるリインフォースにはない力だった。

何故自分にはあれだけの力が無いのだろうか、主を守れるという自信が無いのだろうか。そんな疑念が身に降りかかる。違う世界の自分が戦う姿。青い機体か黒い機体のどちらかがリインフォースなのかは確証はないが、何故か不思議とあの黒い機体に乗り込んでいると思っただ。

握っている拳に力が入る。この世界では自分は今もうすぐに消えてしまうのだ。主を最後まで守れること無く……

そんなリインフォースの様子に気づいたのは高町ヴィヴィオであった。彼女もまた違う世界の自分に戸惑い、その強さに驚愕していた。

聖王としてでもなく、ストライクアーツでの技術でもない。見たこともない戦い方で敵を打ち落とすその姿に違和感を感じないはずがなかった。そして、それはリインフォースにも言えること。モニターを見ながらも何かを耐えるように腕を震わせている彼女に気づき、その腕を握った。

「……どうした？」

「……ただ、少し辛そうだったから」

その心中を察することは出来ない。でも辛いのならそれを支えることは出来る。実際に会ったことはない。だが、聞いたことは有る。八神はやてから彼女の事を教えて貰ったことがある。

ただ、それだけでよかった。それだけでヴィヴィオは彼女を支えることが出来る。どれだけリインフォースがはやてに想われていたのかを知っているから。

「闇の欠片は彼女達に任せても大丈夫そうね。皆さんは直ぐにでも砕

け得ぬ闇の元へ行く準備を済ませてください。結界内への転移準備が整い次第向かってもらいます」

モニターから目を外し、魔導師達へと視線を向けたリンデイからの指示を聞いた後、リンフォースはその手に感じる温もりを感じた後、少しだけ笑うと高町ヴィヴィオに向かって口を開いた。

「違う世界の自分に負ける訳にはいかないな」

「はいー！」

黒い感情が渦巻く心中は晴れた。あそこで戦う自分もここにいる自分も同じなのだ。ただ護りたいもののために戦う。何よりも大事な事を自分に言い聞かせリンフォースはやての元へと向かう。

◇
なのは達を砕け得ぬ闇の元へと送ったリンデイはクロノが使用したサーチャーからの映像を見ながら戦いが無事に済むことを祈っていた。

ヴィヴィオ達と闇の欠片の戦いは戦況は変わらずに有利なままである。そちらは心配する必要は無いのだが、結界内はそうと言えなかった。

まずなのは達が送られてから直ぐに彼女達を大量の赤黒い魔力弾が襲った。

それを回避したり防御したりと誰もが被弾する事は無かったのだが、問題は攻撃が止まらないことだった。

近づこうとも動けない状況。このままでは刻一刻と碎け得ぬ闇の暴走を止める事が出来なくなってしまう。

それは結界内にいる者達も気づいていたことで、なんとか近づくために、攻撃を仕掛け始めていた。

しかし、なのはのデイバインバスターを始め、どの砲撃も効果が無い。攻撃の雨は耐えず降り注ぐのみ。

そこで動いたのはクロノとユーノであった。

ザフィーラが巨大な障壁を張り、そこから行動は開始する。

打ち合わせをしたのだろう、クロノにはシグナムが、ユーノにはヴィータが付き、砲撃を防ぎながら近づき、バインドで碎け得ぬ闇を拘束する。

そのバインドも直ぐに破壊されたが一瞬攻撃は止まった。そこからザフィーラが障壁を解き、急接近して鋼の軛により更なる拘束を行う。

ザフィーラの背後で固まっている者達は新たな障壁を展開し、再び始まる攻撃から魔法の準備をしている4人を守った。

一人は高町なのは。大量展開された魔力弾の残していった魔力をかき集め集束砲撃の準備を。

一人はフェイト・テストアロツサ・ハラオウン。ザンバーフォームの魔力刃に己の魔力を集中させる。

一人は八神はやて。リインフォースとのユニゾンにより増加している魔力を高め、夜天の書に記されている魔法の詠唱を始める。

一人はロード・ディアーチエ。自身に力を託し、消えていった二人のマテリアルの思いを胸に紫天の書の魔力を集中させる。

魔力弾の量は減っていた。鋼の軛によって身動きを抑制されているのが原因だろう。

しかし、それもあまり長くは持たない。ザフィーラは自身を守る障壁は最小限に、鋼の軛を維持しようとも、砕け得ぬ闇の力に耐え切れずに音を立ててヒビの入っていく軛を見て苦悶の表情を浮かべる。

無論、ユーノ達は何もしていないわけではない。

絶えずバインドをかけ続け少しでもなのは達の準備を長引かせるために、彼女達の攻撃を当てる為に戦っている。

ヴィータやシグナムも障壁を張りながらも牽制程度ではあるが砕け得ぬ闇へと攻撃を行っている。

モニターを見ているリンディにもわかる苦しい戦い。闇の書の闇の時以上に苦しい顔をしているなのは達に自分が何も出来ないことに歯がゆく感じる。

あの時のようにアルカンシエルを使うわけにもいかない。この戦いは彼女達だけが決着を付けられるもの。自分が言っても足手まといにしかならないことを理解し、彼女達の戦いを見守る。

そして、なのは達の攻撃の準備が整った。

ザフィーラは合図に対し、新たな軛を生成し、射線上から離れる。

ユーノ達も最後にとバインドを唱え、少しでも砕け得ぬ闇の行動を阻害する。

障壁でなのは達を守っていた者達も二分に別れ、彼女達の射線を空ける。

そして放たれる4つの魔法。スターライトブレイカー、プラズマザンバー、ラグナロク。そしてジャガーノート。

砕け得ぬ闇はそれらの魔法に対し、ただ無言で見続け避ける素振りも見せなかった。

バインドで縛られていたからかもしれない。軛が邪魔だったからかもしれない。だけど、それでも不自然なほどに不動であった砕け得

ぬ闇にリンデイは言い知れぬ不安を感じた。

4つの魔法が砕け得ぬ闇に直撃する。

魔力弾による攻撃が止まり、被弾した砕け得ぬ闇に煙が立ち込める。

ここで終われば後はロード・ディアーチエがシステムを掌握して終わり。

しかし、そう上手く行くものでもなく。煙が晴れ無傷である砕け得ぬ闇の姿にリンデイは苦虫を噛み潰したような顔をした。

あれだけの攻撃が効かないとなると既に打つ手はないのかもしれない。少なくとも結界内のなのは達ではどうすることも……

ならば今結界外で戦っているヴィヴィオ達は……

いや、まだ闇の欠片は残っている。もし殲滅できたのならば直ぐにでも増援に向かってもらいたいのだが、結界内に入るには一度アースラに戻ってきて貰う必要もある。

その為の転移装置の設定の変更等を考えれば時間はもう無い。

どうすればいいのか。そんな疑念がリンデイの頭のなかを取り巻く。

そして自体は更に動く。

「艦長！上月ヴィヴィオちゃん達の上空より巨大な魔力反応！」

「なんですって!?!」

新たなイレギュラー。エイミイの報告にモニターを確認したリンデイは絶句する。

決して巨大ではないが、ハッキリと確認できる空に浮かぶもの。
何かの魔法陣が展開されていた。

第44話

砕け得ぬ闇の展開する結界内。赤黒い空間に囚われているのは達は自分達の攻撃に全く動じていない少女の姿に少なからず動揺していた。

皆が時間を稼ぎ、動きすらも止めてくれ、直撃したはずなのに無傷である。非殺傷設定ではあるものの何かしらのダメージを負わない筈がない。それなのに無傷であるということは単純に砕け得ぬ闇の防御力がずば抜けているということ。

勝ち目がない。どれだけ相手の攻撃を凌いでも、どれだけ相手の動きを止めようとも。ダメージを与えられなければ勝ち目なんかはない。

暴走を止めるにしろ相手を力で凌駕しなければいけない。しかし、なのは達にはその手段がなかった。

最高威力を誇るであろうスターライトブレイカーも効かなかった。これが周囲の魔力が軽薄であったならばまだ望みはあっただろう。しかし、相手がばらまく魔力によってほぼ最大威力のスターライトブレイカーであったのだ。

現状、彼女達に砕け得ぬ闇を倒す方法がなかった。

それでも絶望している訳にはいかない。このままでは砕け得ぬ闇は暴走し、地球を崩壊させてしまう。どうにかシステムを掌握しなければいけない。

砕け得ぬ闇の攻撃が激化する。魔力弾の一発一発の威力が上昇し、密度すらも上がっていく。爆音が一度響くが気にする余裕などはない。

ザフィーラを筆頭に障壁を張るが、どの程度持つかは解らない。

フェイトが隙を見て接近しようとするも直ぐに魔力弾の嵐に身動きが取れなくなる。ユーノ達も再度動きを止めようとバインドをしかけるもシグナム達の障壁では防ぎきれずに攻勢に出ることが出来ない。

ジリ貧。砕け得ぬ闇は消耗する様子もなくなのは達を追い詰めていく。

展開する障壁の魔力が足りなくなってくる。それに対し放たれる魔力弾は更に威力が上がっていく。

そして、拮抗は敗れた。

砕け得ぬ闇が魔力弾へ一層魔力を込めて放った。それは満身創痍で防いでいたなのは達に迫っていく。

ユーノや近くにいるフェイト、クロノの方にも届く。

その魔力弾は障壁をたやすく破り、今まで防いでいた魔力弾の弾幕が押し寄せる。

直撃すればバリアジャケットごとやられてしまう。非殺傷設定ではなければ命だつて落とすかもしれない。

しかし、避けようにももう魔力弾は目前。打つ手がない。撃墜されればそれこそ地球が終わってしまう。

なんとかかしくてはいけない。どうあっても砕け得ぬ闇を止めなければならぬ。

なのはは動く。せめてシステムを掌握できるであろうディアーチエだけでも守れるように。未来の娘であるヴィヴィオを守るように。

障壁を貼っていたザファイラの前に躍り出て、精一杯の障壁を展開する。

だが、無情にもなのはの障壁を突き破られた。

後は誰にも解る結果となる。無数の弾幕は無防備なのはへと

……直撃する。

◇

全員が来たる衝撃に身体を強張らせ目を閉じた。

一つ当たればそれを連鎖に無数の弾幕に襲われる。それは明確な事だった。ひとたまりもないであろうその攻撃に怯んでしまうのは仕方ないのかもしれない。

だが、何時までたっても衝撃はやって来なかった。

目をゆっくりと開き、なのはは自分の前に立ちふさがる者の後ろ姿を見る。

長い栗色の髪を左側で一纏めにし、白いバリアジャケットを身に纏った一人の女性。誰もが用意に障壁を破壊された筈の魔力弾を何でもないように障壁で防いでいる。どこか見たことがあるデバイスを持ったその女性は左手を前に突き出しながらチラリとなのは達を見た。

その瞳が何を写しているのかは解らない。だが、その女性が何者であるのかをなのはは理解できた。

「わ……たし？」

顔を洗うときにいつも対面するその顔。少し顔つきは違うし背の高さも違う。それでも彼女は自分であると思議と理解できた。

目の前の女性はなのはの言葉に少しだけ微笑み、視線を前方に向けた。

ユーノたちの方も同様に一人の女性が現れていた。

と言つてもしつかりと確認することはできていない。金色の髪を下ろし、黒いバリアジャケットを身に纏ったその女性は凄まじい動きでデバイスを動かし、迫る魔力弾を全て切り裂いている。

恐らくは障壁では対処できないとの判断なのだろうが、それでもありえないといえる程の技量と選択だとシグナムは感じた。

「とり、あえず！みんな彼処にいる集団に合流して！」

金髪の女性は魔力弾を切り裂きながらシグナム達へ指示を飛ばす。こうも離れていては守るのも一苦労と成る。ならば一纏めにし、守ったほうがまだ効率的といえる。

幸いにももう一人の栗色の髪をした女性の方は障壁だけで魔力弾を防いでいる。しかもまだ余力はありそうな顔をしている。

「あなたは……」

「それは後で話すから！早く行って！」

まさに絶技とも言える動きで魔力弾を切り裂く彼女の言葉に従い障壁を張りながらユーノ達は移動する。

ここでの増援はまさに渡りに船であった。このままではどうしようもない状況で現れたこの二人は少なくとも只者ではないことを理解している。

それもその筈、彼女達の見た目はまさに高町なのはとフェイト・テスタロッサ・ハラオウンをそのまま大きくしたような姿だったのだから。

障壁を展開し、過去の自分を守るなのはは苦笑いを浮かべていた。確かに迫り来る魔力弾はとんでもない威力のものだ。以前の自分では到底防ぎきれないその圧力。だが今では余裕を持って防ぐことが出来る。

その原因は理解している。自身の右手に持つデバイス、レイジングハートのお陰だ。以前フェイトが典矢のおかげでバルディッシュの性能が上がり、魔力効率が上昇したのと同じようにレイジングハートも典矢のお陰でその性能を引き上げている。

過去に来る前に典矢が急いで手を加えた自身のデバイスを握る手に力が入り離れた場所でユーノ達をこちらに連れてこようとしているフェイトへと視線を向ける。

当初はヴィヴィオを迎えに来ただけだった。だけど典矢やプレシア・テスタロッサからこの世界で起きていることを大まかに聞き、その解決の手伝いを行っている。

思ったよりも相手は強そうだが、更なる強化を果たしたバルディッシュを持ったフェイトと一緒に負けるつもりはしないとのは心の中で呟き、障壁の効果範囲を広げながら、レイジングハートへと周囲の魔力を収束しだすのであった。

◇
【数分前】

巨大な魔力反応を起こした上空に浮かんだ魔法陣から現れたのは3人の魔導師であった。典矢によって送り込まれた3人、高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやては過去の海鳴市に到着すると同時に海に浮かぶ赤黒い結界に目をやった。

魔法による結界。その中にいる存在は既に聞かされている。過去の自分達では到底倒せない相手。碎け得ぬ闇。3人は互いに顔を合わせるも一度頷いた。

「あ、やっぱりママ達だ！」

いざ突入しようとしたが、背後からの声に動きを止め、視線を向ける。

そこには在りし日の姿で佇むヴィヴィオがいた。はやては見たとががないのだが、なのははよく覚えている。最初の姿ではなく、装甲が剥がれ、顔が完全に露出している状態のヴィヴィオにほっと安堵の域をこぼす。

やはり親としてヴィヴィオの安否を心配していたのだ。いくらハコヤリインフォースがいるとしても心配なのには変わりはない。

「あのねあのね！ヴィヴィオ2000も倒したんだよ！」

嬉しそうに話すヴィヴィオを横目になのは達はどうかやって結界内に向かうのかを思案する。

転移で向かうには少しばかり位置情報が足りない。使用は危険である。ならばどうすべきか……

ヴィヴィオに続くように2体の機械がやってくる。一人は以前管理局陸上部隊を壊滅に追いやったハコが乗る青い機体。そしてとても大きな身体をした黒い機械。その中に誰が入っているのかを消去法で理解したなのは達は話しだす。

砕け得ぬ闇は放つておいては世界が減びると……

それを聞いたハコとリインフォースの動きは早かった。

ハコは何処からとも無く巨大な銃を取り出すと結界に向かって構える。それは一度フェイトも見たことのあるもの。山ですら消滅させるその兵器を構えたハコに少し苦笑いを浮かべながらフェイトはリインフォースへと視線を向ける。

何度か悩んでいたリインフォースは一度ため息を吐いた後、漆黒の外装を脱ぎ捨てた。

海に落ちる前に粒子となって消えていく外装を少しだけ目でおつたりインフォースは新たに現れたその機体にある一つの銃を取り出す。

いくつかの形態を持った銃。ハコが設計したという時点で色々不安が残るものとなっているがその威力は折り紙つきである。

ハコとリインフォースは構える。一人は核の威力を考慮した魔力弾。もう一人は銃身に込められた魔力を開放するハドロン砲。

青い機械と白色の機体は並び立ち、結界へとチャージした砲撃を放った。

結果的に穴が空いた。そこへなのは達は突入し、砕け得ぬ闇の討伐へと向かったのだ。

八神はやてだけは外の闇の欠片の殲滅のために残った。既にリインフォース・ツヴァイとはシンクロし。蒼天の書を手に持ったはやては張り切った様子で闇の欠片の大群へと飛翔していった。

その後ろ姿を見るリインフォースはいつの間にか姿を消していた

妹に苦笑しながらも透明な緑色のエネルギーウィングを展開する。

この場を守るべきヴィヴィオは既にいない。ただこの場には守るべき八神はやてが存在しているだけ。

ならばこそ、ラインフォースは外装を再度装着することはない。

防御力は激減する。ボソンジジャンプによる奇襲は出来なくなる。

その代わり、その機体。ハコが手がけたブラックサレナの中身であるそれは、攻撃力、機動力に優れた性能を持ち、オールレンジで戦うことの出来る機体。

その名は「ランスロット・クストース」

円卓の騎士の名を関する機体。開拓者でも白き忠誠心フロンティア アルピオンでもなく、ただ主とともに在る守護者クストースを名付けられたそれは正しくラインフォースのことを示していた。

ブラックサレナという呪いで包まれた守護騎士。呪いですらも利用するが、その根底は守護に有る。ハコから説明を受けた時にラインフォースはその機体が自分であることを理解していた。

呪いの方は未だ使いこなせていない。ボソンジジャンプによる高速戦闘や時間超越の奇襲などはまだ使えない。それでも今の姿、守護騎士としての力は高めてきていた。

この場においてヴィヴィオはいない。呪いによって彼女を守る必要はない。今必要なのは主を守護し、迫り来る敵を払う剣となること。

結界内では高町なのはとフェイト・テスタロッサ。結界外でははやてとラインフォースがその戦意をつのらせていた。

第45話

なんとかユーノ達はなののはの後ろに行けたみたい。これで気にすること無く動くことが出来る。

外はヴィヴィオ達がどうにかしてくるだろうし心配はない。私が今やるべきことは目の前の女の子を倒すことだけ。

砕け得ぬ闇、違う世界のこととはいえ流石に見過ごす訳にはいかな存在。この世界に干渉しちやったら砕け得ぬ闇に偽物を作られちやうからって理由で典矢は来れなかった。流石に典矢の偽物が出ちやったらどうしようもなくなるからって母さんが言っていた。

でも、私としては嬉しかった。だって典矢が私を頼ってくれたんだから。典矢は大抵のことを一人でも出来ちやう。だからいつも支えたいって思っても必要なかったりしていた。でも今回は別。私が典矢の力になることが出来る。

それに典矢は心配してバルディッシュの性能を上げてくれたみたい。典矢の思いを感じるんだ。なんだか胸の奥がポカポカしてきて、満たされる気分。

迫ってくる弾幕の雨を躲しつつ、私はバルディッシュに語りかける。

「じゃあ、初めてだけど頑張ろうか」

『Yes Sir
了解』

バルディッシュに追加された新たな形態。典矢が施してくれたその機能はバルディッシュ曰くとんでもない代物らしい。

手に持つバルディッシュの刀身が変化する。ライオット状態のように二本の剣となり、両手に収まる。

『Rising form』

それだけではない。金色に輝く魔力の刃が私の周りに現れる。その数は8本。持ち手の部分までも魔力で形成されているそれは私へ迫る魔力弾を勝手に切り裂いている。

私の動きについてくるように刃はついてくる。

この魔力刃、ただ魔力弾を切り裂いているだけじゃないみたい。切った魔力弾の魔力を吸収して私に送ってるみたい。しかも私の魔力に変換もしてくれている。

これなら斬りつけ続ければ私は戦い続けることが出来る。それにこの形態。感覚が鋭くなって、動きも速くなっていく気がする。ソニックフォームでもないのに攻撃が当たる気がしない。

これが典矢がくれた力。私を心配してくれている気持ち。

負ける気がしない。今の私は間違いなく過去のどの私を考えても最強だ。典矢が信じてくれるのなら私は何処までも強くなれる。

「いこう、バルディッシュ」

私の言葉に呼応するように周りの剣の輝きが増していた。

◇

ユーノ君達が合流した。

私の障壁はまだ余裕がある。それでも相手の攻撃が止んでいるわけじゃなく、障壁を途切れさせる訳にはいかない。

典矢君が追加してくれた新しいレイジングハートの姿は気になる所だけど今はそんな暇はない。

遠目に見ればフェイトちゃんが魔力弾の嵐の中で飛び回っているのが見える。その腰のあたりにあるいくつかの光の剣。あれがフェイトちゃんの新しい力か。正直格好いいと思う。

これは期待できる。レイジングハートも凄い進化をしているに違いない。

だからこそ、使えないことが悔やまられる。せめてフェイトちゃんが碎け得ぬ闇の動きを止めてくれるのなら隙ができるのに……

それよりもフェイトちゃんが倒しちゃうかもしれないか。

まあ、今持ち場を放棄する訳にはいかないし、仕方ない……か。

ん？

あれ？障壁の前に見慣れた黒紫の物体が出現している。

いや、物体というか空間というか。

以前ヴィヴィオが使っていた時空間の穴。確かヴィヴィオは彼処に魔力弾を放って縦横無尽に弾幕を展開してたんだっけ。

と、そうじゃない。今はそれが何なのかじゃなくて、どうして出てきたのかを考えないといけない。

正直予想はついてるけどもしものときに備えておいたほうがいいともう。

空いた空間に魔力弾が吸い込まれていくのが見える。その魔力弾を相手に向かつて撃つのだろうか。いや、ヴィヴィオのことだから想像はできないけど、取り敢えずいることは解った。

「うおおお、眩しいい」

うん、期待を裏切らないというか予想を外しに来るといふか。取り敢えず言いたいことはあるけどヴィヴィオが穴から普通に出てきた。身にまもっている機械の色はさつきとは違って蒼くなっている。左右の手には前みたい片方剣で片方銃というわけではなく、2本剣を持つている。一本は前と同じ、もう一本は緑色の刀身に青色の柄が目立つ大きな剣だった。

それよりも気になるのはヴィヴィオ、普通に魔力弾当たってるけど動じてないことなんだよね。

「あ、なのはママー！」

こちらに気づいたのだろう。ヴィヴィオはこちらを見てクルリと回転してこつちにやってくる。

危ないから後ろにいて欲しいけど、様子を見る限りヴィヴィオを心配する必要はなさそうだ。

あのヴィヴィオが使ってる機械って確かインフィニット・ストラトスっていう典矢君とハコは作った物なんだよね。改めて見ても意味がわからない性能してると思う。

もしかしたら少し時間稼ぎできるかも……

「ヴィヴィオ、少しの間この攻撃から皆を守れる？」

「うー？わかった!!」

出来るんだね。それなら準備ができる。

「アルちゃん！」

『ラムダドライバ、Version Field』

ヴィヴィオが何かを使ったのだろう。私の障壁へと降り注いでいた魔力弾が跳ね返っている。一度見たことあるから解るけど、確か斥力？で防御してるんだっけ。

まあ、大丈夫なことも解ったから、取り敢えず障壁を解除する。

「あ、あの。あなたは……」

後ろから私……昔の私が話しかけてきた。まあ、いきなり自分に似た雰囲気の人が出てきたらびつくりするよね。

でも、今はゆっくりと話している余裕なんて無いんだ。

「後で教えてあげるから、待ってて」

フェイトちゃんが攻撃を仕掛けているのが見える。目で追うのがやつとのくらい速いや。

私も負けてられないや。

「さあ、がんばろう。レイジングハート」

『Of course
勿論です』

魔力が高まっていくのが解る。レイジングハートの赤い宝石の部分が淡く光り、新しい姿になろうとしている。

『Genocide mode』

「ふえ!?!」

今、聞き捨てならない言葉が聞こえた気がした。ちゃんとした意味は覚えてないけど、物騒な意味の単語だった気がする……

そんな困惑する私をよそにレイジングハートの姿が変わっていく。これまでよりもゴツくなっていく砲身にブラスタモードのようなビットが射出されていく。いや、ビットの大きさもこっちの方が大きい。

ビットの数は10個。私の近くをふよふよと浮いている。それで終わりかと思ったら今度は私を何かの膜が包み込んだ。

「……レイジングハート、このバリアみたいなのは？」
『This barrier is disabling and absorption magic魔力無効吸収バリアです』
「……」

と、取り敢えず凄いものなんだって思えばいいよね。

第46話

レイジングハートがバリアのお陰で魔力弾を意識的に防がなくていいって言うから私はヴィヴィオが魔力弾を弾いている場所から離れる。

確かにバリアに魔力弾はあたっては衝撃も何も感じない。これなら相手の攻撃を気にせずに魔力を貯めることが出来る。

『Master, please take this visitor
「マスター、このバイザーを受け取ってください」
「うん？」』

レイジングハートが突然何かを私に渡してきた。どうやら耳にかけて片目にだけつける機械みたいだけど、なにか意味があるのかな。何だかドラ○ンボールのスカ○ターみたいけど……もしかしてこれで相手の位置とか強さとか解つちやうのかな！

何だかメーターのような、目盛りのような物があるし、これがあの砕け得ぬ闇の戦闘力ってことなのかな。少しずつ増えているのが気になるけど……

『The meter reflected in your eyes is the absorbed magic.
「あなたの目に映るメーターは吸収した魔力です」』

ああ、戦闘力ってわけじゃあ無いんだね。確かにさつき魔力無効吸収バリアって言ってたけど、魔力弾の魔力を吸収しているんだ。

通りでレイジングハートが少し光っているわけだよ。でも目盛りを見てもどれだけ魔力が溜まっているのかが解らないや。

『A star light breaker can be
「基本的にスターライトブレイカーは
ranched between 1 to 3 divisions.
1から3目盛りで放つことが出来ます」』

「へ？もう目盛りが7個溜まっているんだけど……もしかして最小消費
だったら7回撃てたりするの？」
『That's right.
「その通りです」』

ええ……魔力をどれだけ貯めれるの……少しレイジングハートは大きくなっただけ、そんなに魔力貯めれるようになったの？

『By the way, at most 20 meters can be kept. 因みに、最大で20メートル貯めれます』

「……1メーターは何目盛りなのかな？」

『Ten division. 10目盛りですね』

ということとは……最小威力で200回……

『Agnoocide breaker 3メーターを消費することで

can be reached with consuming 3 meters. ジェノサイドブレイカーを撃てますよ』

「だからジェノサイドって何!?!」

しかも最大威力のスターライトブレイカーの10倍の魔力を使
うってどんな威力なの!?!

『If that's ranch, 』

もしそれを撃てば、
this vicinity unity blows off.
が吹き飛びますね』

on the calculation,
計算上この近辺一体

「いや、それ聞いたら絶対に撃たないからね!?!」

『It's a joke. 冗談です』

よかった……流石にそんな魔法無いよね。

『If I say exactly, A range of a radius of 20km 正確には、半径20kmの範囲が消失飛びます』

「悪化した!?!」

よけいに使えなくなっちゃったよ!

典矢君、レイジングハートになんてことしてくれたの……

「うう、暇あ」

『ラムダドライバは安定していますね』

『油断大敵』

「うー……やっぱりヴィヴィオも戦う！」

『へ？ここを放棄するのですか？』

「アルちゃん！頑張ってるね！」

『ぶ、分離!?ちよつと待って下さい！ラムダドライバはあなたがいないと効力が弱まるんですよ!?!』

「チェインバー！トランザム行くよ！」

『了解。トランザム』

『ああ、もう！』

|||||

◇

く、硬いな。一応ダメージはあるみたいだけど微々たるものだ。

これだけ接近しているから弾幕の密度も高いし、攻撃しても勢いが止まらない。せめてなのはが攻撃できるように時間を稼がないと行けないのに……

このままではダメだ。何とかして攻撃を止めないといけない……

一つだけ、そう。一つだけ方法は思いついている。途方も無い方法

で、普通に考えれば成功するとは思えない方法……
でも、やるしかない。

「いけると思う？バルデイツシュ」
Of course
『貴方ならば』

そう。そこまで言われたなら頑張らないとね。バルデイツシュも不可能なことは言わないだろうし、この方法は理論的には可能なのだろう。

魔力弾を切り裂き、集中する。

「バルデイツシュ」

『S o n i c f o r m』

バリアジャケットの余計な部分がなくなり、移動速度が上がるソニックフォームになる。ライジングフォームの私の近くに浮く剣はちゃんとある。

やつぱり併用できたんだね。迫り来る魔力弾をなぎ払い、息を吐いて私はイメージする。

考えるのは最速。未だ到達したこともない程の地点。なのはの為に。そして、典矢の助力を受けて私は戦う。

放たれる魔力弾の前に移動し、切り裂く。周りの剣も連動して動いているから一度にある程度の範囲をカバーできる。

一度振りぬいてまた移動し、切り裂く。

周りの速度がゆっくりと動くように感じる。一瞬一瞬の状態を把握できるように、私の意識が加速していく。

さっきまで動いていた魔力弾の動きが段々と止まるように、世界を豹変させていく。

驚くことに宙に浮く剣も私にぴったりとついてきてくれて私の攻撃に合わせて動いてくれる。魔力弾を切り裂く度に私の魔力が回復

するのは不思議な感覚だ。

魔力の消費を考えなくてもいい。全力で戦えばいいのだと、典矢が教えてくれている。

次第に私の世界はどんどん解離していき、魔力弾を切り裂いてから消える迄にもう移動し終えている状況となる。

多分、他の人にしては一瞬の出来事なのだろう。私はその瞬きする間の世界を駆け巡る。

自分の身体が自分じゃないような感覚。魔力弾を切り裂き、攻撃を食い止める。

言葉にしてみれば簡単なのかもしれない。放たれる魔力弾を全て切り裂いているだけなのだ。

自分でもおかしなことをしていると解っている。出来るか確信なんて無かった。それでも私には失敗する未来は見えなかつたんだ……

私は唯……全てを切り伏せるのみ！

|||||

「攻撃がやんだよチエインバー！」

『フェイト様のお陰かと』

「うおおお……フェイトママ何人もいるみたい……」

『今が好機』

「わかったよー！」

|||||

第47話

強さとはなんだろうか。正しいとはなんだろうか。己の生まれた意味はとうの昔に忘れた。望まぬ役目を押し付けられ、持て余す力に翻弄される己は只々滑稽なのだろう。全てに滅びを与えんとするこの力。悍ましくも凄まじいこれを望む者が目の前にいる。敵うはずがないと理解できないようだ。なんて愚かなんだろう。何度私を攻撃してもこの身体には切り傷はつかない。溢れ出る力は止めどなく、勝手に魔力弾を形成し周囲へと解き放っている。

ああ、なんて無様なのだろうか。自分はただこの暴走を眺めることしか出来ない。無駄と知っていながらも戦い続ける少女たちを見つめることしか出来ない。

とは言ってもだ。目の前の魔導師の力量は素直に称賛に値するものだ。放たれる魔力弾を全て先回りして切り裂いている。速度で言えば自分よりも遙かに上をいつているだろう。暴走している身体が勝手に動いて攻撃を放つても到底捉えることなど出来ない。これで目の前の魔導師に私を傷つけるほどの攻撃力があればあるいは私は滅び、暴走は終わっていたかもしれない。

それももしかしたらという話。実際には私の暴走を止めるには足りない。障壁はどこまでも強固に、高速修復も行われており、私の暴走を止めるには時間が足りない。

何も彼女達のことを見下しているわけではないのだ。ただ、彼女達には荷が重すぎるだけ……せめて自分達でも助かるようにと逃げればよかったのに……

このままでは全てが無に帰してしまう。だけど、私にはどうしようもなく……

「フェイトちゃん！離れて!!」

突然、目の前で魔力弾を切り裂いていた魔導師の姿が消える。

それと同時に自分を中心とし囲むように一定の距離離れた場所で凄まじい魔力の力を感じる。私の身体はその魔力を危険と感じたのか回避のために魔力を貯め、動き出す。

「させないよ！チェインバー!!」

『トランザムシステム、クアンタムシステム。共に良好』

「GNビットは全部使うよ!!」

目の前に白と青で彩られた機械を身に纏う少女が瞬間的に現れる。その片手に持つ刀身が大きな剣は空間が歪むほどの魔力を放っている。私の身体は魔力弾を放つのを中断し障壁を強化する。避けられないとの判断なのだろうが、正直ここまで効率よく動く身体が憎い。暴走中なのに何故そこまでの確に判断を下せるのだろうか。このままでは結局意味のないことだ。いかに魔力を貯めようともエグザミアの放つ魔力障壁を破れるとは思えない。

「トランザム!!」

『ツインドライブシステム、起動』

目の前の少女の纏う機械が赤く光り、その手に持つ剣の魔力が急激に膨れ上がる。

いきなりのことで暴走体の身体は対処ができない。魔力障壁を強

化したまま少女の剣を真正面から受け止める。

「クアンタフルセイバー!!!」

エグザミアによる膨大な魔力が込められた障壁は少しも拮抗すること無く、少女の剣で切り裂かれる……

「行くよ、レイジングハート」

そして、視界が桃色の魔力に包まれた……



「……………ねえ、レイジングハート」

『What's up?』
『何でしょうか?』

砕け得ぬ闇がスターライトブレイカーの直撃を受けたのを見届けた私は自身の手に持つデバイスへとあることを聞くために語りかける。

最初に攻撃されていた魔力弾を吸収して魔力を溜めたのはいいのだ。途中でフェイトちゃんやんが魔力弾を止めて、その方法で吸収は出来なくなっただけと特に問題はなかった。寧ろ狙いを定められて確実に当てる事が出来たのでフェイトちゃんはいいい仕事をしたといえる。それで、私が今レイジングハートに聞きたいことなただけ…………

「ブラストモードの時のスターライトブレイカーってこの目盛りでどれくらいの魔力で使ってたの?」

『最大2目盛りです』

つまり、この……………ジェノサイド……………モードは約1.5倍で放てるってことなんだよね?

でもね、一つおかしなことがあるんだよ。

「何で目盛りが16も減ってるの？」
『Because bits ratched it
ビットも撃ちましたから』

うん。ブラストモードでもビットから放てたよ。でもね。あれはただ加算しただけで私が放てる魔力より格段に少ない砲撃した出来なかつたんだよ？でも、あの4つのビット。普通に私が放った最大威力のスターライトブレイカーを放ったよね？残りのビットで変な境界も出来てたし……

つまりね。私が言いたいことは……

「やり過ぎなんじゃ」
『D。n。t m i n d
気にせずにいましょう』

気絶した碎け得ぬ闇を必死に呼びかけるはやてちゃん似の女の子を遠目に見ながら私は考えるのをやめた。